高橋壽菴著

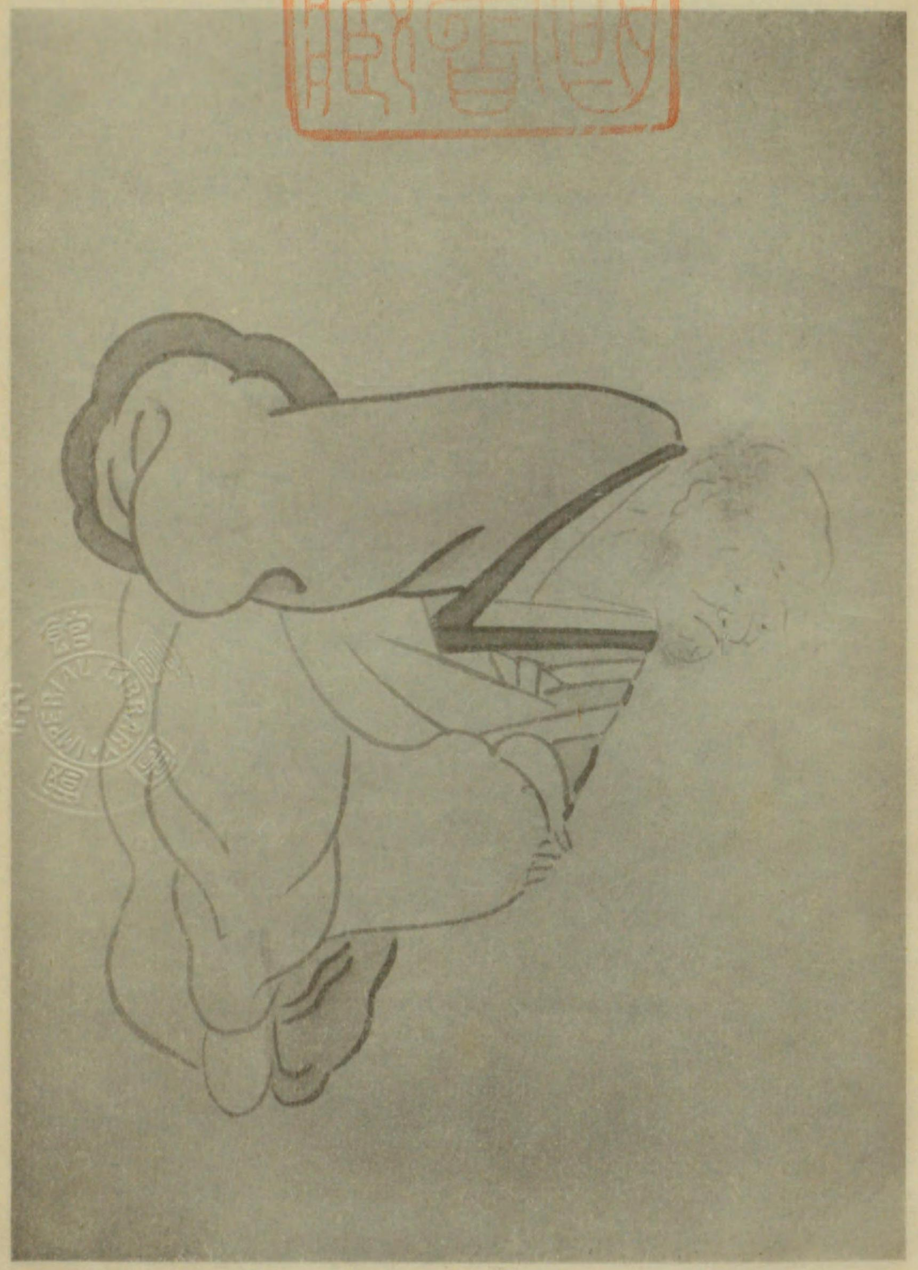
東都茶會記

第一輯

202
299

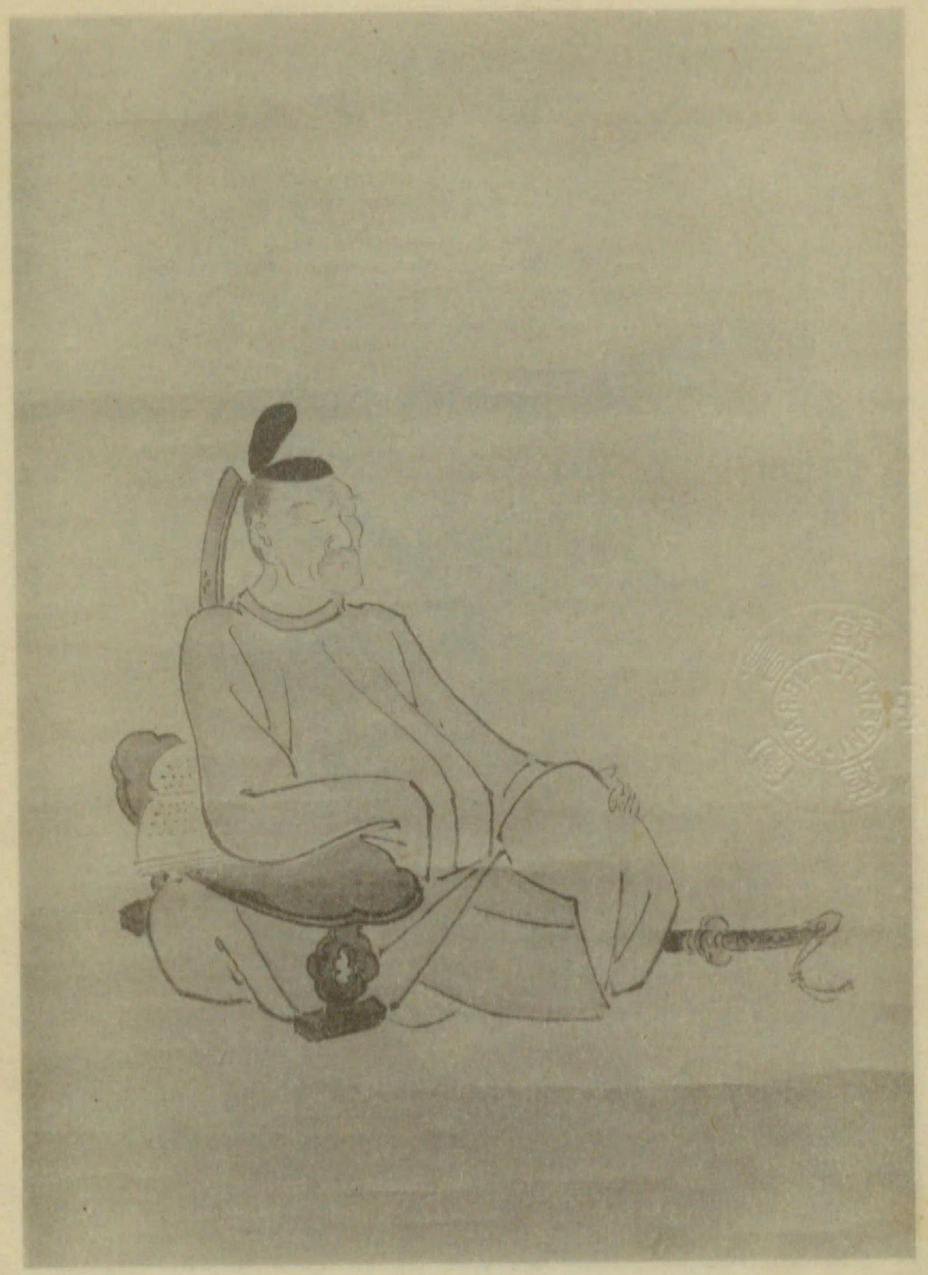
202-299
1200901404488

宮內省圖書寮藏

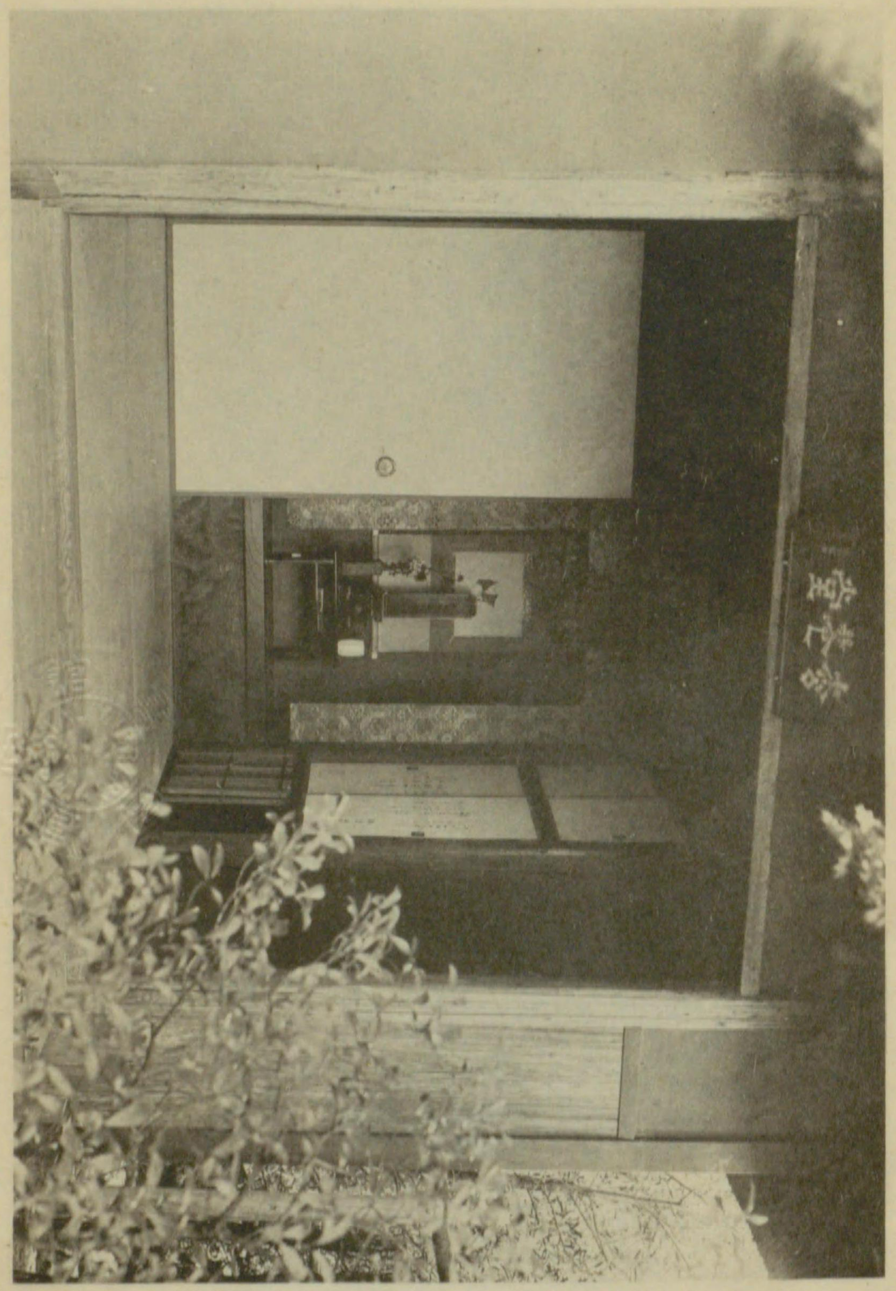


松花堂昭乘像

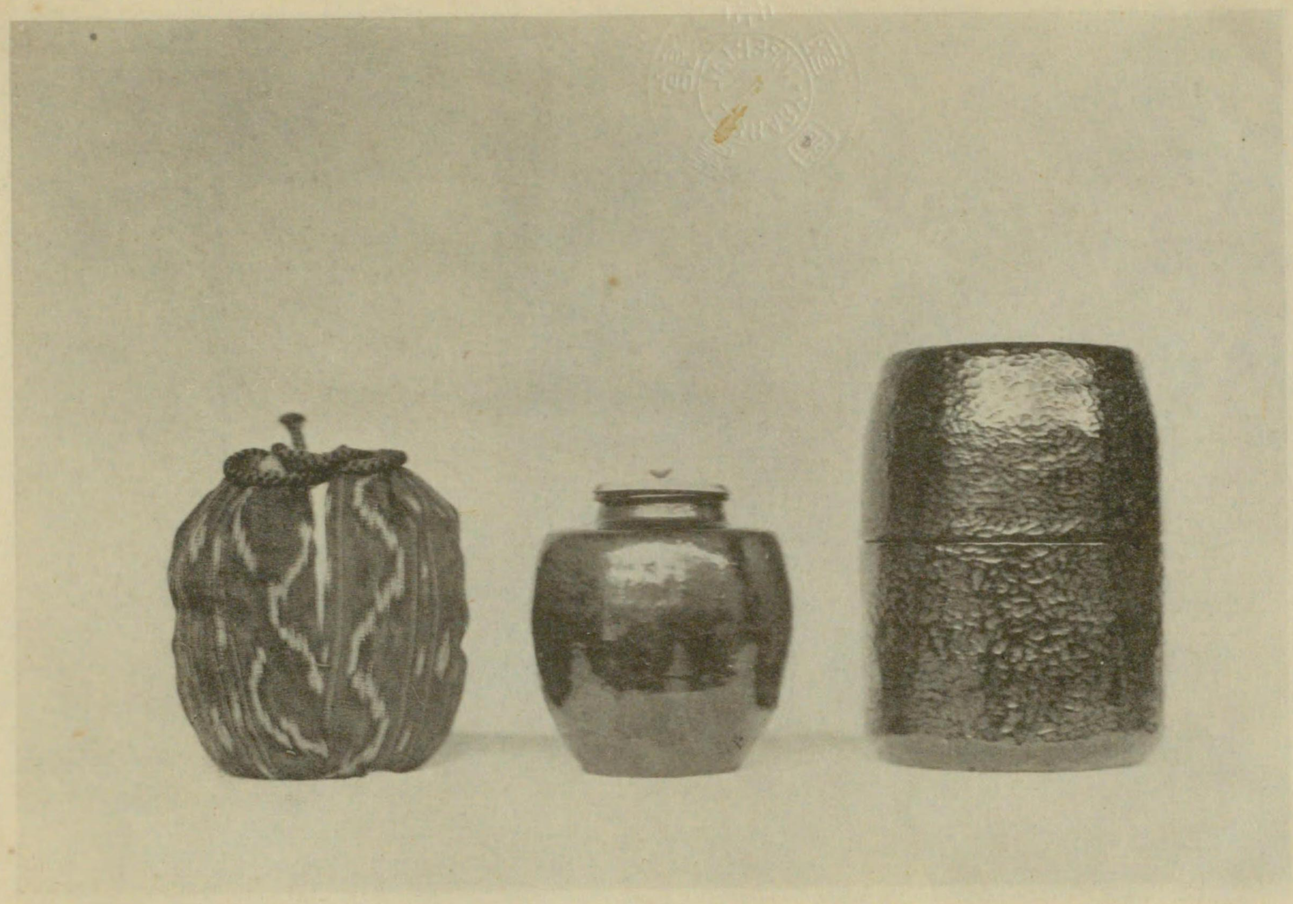
大正
3. 7. 16
內交



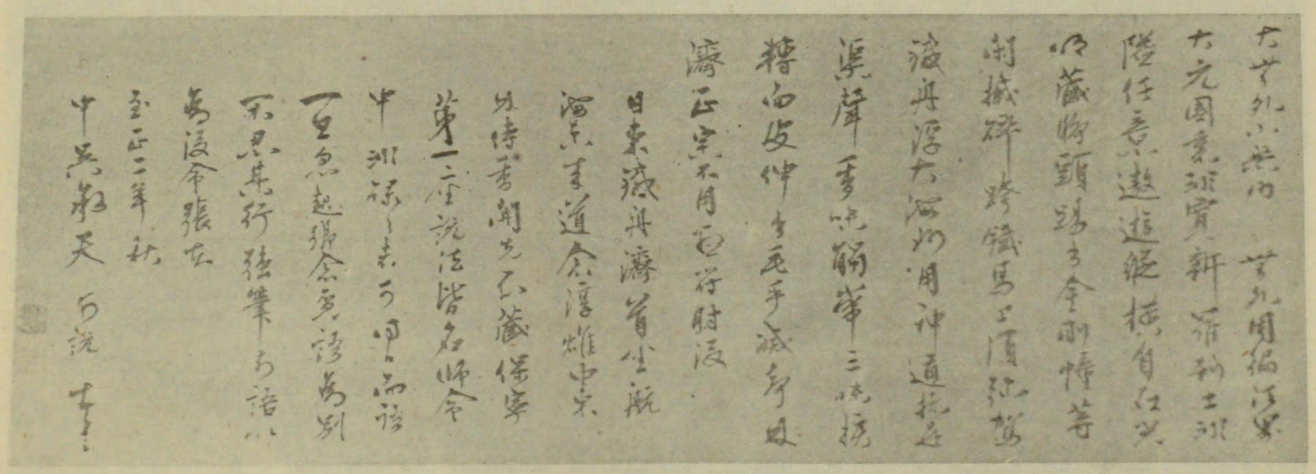
小堀遠江守政一像



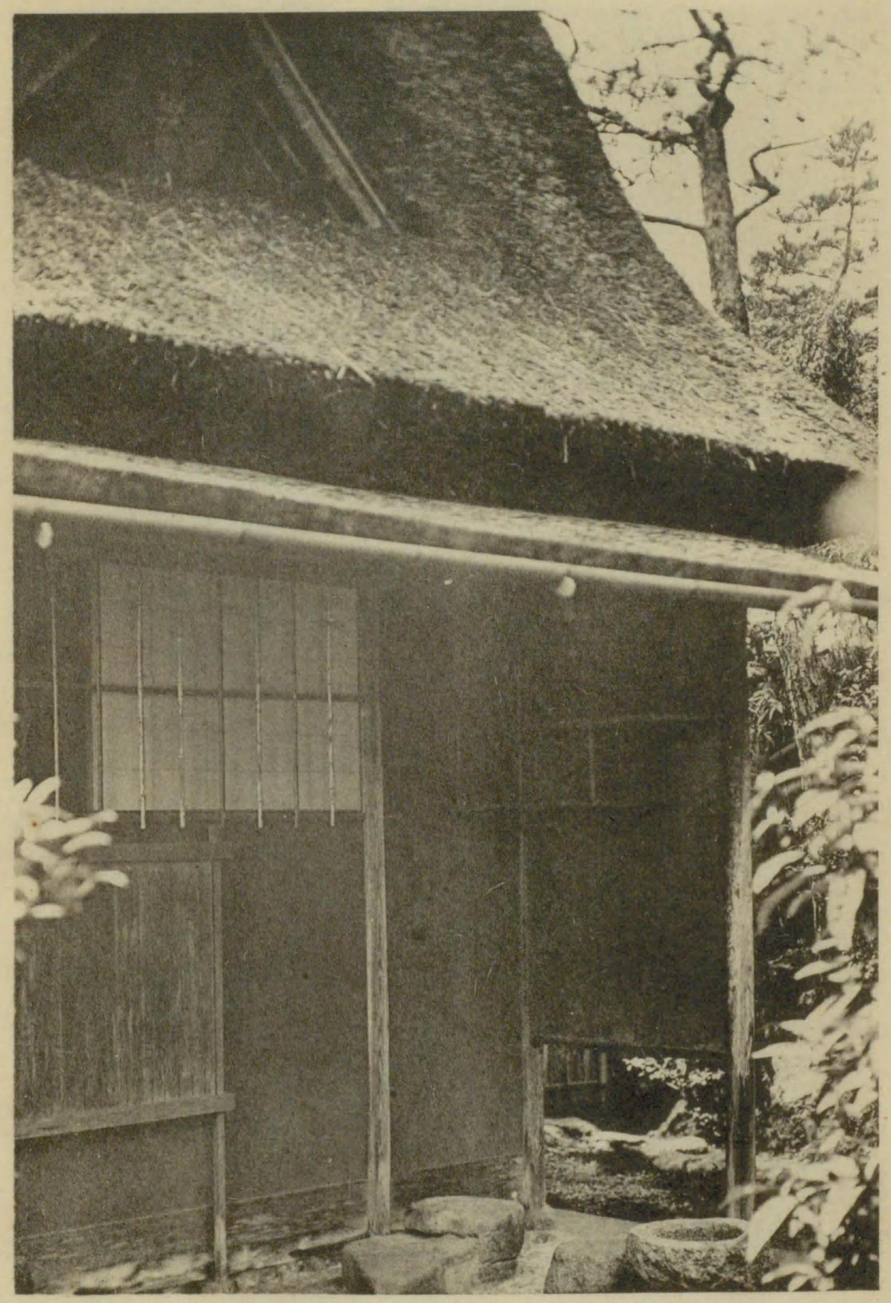
松花堂山城國八幡ニアリ



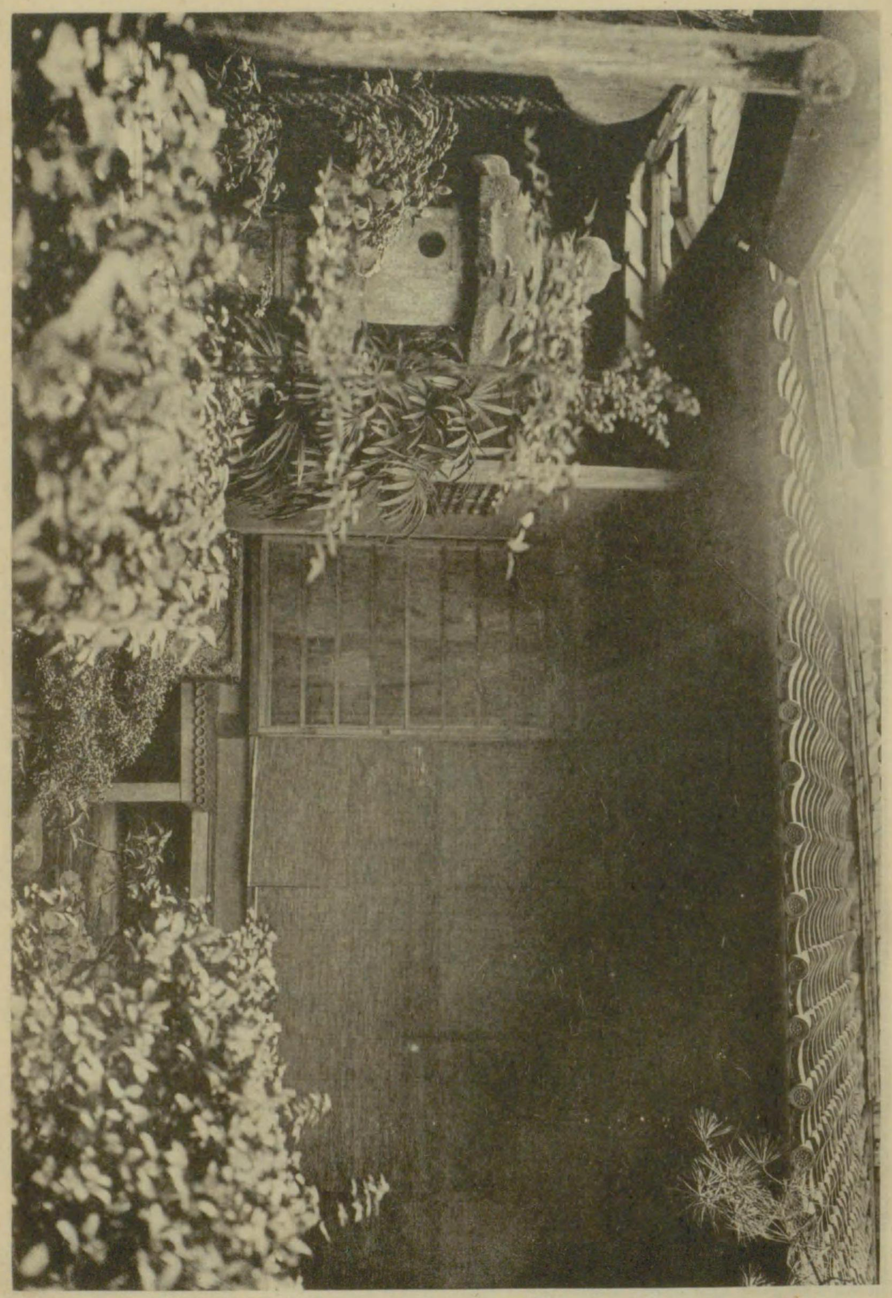
大名物茶入油屋肩衝　松平直亮伯所藏



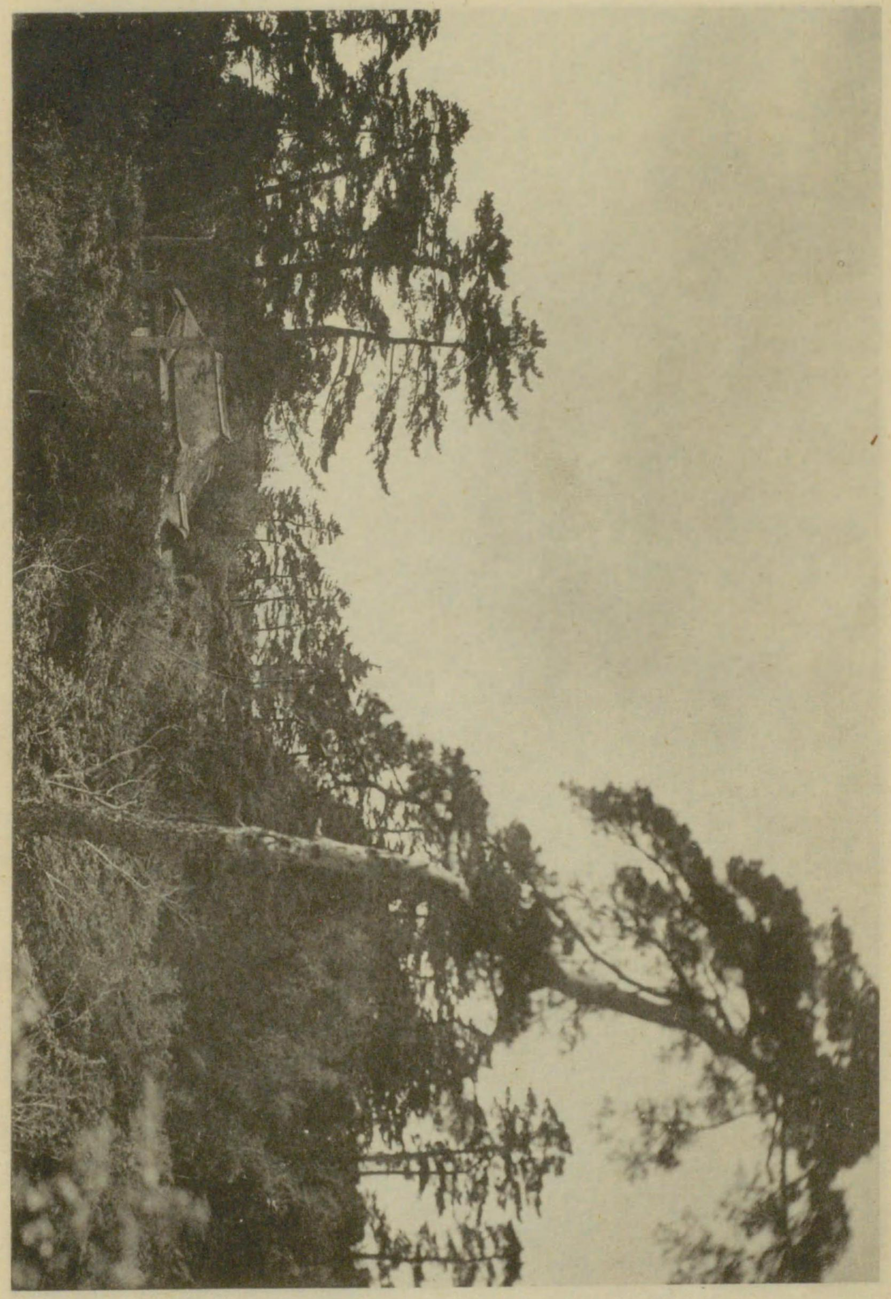
南楚禪師墨蹟　松平直亮伯所藏



菅田庵　雲州松江有澤昇邸ニアリ



皆々軒　大阪吉野園ニアリ



菅田庵全景

東都茶會記第一輯中卷目次

井伊大老の茶道觀（一）　頁一
井伊大老の茶道觀（二）　四
井伊大老の茶道觀（三）　七
井伊大老の茶道觀（四）　九
井伊大老の茶道觀（五）　一二
井伊大老の茶道觀補遺（上）　一四
井伊大老の茶道觀補遺（下）　一七
故園の茶味（上）　二〇
故園の茶味（中）　二三
故園の茶味（下）　二六

關西無茶修行（一）　二九
關西無茶修行（二）　三二
關西無茶修行（三）　三五
關西無茶修行（四）　三八
關西無茶修行（五）　四一
關西無茶修行（六）　四四
關西無茶修行（七）　四七
關西無茶修行（八）　五〇
關西無茶修行（九）　五二
關西無茶修行（十）　五六
關西無茶修行（十一）　五九
關西無茶修行（十二）　六三

關西無茶修行（十三）　六六
關西無茶修行（十四）　六九
關西無茶修行（十五）　七一
關西無茶修行（十六）　七三
松浦伯心月庵茶會（上）　七六
松浦伯心月庵茶會（中）　七九
松浦伯心月庵茶會（下）　八一
詫び茶の奇談　八四
東西茶人の取組（上）　八六
東西茶人の取組（中）　八九
東西茶人の取組（下）　九二
音曲入りの茶會（一）　九五

音曲入りの茶會（二）　九七
音曲入りの茶會（三）　九九
音曲入りの茶會（四）　一〇四
團氏初陣の茶會（上）　一〇五
團氏初陣の茶會（中）　一〇八
團氏初陣の茶會（下）　一一〇
太郎庵壺飾りの茶會（上）　一一三
太郎庵壺飾りの茶會（中）　一一六
太郎庵壺飾りの茶會（下）　一一八
乃木大將追憶茶會（一）　一二一
乃木大將追憶茶會（二）　一二四
乃木大將追憶茶會（三）　一二七

乃木大將追憶茶會（四）　一二八
波多野古溪煎茶會（上）　一三一
波多野古溪煎茶會（下）　一三四
入雲日記（一）　一三七
入雲日記（二）　一三九
入雲日記（三）　一四二
入雲日記（四）　一四六
入雲日記（五）　一四八
入雲日記（六）　一五一
入雲日記（七）　一五三
入雲日記（八）　一五六
入雲日記（九）　一五九

入雲日記（十）　一六二
入雲日記（十一）　一六四

東都茶會記中卷

箒庵

井伊大老の茶道觀（一）

世の猶ほ諒闇に入らざりし或る一日井伊伯爵邸に能樂の催しあり主人樂堂伯花月、葵上、大佛供養を舞はるゝに就き余も案内を得て當日同邸に赴きたるに表書院四間を打通して床に向ひたる下段の間が敷舞臺、上段の間が正面見物席、他の二間が脇正面見物席にて舞臺後より一面に通ずる長廊下が橋掛と爲り舞臺背景は狩野常信筆の老松橋掛りは同じく小松の金屏風を立て列ね扨て正面の床にはメクリの儘なりしを近年表裝したりと云ふ文晁の行山水三幅對を掛け違ひ棚には抱一上人好みの蒔繪硯箱を飾られたるが其圖柄物柄の立ち優りたる普通大名家の裝飾品と同年に談ず可きに非ず當家代々の君公中に定めて美術鑑賞者ありしならんとは、一見直に推斷し得らるゝ程なりき甞て骨董商の古老より聞きたる事あり現伯爵の祖父直弼公大老たりし時、本邸は今の參謀本部の處に在りし

が日々登城して歸邸の際出入の骨董商は持參の道具を廊下に陳列し大老の玄關より居間に通過さるを待ち受けて一瞥を乞ふの慣例にして其陳列多き時は廊下は骨董露店の觀を呈する事あり其道具を左顧右盻して偶々氣に入りたる者あれば命じて買上ぐるを日常の樂みと爲し彼の彦根屏風とて同家に有名なる浮世又平の風俗畫も此廊下露店に於て大老の親ら掘り出されたる者なりと云ふ余は此古老の談片と御能拜見當日の陳列品とを思ひ較べて猶ほ更に井伊大老の半面政治以外の逸事談を聞く由もがなと窃かに其機會を待つ程もなく舊彦根藩士にして文學士なる中村勝麿氏が井伊家歴代の史實を調査中なりとて紹介の勞を執る者あり即時氏に面會せしに一見舊の如く遺書遺物に據りて深切に説明する所あり依つて以て井伊家近代の主公中に就き殊に大老の波瀾起伏趣味横溢せる事歴を詳にすることを得たるは余が望外の仕合せなりき。

井伊直弼は直中の十四男にして固より家督を相續すべき身に非ず文化十二年を以て生れ十七歳までは彦根城の第二郭欅館に居住せしが乃父が崇佛の感化を受けたるにや十三歳より香華院たる清凉寺に入りて曹洞の耆宿獨掌道鳴和尚及び泰總師虔和尚に師事し身を雲衲に伍して禪門の嚴規に服すること實に六年間に及べり斯くて十七歳にして父を亡ふや欅館を去りて部屋住の身と爲り一年三

百俵の合力米に依りて窮乏なる生活を味ひ其居を埋木舍と名けて武術歌道茶事禪學等の研修を怠らず年二十江戸に招がれて大名養子の候補者に擬せられたれども事成らずして歸國するや身を僧門に投じて長濱大通寺の住持たらんと希願したる事さへありき左れども時運未だ至らず百事意の如くならざる埋木舍の寒生は二十八歳にして浪人長野主膳と相識り交情水魚の如くなると同時に學問上には一敵國を得て競爭的勉强を爲したれば切磋琢磨自から大器と爲り一朝盤根錯節に逢はゞ將に其鋭利を發見せんとするの準備全く成り居たる者の如し是より先き當主直亮に實子なく弟直元を世子と爲したるに弘化二年病歿したるを以て直弼は直に順養子と爲り三百俵の部屋住より一躍三十萬石の相續者に進みたる其榮枯轉變不可思議の運命には直弼自身も落涙の二字を以て説明するの外なかりしと云ふ是れ實に直弼が三十二歳の冬なりき。

直弼は三十二歳にて世子と爲り三十六歳にて當主となり四十四歳にて大老と爲り四十六歳にて落命せり性來多感多能なるに加へて一事を研究する毎に其蘊奥を極めざれば止まざる氣質にて武術に於ては槍及び居合を善くし和歌は新古今調にして柳の雫と題する歌集二冊あり能樂も堪能にして能狂言には鬼が宿なる自作一番あり禪道は殆んど專門家の壘を摩し元僧高峰原妙禪師の六轉語を評して

清涼寺の仙英和尚に示したる詠歌の如き慥に悟道徹底の風趣を具備したりと云ふ書は達筆、畫は脱俗、其他文武藝術殆んど通ぜざる所なしと雖も中に就き研精修練の結果石州流に禪味を加へて宛然一派を開きたる茶道の造詣に至りては啻に大名藝に非ざるのみならず直に斯道の大宗匠たる力量を備へたる者の如し余は是れより此大宗匠たる井伊宗觀居士の茶道觀に就き聊か見聞の一端を記して斯道に志ある人の參考に供せんと欲するなり。

井伊大老の茶道觀（二）

井伊直弼は宗觀と號し其訓に因りて無根水と書きたる事もありたり彦根第二郭尾末町に部屋住の頃は其居を埋木舍と稱し其玄關側容膝の一室を澍露軒と名けて之れに起居したる由平常柳を愛して書箋狀袋、煙管其他の用具に柳の模樣を好み自から圖案を製せしものも少なからず柳王舍又は曉柳堂の號あり利休が茶禮の奥儀と稱する彼の和敬清寂の心をよめるとてものせる歌に

そよとふく風になひきてすなほなる
すかたをうつす岸の青柳

の一首あり其柳を愛したるも畢竟茶事の極意を寓したるに非ざるなきか茶式に就きては當時在江戸石州流の宗匠片桐宗猿に師事したる者の如く獨學研究の結果を箇條書きにして宗猿の所見を尋ねたる問答書は其幾十通なるを知らず各流の茶書を渉獵して會心の處を收錄し又は見聞の逸事を記述して一書を成したる者を閑夜茶話と云ひ斯くして多年研修の末、茶事に關する自己の考案を裁定し一種宗觀流とも稱す可き法式を集成したる者を茶湯一會集と名けたり而して其一會と云へる次第に就き宗觀自から卷首に言明せる所は左の如し。

此書は茶湯一會の始終、主客の心得を委しく著はすなり故に題號を一會集と云ふ猶ほ一會に深き主意あり抑も茶湯の交會は一期一會と云ひて例へば幾度同じ主客交會するとも今日の會に再び返らざる事を思へば實に我が一世一度の會なり去るにより主人は萬事に心を配り聊も粗末なきやう深切實意を盡し客も此會に又逢ひ難きことを辨へ亭主の趣向何一つもおろそかならぬを感心し實意を以て交るべきなり之を一期一會と云ふ必ず〳〵主客とも等閑には一服をも催すまじき筈の事卽ち一會集の極意なり流祖石州も人の茶湯にならぬ樣にせよと常々示さるゝ此ことなるを知るべし扨て茶湯の趣向には大低茶會毎に同物を出さず飾りを換へ手前を工夫し只管客に珍しがらせ

んとのみ心掛くるは嗜茶の輩の常にして左る事なれど器物飾り等變れば自然と主客の氣持も變り挨拶の都合にもよき道理にて實は仕易きより多くは斯の如く爲せども茶事得道の上には强ち品を取かへ飾り手前等變らざれば茶湯の趣向成らずといふ謂れ曾てなき事なり南坊宗慶が利休の懷石日記を書拔き利休へ見せ奥書を乞ひし時、利休答へて年中毎會の内、品替へするばかりを御書拔き候事心得ず候、面上に御思慮承るべく候吳れ〴〵相替る事なく日々同事ばかりの内、心の働きは引替へ〳〵如何樣にもある可く候、所作飾り置合せの珍しき事は快からざる會にて候と云々誠に尤なる教訓、何時も同物を用ひ飾り手前迄尋常にして心を引かへ改めてもてなす事茶道の大本なり。

今日の我は明日の我に非ず然らば則ち今日の茶會も亦昨日の茶會に非ず爰に一茶會を催せば其茶會が卽ち最後の茶會なり果して最後の茶會ならば一期の思ひ出に有らん限りの心を盡して客の滿足を求めざる可らず而して其滿足を求むるは器物のみに非ずして客に對する深切の心入れ如何に在るなりとは宗觀宗匠の所信なるが如し是に於てか茶會の最後に獨座觀念の一大事を主張す此觀念を缺きたる茶の湯は所謂人の茶の湯なりと喝破するに至れり。

井伊大老の茶道觀（三）

由來茶事と禪味とは密接の關係ある者なれども末世の宗匠は形式に泥み輕薄の茶人は器玩に耽り共に惡趣に墮して和敬淸寂の本旨を失ふに至る是れ直弼が時流に慨し自我本位の一流を工風したる所以なり乃ち一會集中に一大事とする獨座觀念の如き時流茶人輩の夢想だに及ばざる所にして茶事も此境涯に至れば飮食懽娛以外に靈聖なる或る妙味を存する者の如し今其の獨座觀念の一項は左の如し。

主客とも餘情殘心を催し退出の挨拶終れば客も露地を出るに高聲に咄さず靜にあと見かへり出行けば亭主は猶更の事客の見えずなる迄も見送るなり扨て中潛り猿戸その外戸障子など早々〆立などいたすは不興千萬一日の饗應も無になる事なれば決して客の歸路見えずとも取かた付急ぐべからずいかにも心靜に茶席に立もどり此時にじり上りより這入爐前に獨坐して今暫く御咄も有べきにもはや何方まで參らるべきや今日一期會濟みて再びかへらざる事を觀念し或は獨服をもいたす事是れ一會極意の習なり此時寂寞として打語らふ者とては釜一口のみにして外に物なし誠に自得

せざれば至りがたき境界なり。

石州の所謂人の茶の湯にならぬやう心掛くれば客の未だ來らざる前も其已に去りたる後も我れに我が茶の湯ある筈なり世間的の宴會は歡樂極て哀傷多きが習なれども我が茶の湯には客去りて後も爐邊猶ほ獨樂の存するあり直弼嘗て二客を招ぎ茶事終りて後左の一首を詠じたりと云ふ

小車にあらてもこよひ春雨の
道に並へるあとそ見まほし

是れ蓋し獨坐觀念中二客が車の双輪の如く道に並んで歸り行く後影を想ひ浮べたる逸興ならん其の茶事に禪味を寓して心裏に明滅する鏡花水月を樂む境涯尋常宗匠の企て及ぶ所に非ざるなり直弼の所著一會集は正風體の茶の湯始中終一切の心得を記して漏す所なく利休を茶聖、石州を亞聖として嚴正に其作法を祖述せし中に自から一見識を立てたるものあり例へば床の花の挨拶の條に

生花は有爲轉變飛花落葉を觀ずる事專要にして見る内にも色かはりうつろひ行くものなれば永々と目をとゞめて見るものにあらず挨拶すめば主客とも再び見ざるが習ひなり。

とあり濃茶茶碗は正客より順次下に置きて受け渡しすべきを說きては

千家にては茶碗を手より手へ渡せども當流にては大に嫌ひ候大切の御茶、大切の茶碗と申し中にて受取り渡しする事甚だ粗相のあつかひなり、香家にて香爐を下に置きて渡すも同意なりと云ひ又懸物の懸け方心得の條に

掛物は早く懸け置かざれば落付かぬものなり兩三日以前より懸けるがよし、掛物は先づ棹にて懸け左右の軸を持ち少し裏へ卷かへし又表へもどし風帶の折目露を直すべし扨て幾度も退き見て歪みをとくと直し我心に十分におもふやうに懸くるなり掛物能く懸りたると懸らざると有りて功者は之を見る事なれば大切に心得べき事なり千宗旦客に行きて今日の掛物は能く懸りたりと譽められし事折々ありとぞ

云々とあり而して直弼が尤も熱心に主張したるは披の間卽ち廣間全廢論なりき請ふ次項に之を記さん。

井伊大老の茶道觀（四）

目下東都に於て行はるゝ茶會には披の間卽ち廣間を用ゆる事頗る多く爐、風爐の名殘又は歲暮など

殊に佗たる茶會の外は濃茶終りて後薄茶は廣間にて差上ぐべしと言はざる者なし近頃京都より出張したる表千家の宗匠は此有樣を見て是れ甚だ謂れなき事なり關西にて客を廣間に案内するは更に吸物を出して一献を侑むるか或は他に廣間を要する理由ありて然る者なれども東京にて廣間に動座するは何等動座の必要を認めず夫れとなく主人の自慢品を示す機會とは爲るべけれども結局小間に於て出し得べき薄茶を供するに客を煩はして動座せしむる者にして誠に不都合千萬なりと云へり然るに直弼は一歩を進めて廣間全廢論を主張し獨り一會集に於て之を規定せしのみならず更に披間の辨の一篇を作りて其所見を告白するに至れり其文左の如し。

披間の辨

今世流布の數奇者茶湯をもよほすに懐石濃茶すめば御退屈にも候はんとて披間にうつり薄茶を點じ或は酒肴蕎麥やうのものなど出す事もありとぞ利休が立て置きたる草庵の清風には背ける事にて實に歎息の至りなり南坊錄置棚の書に曰く近年小座敷の茶濟て又書院或は四疊半などへ出て茶よ菓子よと馳走すること始りたり宗易の亭へ御成の時兼て何々の飾り御覽あるべきとの御内意ありて小座敷御茶濟て四疊半にて袋棚書院にて菓子など段々御覽の事折々ありしなり然るを御内意の仔細を人知らず小座敷濟みて必ず四疊半か書院にて馳走をせでは疎略の事かと心得京堺はし〳〵はやり出る程に備前宰相殿淺野殿宗及へ相談の由にて鎖の間とて別段に座敷を作る事あり毎々小座敷濟て又此席にて會あり此事を宗易傳へ聞たまひ是れ後世に佗茶湯のすたるべき基なりとて態々御兩所へ參り御異見申されしとなり此後は御成の時は小座敷なれば小座敷書院なれば書院兎角一日に席をかへての飾りの所作、御斷申されしと云々利休時代にもかゝる事はよき事のやうに思ひて催す事のありしは淺間敷事なり然るに利休後世の成行を前見して深く戒め置れしは殊勝にも感ずるに堪へたりかゝれば披の間の事は世に絶て有まじき事なるを遠州時代に至りて又此事始んになり披の間、鎖の間なくては茶湯不整やうになりしとぞ故いかんとなれば遠州は御治世の初めに天下の御師範を蒙り專ら茶道をひろむべき時に當りて世上の人氣に應ずるやうに茶をも立て元來性質も物ずきある事なればかたく〳〵古風にそむく事まゝ出來たり其後流祖石州宗關先生は茶事の大道失はれん事を深くいたみ只管古風佗の茶を修行有りたるより普く天下に名高く終に御師範とも定められし事は亦格別の謂にて關師にてぞ披の間を用ひらるゝ事はいかにも有まじく一日一席の茶なるべしと思ひ定めたるを一年江戸にて片桐宗猿先生へ茶事の條々尋ねし次で彼の披の間の事を論じたりしに石州も披の間用ひられし由猿先生の答を聞き兼て思ふに齟齬して本意なき心地しぬ扨て默止し難き事なれば余窃に按ずるに古風佗の茶味を識得せられし關師の此披の間を用ひられしと聞くはいかにも不似合のやうなれど關師も大名の身柄たま〳〵大名族本衆などの突合に無據茶事不得道の面々茶湯所望など有る事あらん箇樣の客を招ぐには亭主ばかり古法を守りて何かせん茶事は大抵に早く濟せ小座敷休息の間等へ移られしなるべし左れば客も退屈なく自ら茶道へ導く方便ともなりなんか兎に角に不得道なる客には如何に心を盡しても詮なき事なればいかにも茶事は切上げて小座敷へ出ては茶の本意をば打捨てつき合せられしなるべし是れ遠州の如き茶道の規定として用ゆると無據用ひられしとの差別、天地懸隔の違ひなり流祖の披の間を用ひられしは恐らくは此仔細なるべし實意の茶湯をいたされ客も亦得道の茶人ならば披の間の事努々思ひ寄らずかし

安政四丁巳年初冬

澍露軒主人宗觀記

是より先き直弼は披の間の古式に非ざるを看破し其古式を嚴守する石州は定めて披の間を用ひざりしならんと信じて當時在江戸石州流宗匠片桐宗猿に尋ねたるに石州も亦時に披の間を用ひたる事ありとの回答を得て之れに服せず終に披間の辨を作りて宗猿の批評を求めたるに宗猿は直に同意を表して承認の奥書を爲したりと云ふ世上の茶會動もすれば所謂道具茶に流れ名器雜陳是れでもか〳〵

と道具攻めするをのみ能事とする今日に在りては是れ實に茶道の一大問題にして單に東都の茶人のみならず全國各流誰れ彼れの區別なく大に之を講究して現代に於ける此問題の歸着點を定めざる可らずと信ずるなり。

井伊大老の茶道觀（五）

目下東都の茶會に於て數寄屋の趣向申分なく清興室に滿ちて茶味津々たる處にイザ廣間にと案内せられて席を移せば心も變り滿を引きたる興は醒めて餘韻嫋々たる可き松風も階前數歩の中にて音絶え廣間の爲めに一日の好茶會をメチャ〳〵に破却し去らるゝ場合少なからず是れ少しく茶事を解する者の容易に感覺し得る所なり況んや茶禪三昧に入り尋常茶事の一會も尚ほ且つ一期の大事として眞面目に其趣味を感得せんとする宗觀宗匠に於てをや常に器玩の末に奔り炫耀主義を振り廻はして俗氣滿々たる披の間の俑を作りたる彼の遠州に慊焉たるは固より其所なりと云べし蓋し直弼は曹洞禪を學んで深く悟入する所あり其茶道觀たる已に禪味七分なり。

茶の湯とて何かもとめんいさきよき

こゝろの水をともにこそくめ

の一首の如き亦以て其一端を窺ふ可きなり彼は茶事に於てのみならず歌にも畫にも悉く禪氣あり。

布袋自畫讃

花さかりくまなき月のながめより
心のちらてすむ庵かな

達磨自畫讃

すみにごるあとこそ見えね谷川の
その水上にわけのぼりては

右の二首能く之を證するに足らん然れども單に冥想默座のみに耽る人に非ず其茶事を督するや露地草庵の掃除、調膳、挿花、點茶に至るまで躬行實施して勞苦を厭はざる宛然專門の宗匠の如し茶器膳碗其他各種の意匠に富み其好みを以て調製せし者枚擧に暇あらず嘗て其工風を以て銅製漣風爐を造る風爐に漣の地紋を描き自詠の『沖わたる風さへ見えてさゞなみのよせくる浦ぞ涼しかりける』と云ふ一首を彫付けたる思ひ附き尋常茶人の企て及ぶ所に非ざりしと云ふ又嘗て參勤交代の際某驛

の本陣にて格好よき衣桁を見附け親ら其圖形寸方を記錄して他日の參考に供したるが如き用意周到にして其執心の淺からざるを見るべし左れば其好みに成りたる器具にして今尚ほ井伊家に保留せられ茶人の賞玩に値する者少なからざる由他日實見して之を記述する機會もあらば幸甚のみ。

終に臨んで一言せん幕末直弼の大飛躍は得失如何茲に論ずべき場合に非ず然れども彼れは少壯禪理を究めて之を根本觀念と定め茶も歌も書も能も槍も居合も其他處世一切も渾て此觀念より割り出して極致に達したる者の如し然れば彼の開港鎖國の問題の如きも例へば大和尚より公案を與へられたると一般彼れは一場の禪宗問答として終に其答案を提示せし者なるべく其可否は暫く措き彼れが嘔血工風を以て一斷邁進したるは固より疑を容れざるなり是れ余が彼れの茶道觀は其政治觀を窺ふ可き一助と爲るべしと思ひ爰に其大要を記述する所以なり。

井伊大老の茶道觀補遺（上）

余は曩に中村文學士の好意に依り井伊大老の茶道に關する遺書を一覽することを得て其茶道觀の一斑を記述し他日好機會あらば大老の愛翫したる茶器並に其意匠に依りて製作したる器物を一覽せん

せんと期待したりしに去る九月五日井伊伯爵家に於て什器類の蟲干に着手せらるゝ由傳聞し直に參觀の希望を述べしに幸に同家の快諾を得て同日午前九時より井伊家に至り其所藏茶器一覽の宿望を達することを得たるは誠に有り難き次第なりき。

當日井伊家にては表書院大廣間の所狹く各種の茶器書畫を陳列せられたるが床には井伊直孝が德川家康より拜領したりと云ふ大名物牧溪筆猿鶴二幅對を掛けられたり幅二尺五寸竪五尺許の絹本大幅にして京都大德寺所藏牧溪筆中觀音左右猿鶴三幅對と東西相對峙すべき者なるべく然かも其沈着なる畫品に至りては此幅蓋し牧溪中の白眉ならんか此床に對して陳列したる器物の背景として宗達筆三十六歌仙に近衞三藐院公の和歌散らし書きの六枚折屏風一双、狩野元信の四季耕作六枚折屏風一双を立て置かれたるが三十六歌仙は極彩色にして稀世の珍物、當家所藏の彦根屏風と相對して相下らざる者なるべし扨て器物は甚だ多く一々記述すること能はざれども釜に於ては大老愛翫の天明車軸釜津田宗及が北野大茶の湯に用ひたりと云ふ古天明常張釜豐太閤の愛翫したりと云ふ萬年春三字の釜八幡瀧本坊傳來と稱する蘆屋茄子鐶附の釜何れも非凡なる中にも古天明常張釜は流石名物丈けありて作行き格好地肌とも一見敬服の外なきなり香合の祥瑞横瓜及び蜜柑は綺麗と云ふべく交

趾の紫鹿は結構と云ふべきものなれど殊に比類なきはノンコウ作交趾菊蟹寫なり雅味ある中に蟹など最も精作にして黄色中に紫色を帯びたる藥工合得も言はれず樂燒を珍重する關西地方に持ち行かば如何に歡迎せらる可きやと思はるゝ程なりき硯箱は笠翁作象の蒔繪尤も面白く茶杓は利休、紹鷗、遠州、石州、宗旦等大家は殆んど洩らさゞる中にも遠州作銘百千鳥最も傑作と見受けたり斯くの如く名品陳列の間に在て茶碗に逸物を見當らざるは甚だ不審なるに就き之を家令に尋ねたるに當家の什器は一半彦根の舊濱御殿土藏中に保留し東京に持ち來りたるは僅に其一部に過ぎずとの事なり惟ふに彦根の寶庫中には必ず他の諸銘器に匹敵すべき茶碗を發見することならん。

扨て當家には鳥井肩衝と稱する有名なる茶入ある由なれども當日は之を拜見することを得ず左れど茲に特筆大書すべきは宮王と稱する大名物の茶入を拜見したる一事卽ち是れなり元祿十年井伊家より時の幕府執政柳澤甲斐守に差出したる記錄に據れば宮王の御茶入は元和元卯年駿府に於て權現樣より安藤帶刀御使として拜領家に傳へ重寶に仕るべき旨上意、今度大阪表戰功御感の餘慶なりとあり卽ち此宮王は井伊直孝が大阪陣に於ける拔群の戰功に對して家康より賜はりたる者にして今日なれば功一級の金鵄勳章にも當るべきものならん當時賞與は此れに止らず病身なる兄直勝の所領十八萬石中より三萬石を其隱居料に分ちたる殘り十五萬石に更に十五萬石を加へて直孝は三十萬石に封ぜられ德川四天王中第一の高祿を賜はりたるは家康が如何に其勳功を認めたりしかを知るとを得べし扨て此宮王の茶入は黑塗の挽家に入り袋は已に朽損じたる者もあれども淺黄地に浪梅鉢模樣緞子と名の知れぬモールに似たるものと二個は完全なるに似たり茶入の形は肩衝にて胴に一本横筋ありて黑味を帶びたる飴色藥の中に二箇所程海鼠藥のなだれあり勿論唐物にて手取り輕く全部瑕も手摺れもなく口は玉緣にて見かへしあり底は板おこしにて作行き精妙且つ堂々として貫目あり稍大形なれども左ればとて鈍大ならず如何樣大名物中の首位を占むべき御茶入とは拜見せられたり又此茶入の外箱は何と云ふ木にや厚く抉り拔きたる者にて如何なる重量が落ち來るも又は之を投げ出すも其箱の毀るゝ心配なく天下の重寶を保容する外箱は斯くの如くにして始めて完全なりと云ふべきなり。

井伊大老の茶道觀補遺（下）

井伊家にて一覽したる陶器中に湖東燒と稱する者あり從來江州には天秤棒を荷いで諸國へ出商賣する所謂江州商人はありしかども工業家は殆んど皆無なりき然るに文政十二年井伊直亮藩主たりし時

彦根の商人島屋平助、西村宇兵衛、絹屋半兵衛の三人始めて陶業に志し所謂湖東燒なる者を開始するに至れり斯くて刻苦經營十四年を閲したれども收支相償はず將に廢滅に歸せんとするに至りしかば天保十三年藩主は之を藩業に移し尾張より佐平、德四郎、佐治右衛門等の陶工を招ぎ加賀より村井勘介京都より小林源六及び鳴鳳飛驛より篁齋など稱する陶器畫工を聘して先づ祥瑞寫を作り續いて赤繪金襴手等を學び非常に精巧なりしかば弘化嘉永の際に及んで聲譽遠邇に馳せたりと云ふ嘉永三年直弼封を襲ぎて後は益〻之を奬勵して茶趣味に因り更に寂びたる樂燒の如き者をも製造せり現に當日の陳列品中にも直弼の好みに依りて製作したる湖東燒七種の蓋置あり其他鉢、丼、水指、花瓶等染附に赤繪に精美目を驚かすもの尠からず近來本邦陶器を愛する西洋人は湖東燒を珍重して之を買收する者頗る多く夫れかあらぬか今は其品甚だ拂底と爲りたる由なり。

扨て直弼の意匠に成りたる遺品にして當日陳列せられたる者の中には時の塗師宗哲の手に成りたる十二箇月棗あり十二個悉く其月に因んで着想警拔ならざるなし又彼の漣風爐の外に直弼の製作に係る茶杓三本あり曰く面影曰く小笹の露曰く萬年即ちかめのよはひ是れなりかめのよはひは其櫂先き龜甲の如くなるに因り此銘ありしものなるべく三本中第一の傑作なり直弼の茶杓は謹嚴にして羈

氣なく恰も古宗匠の作品を見るが如し兎角素人の茶杓には無骨殺風景か若くは奇を衒ひ巧を示さんとする者多く我れは素人なり宗匠に非ずとの我意明かに作品に現はるゝが常なれども直弼は茶事に眞摯なりき禪理を含みたる一種の儀式として之れに敬虔の心を存したりき此心直に茶杓の作行きに現はれて縱令ひ一刀三拜の禮は爲さゞりしまでも極めて謹直に製作したる者たるは一本の竹片に於て歷々之を見ることを得べし余は直弼の所著茶湯一會集を讀んで彼れが極めて眞面目なる茶人なりしを想見せしが此茶杓を見るに及んで其果して然りしを認め取りも直さず此茶杓は一會集に裏書きしたる者なる事を知りたり又直弼の筆蹟は歌及び發句など種々陳列せられたる中に

釜の蓋そろりとおいて杜鵑

と書きたる短冊あり又最も面白きは氣の字を長く書き心の字を丸く書き腹の字を横に書き勤の字を正しく書き言の字の最後の一畫だけを書き殘して左の如き歌あり

氣は長く心は丸く腹たゝず
勤はきつと言はのこして

尙ほ直弼の好みに依りて製作されたる膳碗煙草盆煙管其他の器物は極めて多數なる由にて其如何に

茶道に熱心にして如何に意匠考案に富みたるやの一班を窺ふに足らん要するに直弼は性來多能なるに加へて一事を學べば其蘊奥に達せざれば已まざるの精根あり禪學を根柢として武藝和歌茶道能樂等に及び精細緻密に研究して殆んど專門家に迫りたるは常人の企て及ばざる所なりき然れども彼れは幕末の大政事家なり些々たる末技を以て之を輕重すべきに非ず唯だ其末技に對する彼れの觀念を知りて其政治觀を研究せば更に一段の興味を增すことならん是れ余が井伊大老研究の側面觀として玆に彼れが茶道上に於ける言行の一班を記述したる所以なり。

故園の茶味（上）

花ぞ昔の香ににほひけると歌人が口吟みたる昔より故郷ばかり戀しきはなし余が生れ故郷の水戸下市三の町を巢立ちて東京に飛び出したるは明治十四年にして當時この武者小路は寂れながらも猶ほ舊藩時代の面目を留めたりしが同十七年の大火後は元の垣根も野と爲りて昔に似たる影だになく同町數十軒の士族屋敷も余の實家の外唯一軒舊株を守る者あるのみ何時ぞや歸省して今昔の感に堪へず

故郷といへと昔をしのふへき
たよりなきまてかはりはてけり

と詠み出でたる事ありき斯くても余が折々歸省を思ひ立つことあるは故郷に年老たる兩親ありしが爲めなり余の家系は長命者多く兩親共に健在せる間に四男なる余が口善惡なき友人等より已に箒庵老と呼ばるゝに至りたれば

恙なく五十路の坂をこえなから
世に兩親のますそうれしき

と口吟みたる事もありき其後父は八十九歳にて歿したれども老母は八十六歳にて今尚ほ無病息災なり昔し長岡に住みたりし彼の業平の母ならねどいよ〳〵見まくほしき人情、何時とて變りある可きやと又もや突然歸省したるは去月二十九日の事なりき。

歸省したる序に茶事に緣ある土產もがなと聊か周圍を見廻したれども無味殺風景なる櫟林の中に一點の茶花を見出すは決して容易の事に非ず抑も德川頼房が封を常陸に受けたる時は德川二代三代の將軍共に茶禮を重んじて屢〻水戸家に御成あり或る時將軍父子來邸して彼の大名物青海波の花器

（現今益田孝氏所藏）に二代將軍親ら緋ボケ一枝を挿みたる事ありしは當時の記錄に明かなる所なり又彼の小石川砲兵工廠内に現存する後樂園の如きも賴房常に山水を好みて江都に一名園を得たしとの希望ありしを三代將軍の賛成する所と爲り將軍親ら經營を助けて園中涵德亭の繩張は之れを片桐石州に命じ琴書亭は小堀遠州をして構造せしめたりとも云ふ扨て光圀に至りては乃父の志を繼ぎて遂に後樂園を大成せしのみならず寛文十一年片桐石州の招ぎに應じて其茶會に赴きたる由言ひ傳へもあれば茶事交會の頻繁なりし事推して知るべし其後六代文公七代武公八代哀公の間には茶事屢〻行はれて現に哀公が酒井抱一を後樂園の茶亭に招ぎたる次第は前項に記載せし如くにして水戸德川家が茶事に緣なき大名ならざりしは固より疑を容れざるなり左れど夫れ等は江戸の藩邸に於ける君公交際の茶事にして藩地の水戸には茶事らしき茶事の行はれたりとも見えず唯天保十三年烈公自ら城南の地を相して偕樂園を創設し藩中士女共遊の公園と爲したる時、中に好文亭を築き其一部に何陋庵と稱する茶室を構造せし事あり此茶室は當時水戸藩士中石州流を究めたる原守一郎號を魯庵と稱せし人と宗偏流を嗜みたる小山田軍平號を不染軒と稱せし人と兩人烈公の命を受けて經營せし者にして四疊半正面の床に對して織部口あり又茶道口に對して長方形の大窓あり床柱は島津齊彬公より特に烈公に贈られたる者にして珍しき躑躅の大幹なり織部口の上に掲げたるは烈公自筆何陋庵の額にして君子之れに居る何ぞ陋からんの見識なるを知るべし是れ我が水戸藩地に於ける唯一の茶室にして萬綠叢中白一點の茶花は唯此室内に於て見ることを得べきのみ。

故園の茶味（中）

水戸烈公は極めて多藝なりし人なり文を屬し詩を作り和歌を詠じ書は尤も得意なる中にも八分を能くし刀劍を鍛ひ陶器を製し花器を造り茶杓を削るなど悉く一流を究めて烈公式を發揮せざるものなし左れば茶道に於ても亦固より獨得の見識あり激烈なる排佛論者にして其寺鐘を毀ちて大砲を鑄るや『今よりは心のとかに花を見む夕暮つくる鐘のなければ』と詠みたる程なれば敢て禪味を這裏に求めず儒道を以て怯めず臆せず茶道を論ずる處之を名けて儒茶者流とも稱すべきか彼の何陋庵の待合の壁に其持論なる茶對茶說の二額を篏め込み來會の客に示したる者あり今其漢文を直譯すれば左の如し

茶對

或る人問ふ子茶法を學べるや吾れ對へて曰く未だし嘗て之を聞く其味や苦くして而して甘し其器や麁にして而して清し其室や樸にして而して閑なり其庭や隘くして而して幽なり其交や睦しくして而して禮あり數々會して而して費さず能く樂んで而して奢らず此くの如きのみ若し其れ之れに反する者は吾が知らざる所なり。

茶說

人の禮に於ける一日も無かる可からざるなり大は則ち邦國の經綸、小は則ち閨閤の細務、禮あれば則ち治り禮なければ則ち亂る小技と雖も亦然り余暇日雲華の技を爲すに其中自から禮節あり之を廢すれば則ち事亦行はる可からざるなり而して其取るべき者三つ其舍つべき者三つなり得易きの器を以て得難きの寶と比して而して耻ぢざるは富貴を以て貧賤に交るを示す所以なり其の麁食を調へて美味と爲すは不肖を化して賢と爲す所以なり其古物を聚めて之を玩ぶ者は古を慕ふを示す所以なり若し夫れ清器を垢し全物を傷け以て古製を贋する者は民に僞りを敎ふるなり匕箸碗盞之を千金に博し果菜魚鳥競ふて珍異を致す者は民に奢りを敎ふるなり器什を品評し口を極めて賛揚する者は民に諛を敎ふるなり此を捨て彼れを取り斟酌以て之を用ふるは善く茶禮を行ふと謂ふ可きか金玉の至寶たる餙豢の美味たる人の同じく好む所なり我れは則ち然らず瓦木を以て具と爲し芋栗を以て羞と爲す富貴の尊きたる貧賤の卑きたる亦人の同じく然る所なり我れは則ち然らず貴賤席を共にして相褻れず膝を促して劇談し臣子と雖も相伍す是の數者は吾が技の獨する所なり質にして而して雅、和して而して流れず君子の交なり孔子の曰く禮は其奢らんよりは寧ろ儉せよと小技と雖も其れ庶幾からん。

是れ所謂禪茶を離れて儒流茶道の理想を告白したる者なり然れども烈公は決して村夫子に非ず禪に入らずして自から禪あり飄逸洒脫の氣自然流露して一種の茶人たるを失はざる所なきにしも非ず水戸家の所藏に紀貫之筆の色紙あり寸松庵色紙と相似て少しく大きく筆致も殆んど相同じき者なれば余は私に之を寸松庵類色紙と唱へ居れり其歌は大河内躬恒の「世をすてゝ山に入る人山にても猶ほうき時はいつち行くらん」と云へる者にて今は義公の隱栖たりし太田西山の寶庫に納まり居れども茶人の一見して垂涎を禁ずる能はざる者なり然るに烈公の何陋庵を造るや水屋の入口に對古軒と題する扁額を掲げ其額面に一首の歌を書き交せたるが是れぞ則ち彼の色紙の躬恒が歌を捩りたる者にて

世をすて〻山に入る人山にても
猶ほうき時はこゝに來てまし

と云へるなり「いつち行くらん」を「こゝに來てまし」と捩りたるが烈公の意匠にして此等の材料を味噌臭き禪坊主に求めず遠く掛け離れたる上代歌人に取りたる處一種垢抜けたる茶想にして大德寺畑には容易に見出す能はざる妙味ならん。

故園の茶味（下）

交通の便開くるに隨ひ上國の風漸く地方に吹き廻り無味乾燥なる櫟林の中にも點々茶花の綻ぶを見るに至る畢竟太平の餘澤と謂ふべきか水戸地方にても彼の何陋庵に因みて何陋會と稱する茶友の一團體起り烈公の茶説を祖述して質素簡略を旨とする茶事の會合を催すに至りたりと云ふ其會長宗匠は誰れなりやと云ふに何陋庵經營者原魯庵先生の養子同尖庵翁にして能く石州流の衣鉢を傳へ五十年間一日も釜の湯を絶やしたることなく今年八十歳に達したる清癯鶴の如き老人なり余は郷里に此老宗匠あることを聞き今度歸省の節は其草庵を敲かばやと思ひ居りしに歸省前數日圖らずも突

然其來訪に接したり東京の茶弟を尋ねたる序に寸松庵を一見したしと思ひて推參せりとの挨拶ありて四方山の雜談中自ら語り出でたる茶歴に曰く

愚老は藏之助と申し幼少の頃石州流の茶道を傳へたる水戸藩士原守一郎號を魯庵と稱せし者の養子と爲り茶事は總て養父より傳授せし次第なるが原の家は三百石を領し中以上の藩士なれば維新前後黨派爭鬪の際には自然其渦中に捲き込まるべき筈なりしに愚老は家傳として常に茶事を嗜み血腥き風の吹き荒みて或る時などは門前に生首二つ三つ轉がり居りし事さへありし其中にも嘗て一日も釜の湯を絶やさず朝夕松風に親み居りし御蔭を以て黨人原も愚老を嫉視するに由なく斬る斬らるゝと云ふ修羅場裏に安々と身命を全うし剰へ八十の高齡を保ち得たるは偏に茶道の奇特と申すべきなり昨年の春門弟等打ち集ひ愚老の爲めに祝賀會を開かれければ

人みなは春のすさみや多からむ
我れはしたしむ松風の音

の一首を扇子に認めて贈りたる次第なるが段々貧乏するに就き表地面を賣拂ひ猫額大の裏住居に茶碗一つ釜一つの境界を樂んで居る氣樂坊であります云々

又余の質問に答へたる談片中に

井伊直弼の師事したりと云ふ片桐宗猿は丁度石州の孫に當り猿が好きにて茶器の如きも猿に縁ある者を多く所持せし由聞き傳ふ又石州流の茶事には天保頃までは肩に鯨の入らぬ半裃を着して茶を點じ客は普通の裃を着け刀劍類は小きものにても一切席中に帶せざるが禮なりき紋付袴にて茶を點ずるやうになりたるは天保以後の流行なり云々

の一節ありたり因て不日歸省の節は其所謂裏住居に音づれて閑寂の境涯をも拜見せんなど戯れつゝ訣れたりしが扨て歸省して聞けば東京より還りて四五日立つか立たぬに俄かに逝去したりとの事又其の家人も何の爲めに上京せしにや未だに其の理由を知らずとの事、夫れ是れ思ひ合はすれば何とやら宿縁あるやうの心地して唯一回の面識なれども哀惜の情愈〻深からざるを得ず夫れは兎も角茶星一たび地に落ちて折角起りたる何陋會が終に落寞たらざるや如何、茶花の能く嚴冬に綻ぶを見て何陋會員も奮起一番の工夫こそ望ましけれ

扨て余が歸省の目的たる老母の上は如何と云ふに例に依り五官共に恙なく近年伯兄を始め家人打寄りて菊花壇を造るを見て此上なき老らくの眺めと爲し此程も

やからみなおほしたてつる菊の花見れば齡ものふ心地する

と詠みたる由「千代もと祈る人の子のため」誠に嬉しき次第なれども原老人の事など思ふに附けて

「さらぬ別れのなくもがな」の念いよ〻切ならざるを得ず斯くて余がものしたる例の腰折は

秋風のいと〻身にしむ故郷は

柞のかけそ立ちうかりける

關西無茶修行（一）

首途

茶の道も次第に廣くなりにたり當春大阪の高谷恒太郎、鈴木馬左也、戸田彌七の三人打ち連れて東京に來り益田鈍翁兄弟馬越恭翁の遠州攻めに出逢ひてより今秋は高谷今遠州自ら關西の盟主と爲り灘の白鶴嘉納治兵衞氏と連衡して戸田氏と共に三角同盟を作り旗鼓堂々東京勢を邀へんとする準備已に成りて扨て今遠州より發せられたる挑戰狀には斯道奬勵の爲め貴方大家打ち揃ふて御光來下され所謂茶人天上落。關西始應春の狀況に接到するを相樂み居り候間成る可く多勢御西下あらんこ

とを熱望に堪へず云々の一節ありたり然るに三井松嶺石黒況翁兩男爵益田兄弟等は後めたくも其鋭鋒を避けられたれば結局馬越翁を總大將に吉田丹左衞門、田中親美、八田圓齋及び余と同勢五人の一團體心細くも西下して彼の三角同盟の陣頭に立つの已むなきに至れり

茶會の日割は十一月八日午前十時高谷氏今橋本宅、九日正午戸田氏蘆屋別莊、十日午前十時嘉納氏御影別莊との事なれば余は六日夜汽車にて大阪に赴き翌七日朝着阪匆々京阪電車にて先づ

桃山御陵

へと出で立ちぬ此日秋爽人に可なり晩稻刈りほす山田に續く森の梢も色附きて車中の眺望得も言はれず頓て伏見より下車して御陵に至りしに流石豐公の遺蹟と云へ今度御陵地と爲りたる程なれば景勝絶佳固より言を俟たざれども附近に老樹大木なく自然鬱々蒼々の盛觀に乏しきは亦是非もなき次第なり所詮御陵は御陵として他に莊嚴なる明治大神宮を建設し片時も早く國民渴仰の念を滿足せしめたき者なり御陵の前に額づきて例の腰折は

袖にちる紅葉さなからぬさとして新陵をゝろかみまつる

御陵參拜了るや電車にて更に八幡迄引き返し男山の南麓を繞ること二丁許にて此の程改修落成したる

松花堂の墓所

に着到せりフト見れば人家立ち並びたる中に大德寺孤篷庵小堀遠州の墓門と同形の入口あり八幡竹穗の垣を兩袖に結ひたる先づ由ありげに見受けらる門に入れば小さなる腰掛あり敷石の上を三四間行き鍵の手に曲りて一段高き左側の玉垣の內に入れば天然石の洗手鉢あり扨て其奥の突き當りに高さ尺二三寸ばかりの三基の小石碑ある其正面が大阿闍梨昭乘即ち松花堂惺々翁、右が師匠の大阿闍梨實乘、左が弟子の萩坊圓乘の墓なるが何れも磨滅して纔に其名と歿年月日を讀み得るに過ぎず此程來松花堂の墓所荒廢して石碑の所在も定かならざる由聞き傳へ東京の有志者、益田、野崎、根津、朝吹、加藤諸氏淨資を募りて墓所改修を企て松花堂の命日は寛永十六年九月十八日なれば一月延べて去る十月十八日益田氏等出張して改修落成の法事を營みたる次第なるが余も右有志者の一人なれば今度其實地檢分旁〻茲に來拜して扨て思ひ出すは松花堂が陶淵明を慕ひて自から南山隱士と稱し

好んで一本菊を繪き採菊東籬下、悠然見南山の興趣を味ひたる事なり折しも晩秋の候なれば野菊一枝を墓前に捧げて又例の腰折をかくなん

露ながら折りて手向くる菊の花むかしわすれぬ色をめでませ

關西無茶修行（二）

松花堂の人格

松花堂は寛永三筆の隨一なり大師様を究めて更に新機軸を出し松堂花一流を開きたる人なり書は牧溪の筆致を得て氣韻超俗飄然思不群の趣あり詩を賦し文を屬し和歌を詠じ殊に茶事に堪能にして茶杓を削り花入を作り築庭造室の意匠に富みたるのみならず八幡各坊の寺領七千石の内自ら一千石を領したるを以て所藏の名器も少からず彼の瀧本坊什器錄を一見すれば直に其寶物の豐富なりしと同時に其鑑識の超凡なりしを卜することを得べし同時の交友江月澤庵兩和尚、小堀遠州、佐川田言當、淀屋个庵、本阿彌光悅等推重至らざる所なきが中にも近衛信尋公の信仰尤も厚く上り下りの西國大名亦爭ふて其門を叩きたるを見れば其人溫潤玉の如く德風自から人を化して方外の盛名一

代を壓したるや知る可きなり余は本年元旦男山八幡に參詣せし折松花堂の昔を思ひ出でゝ

男山松ふく風にうそふきて心すましゝ人をしそおもふ

と讃嘆したる事ありしが今次墓參して又七律一首を得たれば左に掲ぐ

壬子晩秋遊男山謁松花堂惺々翁墓聊献蕪詩以代焚香

絶代清標誰得同、襟懷如水俗塵空、烹茶留客長松下、隱几思詩丈室中、書逼牧溪和尚壘、
書追弘法大師風、男山一角秋將老、手掃苔墳弔惺翁

墓門を辭して放生川を渡り男山の南麓を行きつゝ見上ぐれば上半は松楓下半は竹林にして紅綠參差錦の蒲團着て寢たるが如き姿の何となく東山に似たるも愛でたく身は宛ら土佐繪卷物の中を行くやうの心地しけるが頓て人家の裏手に一基の小碑あるを車夫が指して「アレが賴風はんの塚どすエ」と云ふ扨ては謠曲女郎花にある小野賴風の遺蹟なるか左らば彼の女郎花の塚も此邊ならんと思ひつつ田甫の中の一軒家にたどり着けば是れなん余が尋ね來りたる西村芳次郎氏の別業にして門前右手に女郎花塚と題する石碑あり表門を入て更に又内庭の小門を潛れば嘗て男山和泉坊に在りたる昭乘翁の隱居所

松花堂

は昔ながらの形を存して現に此處に立ち居るぞ嬉しき松花堂は總體四疊半の一室にして正面に二疊の間を取り突き當りて右が持佛壇左が勝手入口なり又其右側は三尺づゝに仕切りて前手の三尺が板床、其次ぎの三尺が三段と爲りて最下段板戸二枚引の中に丸爐を切り上中段は地袋にして其中段には松花堂筆にて江月和尚此方丈をとひ給ひし程に「淨き名のえにしを結ぶ床とてや說かぬ法しる人のとふらん」と書き附けたるが今は今實物ならで誰れやらの寫しを張り附け置けり而して其左側の二枚戸を明くれば此處に一疊敷の土間ありて一基の土竈を据ゑ付け臺所用を辨ずる趣向なるが如し昭乘翁は性喧囂を厭ひ夙に吉野に蟄居せんとして果さゞりしかば歿年五十六、左のみ老たりと云ふに非ざれど、遷化前數年松花堂を和泉坊の北隅に造りて此丈室中に隱退したりと云ふ然るに明治四年神佛分離の火の手烈しかりし時、八幡四十八坊悉皆取り拂ひの厄に遭ひ當時各坊の器具木石手當り次第一人にて一度に擔ぎ得らるゝ一荷を八文と定めて所望者の取り去るに任せたる由なるが松花堂及び和泉坊の一部分は此亂離災厄の間に在りて辛うじて其の形骸を全うし二回移轉の後明治三十

年終に現場に安置され又一方には今度昭乘翁墓所の改修ありて併せて八幡に一名物を加ふるに至りたるは畢竟翁の遺德深く人心に感孚する所あるが故のみ尙ほ此松花堂に就て嬉しきは所謂堂附きの飛石、捨石、蹲踞石石燈籠に至るまで古色蒼然として現存する者多き事是れなり他日再訪して委細記述せんと欲すれば今玆に贅せず。

關西無茶修行（三）

樂只庵茶會

八日午前十時は高谷宗範今遠州先生が三角同盟軍の先鋒として茶會を開くべき時刻なり兼て期したる事なれば馬越翁を先達に一同今橋なる天王寺屋五兵衞の舊宅樂只庵へと馳せ參じ扨て待合に打通れば八疊の間の床に靜壽硯と題する硯箱を置き新備前の火入は木地クリ抜き煙草盆に載せられたり頓て案內に連れて中庭の腰掛に下り立てば主人は袴の上に十得の姿にて出で迎ふ仰ぎ見れば軒には遠州筆閑邪の扁額が掛り蹲踞石燈籠とも主人の丹精顯れて奧床しさ言ふばかりなし夫れより八疊の間に入れば床には詹仲和の筆に係る日高丈五唾正濃將軍扣門驚周公と云ふ起句の盧同茶歌の一軸を

掲げ室の左隅には織部瓦を敷き與次郎作と稱する金剛山仲院の文字ある窶れ風呂に九兵衛作大雲龍釜を取り合せたるが風爐名殘の趣向なるべし扨ては佗び茶にてありけるよと堅唾を呑んで控へ居れば主人の挨拶に次ぎて炭手前あり器物は左の如し

香合　吳洲銀杏　灰器　南蠻瓶蓋　灰匕　遠州好み　羽箒　野雁

火箸　鐵時代　炭取　一翁好み一閑張竹の皮丸形

炭手前了るや麗しき青磁の栗鉢に燒栗を盛り主人好みの銘陶家秋と稱する菓子に煮〆昆布を添へて出されたるを頂戴して中立と爲り五點の銅鑼の響に應じて再び室内に入てアッと驚き入りたるは床の花なり達磨の形したる大古瓢に蕃茄、刈萱、夕顔を挿みたる其風情東軍の胸板に先づ一彈を打込まんづ主人の苦心歴々と見られて殊勝なり遠州好み桐絲卷棚の下段に伊賀耳附水指を置き矢倉傳來三島外花の茶碗に彼の中興銘物として有名なる大正木の茶入を入れ之を遠州所持朱唐物盆に載せて棚の上段に飾られたり斯くて濃茶手前あり、茶杓は遠州作銘おく霜、建水は木地曲、蓋置は青竹引切、茶は上林詰の初昔なりき而して主人の手前は餘り見馴れぬ遠州流の事とて容易に品評する能はざれども多年の熟練は誰が目にも爭ふ可からず此點に於ては今遠州の稱決して偶然に非ずと思はれたり扨て此前茶の諸道具中古三島外花の茶碗は矢倉竹翁箱書附にて銘を八重垣と云ひ近年岐阜の加藤與三郎氏が所持せしを主人が讓受けたる者なり火替りありて見込好く花の押形も亦鮮明にして蓋し外花中の白眉なる可し次に茶入大正木は先年主人が平瀬家より買入れたる者にして三冊物始め諸書に散見すれば今茲に贅せず唯當日袋は富田を用ひたる事のみを記載し置かん此等道具の組合せに就き主人が如何に苦心慘澹たりしや今更喋々を要せずと雖も夫れにも增して主人の丹精容易ならず天晴れ古茶人にも愧ぢざる心入れの程を賞讃す可きものは三宅亡羊作裏面に九年面壁一瓢花と朱書したる古瓢に挿みたる蕃茄及び夕顔の花を當日使用せんとするに就き其用意の周到なりし事即ち是れなり十一月八日と云ふ霜枯れ時に蕃茄の花を獲ること固より難し況んや其日の午前十時に恰も八分目に咲きたる花を獲んとするに於てをや是に於てか大阪より神戸に至る六甲山下十七八哩の蕃茄畑は主人一手に買收して丁寧に其蔓を保存することを命じ扨て一方には御影の別莊に培養したる夕顔を午前十時に咲かせんとする試驗の爲め凡そ一箇月の工夫を費して恰も此日此時に此名花を挿み得るに至りたりとぞ三宅亡羊が古瓢の銘に九年面壁一瓢花と云へるもの移して主人が苦心の讃辭と爲す可きなり處で余が即座の狂體一首眞面目なる主人に叱らるゝかは知らねど

外花の鼻の高谷を三島燒き恐れ入たと夕顔の花

關西無茶修行（四）

樂只庵廣間

午餐前に濃茶を頂戴して是れより懷石をと案内されたるは十五疊の廣間なり床には光起筆中陶淵明左右菊三幅對を掲げて前に色繪銅魚上人物香爐を置き床脇棚には塞菊錦木紅葉等を生けたる大籠花入と菊兎時代蒔繪硯箱を置き合せ床に對する一隅には宗哲眞塗臺子を据ゑて

釜　道仁作蘆鸞地紋　風呂　同作菊瓢透し　水指　青磁共蓋　杓立　古銅　建水　膳所燒

蓋置　染付竹節

を飾り附けられたり斯くて懷石出づ

汁　八丁味噌、鳴瓜角黒豆、カラシ　向　カマス、ムシリ花松魚　椀　鶉タヽキ丸、シンジョ竹輪人參、ソボロ木摘茄子、芹、割胡椒

焼物　小鯛骨抜祐庵燒　香物　瓜茄子奈良漬大根漬　吸物　カブラ骨カクシ生姜

八寸　車海老雲丹燒、柚味噌、柚實葉付ノマヽ、ムカゴ、銀杏、松葉サシ

右懷石は黒木瓜形膳に蒔繪の椀を用ひ染付の向、手附織部の燒物鉢、斑唐津の香物鉢などを取出されたるが食後主人の臺子手前にて薄茶を點てられ其器物組合せは左の如くなりき

茶碗　古三島内花及び菁瀬戸筒　棗　盛阿彌　茶杓　宗中作銘秋風　炭取　唐物平　火箸　鐵柄銅捻

羽箒　島フクロウ　鐶　金銀象眼　香合　石州好菊蒔繪　菓子器　七寶手附　菓子　紅白山川

以上拜見したる品々の内光起筆菊に陶淵明三幅對は快心の出來なり青磁共蓋水指は平瀬家傳來にて是れ亦絶品と云ふて可なり小間の三島外花茶碗に相對して同内花茶碗を用ひたるは器量の相違する姉と妹を並べて坐らせたるが如く少しく無慘に感じたれども主人の方では梅と櫻を兩手に持ちたる積りならん斯くて午後四時近き頃第一日目の茶會滯りなく相濟みたれば厚く主人の心入れを謝すると同時に御免を蒙りて聊か其策戰計畫の

講評

を試むるは無茶修行者たる余の責任ならんと思はる但し高谷君も流石職掌柄とて拔目なく對面當初の挨拶に今回は名古屋の茶人をも招ぎたる處、彼れ是れと所藏品を指して一覽を望まれたれば道具

組みは意の如くならざる處あり此儀豫め御酌量を乞ふ云々と先一目を打ち置きぬ左れども茶會は茶會なり一會の筋は立てざる可からず今回主人の胸中には第一遠來の客を手厚く扱ひたし第二所藏品を成るべく多く示したし第三鍛ひに鍛ひし點茶の腕前を顯はしたし此三「たし」が名殘とも附かず口切とも附かず一種鵺式の茶事とは爲りたるなり小間に絲卷棚ありて廣間に臺子の出でたるが如き曰く窶れ風呂曰く銀杏香合曰く銘物大正木茶入曰く瓢簞夕顔の花と見合せ來りて何處となく不自然なるが如き或は菊の掛物の前に菊の大花籠を飾りて座敷に二重の菊畑を造りたるが如き皆な其結果に外ならず畢竟廣大なる戰線を張りて徹頭徹尾敵を包圍せんとしたるが爲め如何なる名將も采配を振り切れずして局部に缺陷を生ずるに至るは固より怪むに足らざるなり若し夫れ余が有りの儘の注文を言へば夕顔の花に窶れ風呂三島外花に五郎棗文掛物を二疊大目に掛けて一服頂戴したきに在り夫れは宗旦の嗜好にして遠州流の取る所に非ずと云はゞ余は只唯々として退かんのみ左れども高谷君は學殖に富み軒頭に掲げたる遠州筆閑邪の匾額或は彼の詹仲和筆盧同茶歌の一軸或は壁間に横はる古溪和尚筆東坡の五絶の如き其好尚の那邊に在るやを卜すべく又其熱心にして眞摯なるや彼の茶事を以て茶番狂言と誤解する者をして殆んど愧死せしむるの概あり左れば其趣向に就ては幾分首肯する能はざる所なきに非ずと雖も一具一品の飾り付けにも深き心入れの顯はれて人をして茶禮の嵩高を感得せしむる處、眞に高谷先生の茶事と稱す可きなり余は尚ほ更に先生に希望す可き者あれども後項關西茶事概評中に讓りて玆に贅せず。

關西無茶修行（五）

戸田露朝茶會

十一月九日正午攝州蘆屋の里なる戸田露朝子の別莊に催されたるは西軍中堅の茶會なり曰く蘆屋曰く露朝、茶人の耳には如何に快き響きなるよ梅田驛より阪神電車に乘ること三十五分にて蘆屋に達し蘆屋川に沿ふて上ること二三丁、一帶白砂雪の如くなる上に根上り松の不行儀に這ひ廻る趣得も言はれず丸木一本を手摺りと爲したる板橋を渡りて對岸の松原を行き過ぎ將に田甫路に出でんとする其左側に石垣塀あり門構へ嚴しきが露朝子の別莊なり玄關を經て寄附に通れば丸爐に淨益作雲龍形銀瓶を掛け木地木瓜盆に染付瓢の振出し及び繪高麗茶碗を載せて床には雲州の太守松平不昧公の文掛物を掲げたり大崎に隱居したる不昧公より子息なる當主月潭公への消息にて谷中の紅葉見物

の事、口切の御茶間合なき事など認めたる後に寶珠形の釜を書きて常住と書き附け「樂は浮世の外の茶湯釜、御心がけ御みがきなされべく候かしく九月二十日」とあり抑も戸田氏と不昧公とは淺からぬ因緣あり露朝子の祖父宗朝子は谷松屋と稱して京都に於る不昧公愛顧の茶道具屋なり隨て茶器の取引上不昧公との往復文書頻繁にして其中茶事の參考と爲る可きもの少なからず其寄附に於て先づ不昧公の消息を示したるは是れ將た如何なる伏線かと感興を催しつゝ切戸を開きて腰掛に出づれば前に幅三尺許の清流あり高座の瀧の下流を堰き入るゝ者の由にて潺湲の響に耳根を洗ひ正面は遠く六甲の山脈より近く山田の刈穂を眺めて晩秋の光景一段面白く思はれたり腰掛の棚に時代唐草蒔繪硯箱あり又一閑釣瓶煙草盆に白阿蘭陀の火入あるを見廻し居る間に頓て露朝子の出迎へあり澤飛びにて流を越え忽ち高く忽ち低き土手の路地をたどりて小高き築山の上に立てる茶室に至れば躊躇上りに相對する棕櫚林の下に古き蹲踞石燈籠あり鹽漱の際に首を回らせば遠巒近林乃至庭園の全景まで一眸の中に收まるの趣向なり扨て茶席は四疊半道安式にて床より三尺隔りたる處に大爐を切り其爐の隅より一直線に敷居を取り附けて之れに反古張り二枚引を立て其欄間に不昧公が、到與不到、幽松微風、到喫茶去、不到也同、と書きたる一文字の板を欽め込みたるは露朝子の新工風にして四疊半を崩して肩の張らぬ草庵と爲し或る場合には又此二枚引を取り外して眞の四疊半と爲す事もありと云ふ扨て掛物は宗旦筆白紙の賛にて

我玄未白、白髮時生、白俗何異、不芸嚼情

とあり釜は蘆屋丸口雷紋にて夜の友と云へる宗旦の銘あり香合は青磁桔梗、灰器は玄齋、羽箒は鶴なり斯くて懷石出づ

向　金襴手丸紋寄鰈細作、土筆大根おろし橙酢

汁　古清水紅葉繪汁次、合味噌粒しめじ茸、すり柚

椀　鼈皮、唐の芋角、人參蛇の目、割銀杏、かくし生姜、薄葛

焼物　鮒祐庵やき

吸物　割梅干　不味公好　呼子鳥

香の物　蕪　奈良漬

菓子

食後此茶室に附屬したる腰掛に中立して後入の床を見れば石州一重切銘時雨に初嵐と稱する椿を生けたり斯くて濃茶手前あり器物は左の如し

茶入　盛阿彌大棗　袋和久田

水指　出雲燒芋頭　不味公箱書附

茶碗　眞熊川　銘白菊

建水　澁紙手

茶杓　縣宗知作

蓋置　青竹引切

以上器物の中眞熊川茶碗は元加州より出でたる者にて綺麗なり上品なり白菊の名空しからずと云ふべし出雲燒水指も亦非凡の出來にて光澤極めて麗しかりき。

關西無茶修行（六）

不昧公の逸事

露朝子が茶室中の二枚引きに張り交せたる反古は不昧公又は其執事より露朝子の祖父宗朝子に送られたる消息文にして茶人の樂屋を窺ふ可き事實を包含する中にも左の一通の如きは其最も著しき者ならん

本多井戸茶碗御所持の事御家内様にも御懸念の事にて再應御手放被成候様被仰上候度々の事にて御斷りも立ち兼ね孤篷庵へ御納可被成思召に候唯々御納めも餘り殘念に候得ば龍光院什物の内にて芙蓉、密庵、大燈一行物なぞの内と取替には成り申間敷候哉其代りには御納めの節金子少々添へ候て寄進心に可被成候云々

現今京都紫野太德寺孤篷庵に喜左衞門井戸と稱する茶碗あり稀代の名品にして天下井戸茶碗中の大關とさへ稱せらるゝ程なるが是れぞ一名本多井戸と云はるゝ者にして或は彼の宇都宮釣天井の怪談を殘せし本多上野介正純の所持品にてもありしならんか兎に角一時不昧公の所藏に歸せしに此茶碗に崇りありて之を所持する者は必ず奇禍に遭ふ可しとの言ひ傳へあり文中に御家内様御懸念の事にて再應御手放被成候様被仰上候とあるは卽ち此崇りの御懸念なりしなり扨てこそ不昧公も澁々ながら彼の茶碗を孤篷庵へ寄進するに至りたるならんなれども公も左る者なり道具に掛けては轉んでも只起きぬ殿様なり宗朝子に肝煎らせて龍光院（江月和尙の居住せし所にして孤篷庵寸松庵等の總本坊なり）より何か代りの一品を取り出さんとする魂膽と見えたり余は孤篷庵を訪ふ毎に喜左衞門井戸を愛觀してアレ程道具好きの不昧公が何故此茶碗を寄附せしや常に怪訝に堪へざりしが今日始めて其理由を知ることを得たるは偏に無茶修行の御蔭とこそ云ふべけれ扨て案内に連れて庭先きを見繞り頓て打通りたる

新築廣間

の床には細川幽齋筆殘菊帶霜と云ふ題の二首懷紙を掲げ琵琶棚には伊勢物語津の國蘆屋の里の歌に因める春正作高附に海松及び柏の葉に載せたる蒔繪硯箱を飾り掛物の前には寒菊、櫻、谷桑を生けたる瓢形唐物籠を置きたり而して薄茶の器物は左の如し

眞塗矢筈棚　釜　不味公好み面取三十の内　水指　青磁鐵鉢　爐縁　高臺寺蒔繪

炭取　一指齋好み北海道斑竹丸　香合　志野寶珠　灰器　了全金入　羽箒　鷺

薄茶器　八代耳付　茶碗　御本三島左入二百の内銘遠寺晩鐘　蓋置　一指齋好み　建水　飛驒曲

干菓子　加州落雁　盆　獨樂　煙草盆　松花堂好み合天井　火入　時代松蒔繪

薄茶後に更に後酒の馳走ありて献立及び器物は左の如くなりき

吸物　すり鮑、すくひ、松露　八寸　鱚骨抜鹽燒、ちよろぎ水仙寺海苔　強肴　青磁端反鉢鶉丸、唐芋せん柚絲切

強肴　織部黑沓鉢つと豆腐花鰹　同　唐津小猪口鯛鹽辛

以上記述の如く戸田子今回の茶會は蘆屋別莊新築披露の爲めにして余等が圖らずも此芽出度き場合に際會したるは望外の仕合と云はざる可からず殊に此別莊が六甲山脈を庭前に眺め高座の瀧を園中に堰き入れ蘆屋の松原を目前に控へ茲に其一あるも尙ほ跨るに足る可きを三つが三つながら兼備するに至りては戸田氏の景福も亦大なりと云ふ可し拙歌あり

浦山し蘆屋の里の松風を

とはに聽きつゝ木の芽にる人

關西無茶修行（七）

蘆屋茶會評

前項記述したる戸田露朝子の茶會も褒める一方にては例の惡友等より何んだ八百長かなど評せらるるの恐れなきに非ず因て是非なく茲に岡目八目の一端を述べんに第一茶室を築山の上に造りたるが異樣なり古來茶室に見晴しある淀見の席の如き者なきに非ざれども蹲踞石の前に大木を植ゑて入席する人の眼界を放散せしめざる用意周到なる者なり然るに蘆屋の茶室には露地に眼界を遮るものなく一方に小樫一方に躑躅を規則正しく植ゑ込みて天然の野趣を損せしのみならず蹲踞石前の棕梠林は露地の樹木と連絡なく可惜六甲山脈も庭の景色と調和せずして木に竹を繼ぎたるが如き眺めとなり且つ其茶室が八方を見晴す爲め何となく晴れがましくして茶味の身に泌みざるやうの感覺あり畢竟大阪市中と蘆屋の里と庭を造るに同一筆法を用ひて天然の景色と茶味とに同化せざるが故ならん有の儘に愚存を述ぶれば茶室は彼の松原の中に造りて欲しかりしなり夫れが叶はずば最初腰掛の在りたる流水に沿ふて室内に清き水音を聽きたかりしなり强ひて彼の築山を用ひんとならば亭の代り

に中立の腰掛を置きて茶室に籠りたる欝氣を晴す所と爲したかりしなり廣間の前の緋鯉の喰喁する池邊より築山の上の茶室を望めば辨天の祠かと疑はれて一見甘たるき趣向を免れざるは所謂千慮の一失とも云ふべきか扨て又茶會の趣向を見るに反古張り二枚引きを除くの外、谷松屋露朝子らしき處なくして總べて戸田大盡の風あり新築披露とは云ひながら余等は今少しく澁く苦き處を拜見したかりしなり尙ほ其上に寄附、小間、廣間とも悉く細字の掛物なるは如何にや緣もなき白紙の贊の代りに小間に玄旨の殘菊帶霜二首懷紙を掛けて廣間には探幽一幅なりとも御採用を乞ひたかりしなり斯く云へばとて決して失望する勿れ蘆屋の茶室は實に露朝子が處女作に非ずや古來幾多の大宗匠も幾十幾百の茶室を造り失敗又失敗、苦き經驗を嘗めたる後に始めて名茶室を造り得たるに非ずや茶道に熱心にして然かも春秋に富める露朝子が他年一日蘆屋松原の田舍屋に松笠を焚きて茶會を催すの時ある可きは余の信して疑はざる所なり。

御影月都庵茶會

は攝州灘に有名なる白鶴の主人嘉納治兵衞氏が今度御影に新築したる別莊開きの催しなり十日午前十時一同別莊の玄關より罷り通りたる最初の座敷は床に岡田半江の松に朝日の大幅を掛け菊花を生けたる均窯の花瓶、松の盆栽などを飾りて正しく文人陳列なりき夫れより建仁寺現住默雷和尙筆六不收の匾額を揭げたる廻廊を經て待合に入り頓て案內に連れて腰掛に出づれば吳洲鹿の手の火入に曲輪煙草入を添へたる莨盆あり生垣の下の水流を隔つる正面の破風に月都の二大字の匾額あるは卽ち當家の茶室にして程なく出迎ひたる其人を見れば年輩五十左右、容貌端正にして溫雅淸秀の氣眉宇に溢れ悠容迫らざる風采如何にも大家の主人と見受けられたり扨て席は十疊敷に二疊の上段の間を取りて一間床あり表裝結構なる定家の懷紙懸れるを見れば詠初冬嵐和歌とありて長名書なり歌は「けふよりはふゆのあらしのたつ田川」とありて下の句なく其右側に社頭霜として「神かきや秋にはあへぬくすの葉もけさおく霜にふりやはてなん」とあり其他全幅に草稿の如く樣々の事を書き散したるは明に書き損じの反古なれども其達筆大小錯綜して一種の景色をなすに依り遠州の取り上げて自ら表具を好み後ち松花堂に贈りたる者にて世俗呼んで反古懷紙と稱する由なり釜は千家傳來與次郎作利休尻張、香合は吳洲周茂叔炭取は唐物四方底、灰器は長次郎作にて炭手前ありキセワタと名くる菓子を頂戴し中立と爲る。

月都庵の前茶

中立して待つ間程なく五點の銅鑼の合圖あり頓て入席して床上を見れば利休の尺八に初嵐と名くる椿を生け主人好みの木地風爐先きの前には饅頭大の拔け一箇所ある上出來の備前種壺水指を置けり茶入は大覺寺手權十郎挽家粉字銘白玉にしてケンザリしたる吉野廣東の袋あり茶碗は新渡御本半使遠州銘中井、茶杓は遠州作「翁さひ人なとがめそかり衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなる」の歌銘ある者なり又蓋置は精作なる古銅群鶴にて落ち附き拂ひたる主人の濃茶手前中々新茶人とは思はれず一同敬服したる後、廣間へと案内されて打通りたるは實に入側附き

三十疊の廣間

なり是れはと驚く床の正面に懸りたる一軸は貫名海屋の傑作山水中に江南興忽動、驢上涉坡陀、溪景已無限、逢梅喜奈何の自讃ある者なり出書院には南都一乘院舊藏の菊枕蒔繪硯箱を載せ掛物の前には唐物黑平卓に麗しき砧青磁袴腰大形香爐を置きたり床に向つて左側へ見廻し行く程に先づ眼に映ずるは松に菊を文人風に挿みたる南蠻耳付長壺なり次ぎは鍍金の龍を鏤めたる天平時代の袈裟函なり而して此袈裟函の内に納めたるは神護寺出の經筒を以て卷き込みたる東大寺出の有名なる畫圖讃文一卷と當家所藏の勾玉中最優等の五個を入れたる鍍金佛像珠數函なり其次ぎは同じく勾玉數十個を入れたる時代蒔繪簞笥にして如何にも豐富なる陳列なるが尙ほ此外にも田能村竹田筆にして賴山陽其他の讃辭ある山水屏風一雙を坐敷の内に立て廻し玆に懷石膳を並べんとする趣向なり抑々當主人が

天下第一の勾玉家

たるは夙に傳聞する所にして何時か一度はと思ひ居たるに今次茶會に招がれて此至寶を拜見するの榮を得たるは望外の眼福と云はざる可からず今主人其他の說明する所を聞くに勾玉は大和紀伊肥後日向等の古墳より發掘され其種類も亦隨て多數なれども從來の經驗にて眞實優等なる者は大和より出でたる者に限れるが如し蓋し天孫人種の携帶品にして愛玩者の死亡と共に墳墓に埋めたる者な

るべし大和丹波市の附近には勾玉村と云ふ者あり又玉造村と云ふ名の存在するを見れば天孫東征後も尙ほ勾玉製作を續けたる者ならんなれども推古以後の墳墓には曾て勾玉を出したる事なしと云へば其古作たるや知る可きなり勾玉は玉質堅牢にして研石の掛らざる者なるに古代の民族が如何にして細工を施したるやは疑問にして其研究は人種學に關聯して頗る興味ある者なる由、勾玉の形は普通一つ巴形にして長さ一寸五分乃至二寸なるが當家所藏の優等品には十文字、猿形、豚形、櫛形等の奇形珍物あり而して其質は琅玕なり當日拜見したる者のみにても其數殆んど五六十に達し代價を論ずるは甚だ失敬千萬なれども之を侍座の黑人連に問へば形に依り色に依り或は其大小に依りて一個三四千圓より一萬五六千圓の間を往來する由當日陳列の分のみにても必ずや數十萬圓に上りたることならん流石の故藤田傳三郎男さへ勾玉は白鶴に及ばずと生前常に閉口せられたりとぞ左もありなん。

關西無茶修行（九）

鉢攻めの軍略

勾玉に氣を奪はれて時の移るをも知らざりし余等は頓て懷石の座に着きたり結構なる膳部に上りたる御馳走は

向　金襴手向附、鯛、山葵、小皿に醬油　汁　蕪角切

八寸　鶉燒鳥、百合　カラスミ　湯吸物　土筆　椀　甘鯛、しめじ茸　柚輪切、紫　燒物　鯛鹽燒　香の物　奈良漬　其他

此外貴重なる鉢に盛りたる樣々の佳肴珍味を頂戴したれども懷記を申受けざりしが爲め記憶に洩れたる者あるぞ遺憾なる左れども其鉢のみは目に沁み込みて忘れんとするも忘るゝ能はず先づ八寸に代用したるが備前竹の節の手附にて見込に拔け二つある者、次ぎに赤繪魚の手蘭菊の模樣ありて見込にタンバンの蟹ある者、雲鶴菊紋片身替り小鉢、阿蘭陀菊模樣四方小鉢、染附橋の繪の香の物鉢と所謂鉢合せにて目から火が出るやうの心地せり扨て又酒器は伊部捻手附丁子、仁淸盃臺刷毛目皿形盃、阿蘭陀黃地白ヌキ藍菊の繪盃、同じく白地藍模樣緣菊刻み盃の外に染附捻の猪口數個を出されたるが當家所藏の捻猪口は十七個に上れりと云ふ大勳位威服係馬越元老も此鉢攻めの包圍に逢ふては這々の體にて引き下り食後の運動旁〻廣間の庭前に下り立てば主人宗匠にて築造したる庭園の樹石悉く壯大ならざるなく殊に巨石は日本全國の名所々々より取り寄せたる者にして宛然奇石

の陳列場たるも亦白鶴大盡の物數奇と云ふ可きか斯くて庭傳ひに元の月都庵に入りて更に

薄茶の御馳走

とは爲りたり舞臺は同じけれども背景は變りぬ織田道八筆天を指したる布袋の圖に人間天上客、猶指三會曉、東山道八戯筆と自讃したる出來面白き一軸の前に紅白紫の牡丹三輪を生けたる伊賀耳附花入を置き遠州藏帳物唐物輪花式外朱内黑青貝花卉模樣菓子盆に打出し紅葉、有平松葉を盛りて出され宗旦より慶首座に贈りたるノンコウ作赤茶碗にて薄茶を侑めらる時正に四時、一同厚く主人の優遇を謝して玄關に出づる通路にも尙ほ蘆雪の極彩色蘆鴨の一軸を見受け愈〻主人の八宗兼學に駭くと同時に是れでもか的追窮の益〻手强きに避易して倉皇退陣するを門前まで見送りたる主人の禮意殆んど陳謝すべき辭なかりき。

白鶴大盡の茶味

白鶴主人嘉納治兵衞氏は奈良の中村雅眞氏の令弟にして主人の直話にも彼の勾玉は家嚴が愛玩したる唯一個が種と爲りて今日の收藏と爲りたる由なれば其美術癖は父祖の遺傳に因るものゝ如く從來文人物を好みて其趣味頗る深かりしが今度御影の新築成るに及んで抹茶の一會を催すに至りたる次第なれば文人の山の芋が將に茶人の鰻に變化せんとする所にして今や半文半茶の境界に住する者と云ふ可し而して今後主人の茶趣味が如何に發展す可きやは大に注意すべき未知數なり元和偃武の後、京阪の富豪にして茶事を嗜みたる者其幾人なるを知らざる中に嶄然頭角を露したるは淀屋个庵、鴻池道億なり个庵は茶友に江月あり遠州あり松花堂あり佐川田喜六あり其往來交會の間に得る所果して如何なりしぞ道億の時に至りては宗旦已に世を去りたれども猶ほ藤村庸軒等ありて共に淸寂鄕に遊びたるならん如何せん今や茶道に大宗匠なく嘉納氏を圍繞する者は槪ね氏の鼻息を伺ふ者にして時に一喝を氏に喰す可き嚴師を見る能はざるは實に當代の恨事と云はざる可からず然りと雖も嘉納氏の聰明思ふて此に至らざるの理なし余は大正の昭代に在りて嘉納氏が步武を个庵道億に接するの工風あらんことを斯道の爲めに懇囑に堪へざるなり。

關西無茶修行（十）

關西茶事概評

京都大阪堺は往時茶人の淵藪なりき德川氏の初代江戸勃興の際に於ても大德寺一派の茶僧、千家本支の宗匠等猶ほ京阪の間に偃蹇して自ら江都の茶人を蔑視したる趣なきに非ず其後片桐石州出でて專ら江戸の茶壘に據り諸國の大名を其門下に羅致することを勉め降て川上不白現はれ所謂江戸千家の旗幟を飜したりと雖も表裏千家及び藪内等の本山は猶ほ嚴として京都に在り天下悉く其下風を仰ぎたる次第なるが維新の大變は關西茶道に大打擊を加へ千家の宗匠は悉く扶持放れと爲り見渡す限り京阪地方は一時茶煙を絶つに至りたるにぞ宗匠も是非なく俗に媚び抹茶と云へば則ち薄茶にして多くは讌席の餘興に供し濃茶は面倒なり一生に一度試むれば澤山なりなど大家旦那の御意のまに〳〵其日々々の御茶を濁して辛うじて今日に達したるものにして利休の創立したる茶道の清規は早く已に壞廢し去り器玩に耽り形式に流れ俗惡厭ふ可きに至りたるは固より其所なりと云ふべし高谷今遠州等近來この流弊を慨し之を矯正するは先づ隗より始めざる可からずとて昨年來實地演習

に取り掛りたる次第にして誠に篤志の至りと云ふ可し余等は今次親しく其實地演習を參觀したる者なるが久しく荒廢したる濃茶道の事とて遺憾ながら一二首肯する能はざる所なきを得ず因て今無遠慮に余の注文を述べんに喫茶室は矢張狹きが宜し尊卑親疎膝突合せて和敬の交りを爲すが草庵の特長に非ずや懷石は一汁三菜前後に限られたし食事は唯滿腹を期し醉飽の度を逸せざるが草庵の清規に非ずや名器珍什を拜見するは固より宜し然れども無意味に雜陳して徒に其豐富を示すは草庵清寂の本旨に背くに非ずや一會一席の大法を無視して徒に長時間を費し數次客を煩して其動座を餘儀なくするは是亦草庵幽靜の趣致を害するに非ずや此數者は關西茶人諸君の斟酌を乞ふ可き者なれども余の特に希望して已まざる者は

前茶全廢

の一事卽ち是なり凡そ茶席の懷石に貴ぶ所は西洋料理の夫れの如く其食物の順序の生理的調和を得るに在り然るに關西の茶會に於ては午前十時に客を招ぎ先づ菓子を供し次で濃茶を供し然る後に午餐を供する者多し菓子も濃茶も食後に於てこそ結構なれ之を食前に頂戴しては啻に午餐の味を損す

るのみならず的面に腹加減を損じて憐れ茶毒の犧牲と爲らざるを得ず余が前茶を名けて茶道のダムダム彈と云ふもの決して偶然に非ざるなりダム〳〵彈は茶道の平和會議に背く者にして文明茶道より斷じて排斥せざる可からず扨て其次は

後酒全廢

なり茶道の清規が禪僧に依りて定められたるは人の能く知る所ならん一回の食事に一汁三菜あり又菓子あり俗家に於ては更に酒あり然る後に濃茶を喫し薄茶を喫す縱令へ澹泊なる禪僧に非ざるも此上又何の求むる所あらん然るに錦上花を添へて更に又後酒を侑めんとす此くの如くして徒に馳走の厚きを誇らば終には茶人が折詰を提げて家路に歸るの奇觀を呈するに至るべし嗚呼盍ぞ其本に反つて之を思はざる是れ亦斷じて排斥す可き者なり

以上余の注文にして若し幸に諸君の同意を得る事もあらんか之を斷行する關西部委員長には御苦勞なから高谷今遠州を推薦せんと欲す利休が荒大名の帶刀を奪ひて之を小茶室に逐ひ込みたる當時の大勇斷を思へば是れ式の斷行何かあらん余は偏に委員長の手腕に信賴して其結果を見んと欲する

者なり。

關西無茶修行（十一）

帶雪庵の茶趣

大阪方面に目指し來りたる茶會は濟みぬ亭主方に於ては或は痒き處に手の屆かざる客振りやと思はれんなれども數々の名器に對して馬越總大將が感服の武者振りは例の頑健なる精力を發揮して殆んど餘蘊なかりし者と云ふべし此疲れたる總大將を始め其他一行を誘引して翌十一日午後匆々押掛けたるは東平野町なる吉野五運氏の別業塔々軒なり當園は千家の如心、啐啄、吸江、三代の宗匠が丹精を凝したる名所なれども今や電車の新線路に當りて近々其一半を取り毀たれんとす去る五月中余は一見して眷戀措く能はず茲に一行を伴ふて再訪を試みたる次第なり名家の事とて令息五三郎氏は頗る茶味あり先づ一行を啐啄齋好みの帶雪庵に請じて薄茶一服を供せんとす庵は二疊大目にて床に掛けたる宗旦銘椋の木の瓢花入には高谷君專賣の例の蕃茄一輪を生け宗全の面取風呂に九兵衞累座の釜を掛け水指は信樂、茶入は吸江齋好み一閑平棗、茶杓は大龍和尙の先明と後證と二本の内を用

ひ人形手の菓子鉢に菓子を盛り御本半使及び長入の茶碗にて薄茶を出さる年古りて落附きたる茶室に瀟洒たる茶趣を示さる〻五三郎氏の腕前には一同感嘆の聲を洩さゞるを得ざりき扨て當園は總體僅に千坪内外にして平地は四百坪に過ざる由なれども園内に茶室三、廣間二ありて山徑高低、老樹陰森、紆餘曲折して如何なる大庭園なるかと思はる〻處卽ち大宗匠の苦心を見る可きなり今其景勝を記述せんとすれば數日の紙面を費す可きに就き余が最も氣に入たる茶室乍庵を紹介するに止んとす乍庵は吸江齋が利休の獨樂庵に倣ひ長柄の橋柱を床柱に用ひたる小庵にて有名なる篠崎小竹の記文あり今其漢文を直譯すれば

乍庵の記

吉野氏は滴水村に出づ村は浪華の北二里に在りて而して河に瀕す昔時長柄の長橋の在りし所なり土人地を鑿ちて往々橋柱を出す嗣宗の先人玉成君其一を得て而して藏す嗣宗頃者一茶室を其莊に作り之を用ひて楹と爲す蓋し利休千居士の獨樂庵に倣ふなり庵、橋柱を用ふるは世人の知る所、當時菟道に在り後ち好事者之を浪華に移す今則ち雲州侯江都別業の物と爲る君摸して而して之を浪華に存せんと欲す柱を藏する所以なり嗣宗乃ち之を居士の裔孫吸江齋主に謀りて而して之を營み以て君の志を成す因て自から之を名けて乍庵と曰ふ乍、長柄と邦訓相通ずるに取るなり余爲めに其事を記し且つ之が說を爲つて曰く乍の字人を加ふれば作と爲り心を加ふれば怎と爲る嗣宗の此室を營む齋主と謀り一に居士の舊に仍る述べて而して作らざるに類するあり以て人を去るべし父の物を用ひて父の志を縱にす自から其慾を肆にするに非ず卽ち心の怎ぢざるなり以て心を去るべし且つ夫れ茶道は宜く先規を守るべしと雖も而も其說禪に本づく則ち胸懷脫洒ならざる可からず乍は忽なり意を用ひざるなり然らば則ち嗣宗の庵に名くる抑も亦茶道の奥に得る所あるか

弘化三年歲丙午に在り夏四月小竹散人篠崎弼撰並に書す

乍庵の由來は右小竹の記文にて明白ならん當庵は其頃頗る名高かりしものと見え千種有功卿のものせる左の歌あり

吉野徵が長柄の橋のふる木を柱として造りたる茶室を乍庵となづけしがいはひの歌とて乞ひければ

つくりなすいほのはしらのなからへて
たのしとのみそおもひわたらん

今當庵の構造を見るに三疊の間を二疊は疊他の一疊は板張りなる其殆んど中央に徑一尺もあらんづ例の長柄の橋柱を立て向ふて左を床とし右の片隅をハス掛けに切りて之を茶道口と爲したる者にして其太き柱が目に障らず至て沈着したる席に見ゆるが其計畫者の大手腕なり附屬の水屋等もチンマリとして勝手宜しく斯る庵室を造り得るに至る宗匠は幾十の茶室を造りたる老功者ならざる可からずと感嘆の餘り

庵のうちに昔なからの橋柱
たてにし人の名こそくちせね

當園内には尙ほ記す可きもの多けれど今は其餘裕なきを以て當主人が茶味深き八疊披の間に萩坊乘圓筆五疋鶉の一軸を掛けて一行に番茶を供したる其輕妙の趣向を感謝して遺憾ながら爰に擱筆する事と爲さん。

關西無茶修行（十二）

和樂庵の臨時檢査

余等と同時に大阪の茶會に招かれたる名古屋の茶客中には富田重助、田中久彌及び西行庵主下村實栗の諸氏あり一夕阪神電車中に邂逅せしに田中氏は目下名殘の茶會中なれば是非參會相成りたし日取は十四日正午との事、余等は修行者の身の上なりシタ、か向ふ疵も受け居る者なり儘よ手負ひ猪の勇氣を示さんものと玆に覺悟の臍を固めて快く果し狀を引き受けたり吉田田中の兩氏は歸京し馬越氏は後より出陣の筈なれば余は八田圓齋を伴ひ十二日大阪より名古屋に赴き翌十二日午後大高驛なる西行庵を訪問せんとする心算なり是れは八九年前同庵を過ぎりし時中興銘物柳蔭の茶入を見て夢寐之を忘るゝ能はず今度修行の道すがら再び其茶入に見參せんとの念願にして庵主も已に承知の事なり然れども此午前を空過するは勿體なし何をがなと思案の果て突然思ひ附きたるは和樂庵の臨時撿査卽ち是なり。

自若たる和樂庵主

和樂庵主とは岐阜の加藤與三郎翁なり金森宗和の和と織田有樂の樂を合せて和樂庵と號す元近江屋と云へる道具商の家に生れ母方の姻戚加藤氏を繼ぎて所藏茶器頗る多く彼の高谷氏の三島外花茶碗の如き一時翁の所有たりしなり當年七十五歳岐阜の相生町に閑居して日夕松風に親しむ由を傳聞せしのみならず兼て一面の識あれば午前九時八田圓齋を伴ひて名古屋を發し同十時と覺しき頃岐阜の停車場より一直線に和樂庵へと馳せ付け其昔織田信長が齋藤道三を不意打せし軍略にて老松高く聳えたる其玄關をおとなへば清癯鶴の如き老翁、自髯を捻りながら出で來り「是れは珍客、如何なる風の吹き廻しか何はしかれ先づ〳〵是れへ」と案内されたる八疊の間には亡孫女の佛事後なればにや探幽筆中笛吹地藏左右山水三幅對を掛け藍毛氈の上に座蒲團二枚を敷き前に手焙りの出で居る其用意周到、治に居て亂を忘れざる名將の心掛けも斯くやと先づ荒膽を挫がれたり扨て寒暖の挨拶終るや翁は會釋して茶室へと立ちしが未だ五分とも過ぎぬ間に合圖の磬はチン〳〵と響きぬ是に於て余等は庭に出で老松の下に在る四方佛の蹲踞石にて漱ぎ頓て庵室に入りて驚きたるは其構造の異樣なる事なり此庵室は元京都の龍安寺に在りし者にて後德大寺左大臣が彼の「ほと〻きす鳴つる方をなかむれは」の歌を詠みたるは此庵にして明治何年頃にか三條公は之を詠歌亭と名けたりと云ひ西行法師嘗て此庵に住みたる事あり細川勝元龍安寺在陣の時亦此庵を愛したる事ありなど樣々の傳說あるも無理ならず床脇の龍透し彫りは正しく鎌倉以前の物と覺しく本來寺中の亭なりしを後人が茶室に改造したる由にて明治二十五年故町田久成氏の周旋にて翁の手に歸したる者なりとぞ。

七十五翁の佗茶の湯

扨て此席は三疊少しく詰りたるに鐵の風呂釜と備前梔子形の水指を置き合せ床には彼の佛事の爲めにや梵字樣の軸を掛け窶れ鐵鉢に味噌松風及び四日市より到家の干菓子菊松葉を盛りて余等の前に出し頓て薄茶手前に取り掛る其器物は左の如し

茶入　一閑折タメ棗　宗旦判あり

茶碗　御本

花入　トコ鍋耳付に野花

茶杓　翁宗守行年七十　一作銘鹿の子

香合　藤村瑞子回也寫し　土佐光成繪

手前の老熟は言ふ迄もなし最初蓋置の上なる釜の蓋に茶巾を載せんとして誤りて落したるを其儘に

して湯を茶碗に入れ次で茶筅を其中に入れ置きてソト水屋に立ち茶巾を淨め來りたる其態度の沈着さ加減何でもなき事ながら態とならずして老功の程感服せり此老中々洒落にして手のみか口も亦八丁なり『イヤ中央金庫より臨時檢査とありては田舍銀行の狼狽一方ならず夫れにも增して斯くの始末、御一笑下されたしなどの挨拶あり又高谷氏が三島外花を用ひたりと聞きて『アレは寂び物だけに茶入は先づ棗と來ますか』とは圖らずも愚見と暗合したり兎に角無茶修行者の不意打ちに箇程の相手を爲す者は日本國中果して誰々なる可きや一本參りて引き下り今一勝負と馳せ向ひたるは大高驛の西行庵にてありき。

關西無茶修行（十三）

西行庵の風情

岐阜より大高驛に着したるは十三日の午後二時半頃なりしが停車場には庵主の令息三一氏が出迎ひ居りて西行庵へと案内さる庵は停車場より右手に當りて臥牛狀を爲せる丘の一角に老松四五本ある其大木の下に在り行くこと三四丁、崖を登りて松綠楓紅相映ずる門の正面を仰げば安樂院の三大字ある扁額あり此三字は御醍醐天皇の宸筆にして西行に緣故ある奈良の安樂院にありたる者なりとぞ、門を入りて突き當りたる入口を眞直に通れば間取面白き三疊の待合あり、次ぎが六疊の一室にして此室には伊勢誌文並に伊勢名所圖繪にある西行自作の像を安置し又其次ぎが茶室にして一疊半利休床なり庵室は唯此三室より成り門を入り崖に沿ひて左に腰掛あり是れより細長き庭傳ひに五六間歩めば蹲踞石ありて恰も躪り口と相對せり余は八田圓齋と先づ待合に入り案内を待ちて腰掛に通れば一閑張りの煙草盆に志度呂燒角火入を置き禪板の脇に撞木を掛けられたれば頃を測りて其撞木を取り禪板二つ打叩くに頓て柔和なる老僧の如き庵主は黃衣黑十得にて出迎はる扨て席に入れば床には丹波の少將成經の消息文に醍醐勝鬘經の裏打したる一軸を掛けたるが消息は讀み難けれども油を送る文意なりとぞ此一軸の下には不味公好み花使の花入卽ち細き花手桶に白玉椿とはしばみとを挿みたるが何とやら尼寺の常住品の如くにて心憎きまで能く取合ひたり釜は古淨味棗形、炭取は瓢、香合は吳洲大赤玉身蓋共八十三番號、練香銘山人、羽箒は松尾宗古箱にて鶴三ツ羽、鐶は金森德元在銘、火箸同樣、水指は備前蹲り形にハン子ラ蓋、茶杓は近衞豫樂院公筆宗和の二字ある宗和共筒、蓋置は半枯竹引切、建水は面桶にして黑緣高に銘初霜の菓子を入れて差出し置き余等の歸名を

急ぎ居る爲め挨拶も炭手前も匆々にして珠光龍の袋を掛け胴庫の上棚に飾り置きたる柳蔭の茶入を取出し遠州の感狀ある銘既白と稱する井戸茶碗にて濃茶手前あり庵主も相伴ありて後、先づ茶碗を拜見するに青井戸の稍締りたる方にて高臺の作尤も好く貝らげも十分にして約束總て備り景色多く樂み深き茶碗なるが遠州の手紙一軸添ふて「茶碗一覽申候井戸にて藥、心よろしく茶も立てよく御座あるべくと存候茶碗が重きやうに仰せられ候へ共此手の者は斯樣に厚手に御座候近年珍しく存候」云々とあり次に拜見したるは先年一度見參し今度又一覽を所望したる例の柳蔭の茶入なり各種の茶書に散見すれば今其詳細を記すの必要なけれども茶入は極く締りたる方にて山椒は小粒でピリ、と辛きの類なるべく斑藥の掛り工合申分なく何處までも氣の利きたる茶入なり遠州も餘程鍾愛せしものと見え其箱の横手に「道のべの清水流るゝ」と書き蓋の甲に「柳かけ」と題して其裏に「しはしとてこそ立留りけれ」と書付けたり余は此茶入を愛重して先年庵主に所望したるに西行庵に無くて叶はぬ一物なりと聞きて夫れも尤なりとて斷念したることありき今度此茶入再見を所望して來庵の道すがら老人如何なる掛物を用ゆ可きや西行物かなど樂みつゝ入席すれば丹波の少將成經なり此に至りては思はずポンと膝を叩きて老人の老功に感服せざるを得ず。

關西無茶修行（十四）

輕妙なる點心

余等の急ぎ居るを知りて庵主が間もなく持出したる黑山崎折敷には染付麥藁手の角細向附にしめぢ茸大根おろし三杯酢を入れ大湯盆に紅葉を敷きて其上に涼爐を載せ保全作繪高麗土鍋に牡蠣の清汁を盛り又白木の盆に同じく紅葉を敷きて其上に銀杏入りの粥を炊きたる利久形汁次鍋を載せ其粥に牡蠣の清汁をかけて一椀召上れとの趣向なり此外に宗拙好み一口椀に臺灣海月ソギ柚織部角足付八寸にツグミの燒物と鹽湯出百合を載せて出されたるが時將に五時に近く庵外には時雨の降り來りて木の葉を誘ふ音さへ聞え庵内には酢いも甘いも味ひて濱邊の貝殼の如く角の取たる八十の老翁が此溫き粥にて時雨の寒を凌がれよと云ふ挨拶何等の茶味何等の情趣ぞ斯くては一首なかるべからず

立ちよりて語らふ程に日は暮れて
時雨降りきぬ松の下庵

是れより庵主は彼の井戸茶碗の外箱を食籠に見立て之れに惣菓子を盛りて長次郎の茶碗にて薄茶一服と云ふ趣向なりしが歸名の時迫りたれば薄茶々碗を拜見して後、番笠に時雨を凌ぎつゝ辛うじて停車場へと駈け付けたり。

西行庵主の老功

庵主は天保四年の生れにて本年八十歳なるが通稱は下村實栗、父は狩野風の畫家にして丹山と號し法橋と爲りたる由、十六歳にて茶禮を松尾宗古に學び宗古歿後久田榮甫の門人と爲り安政五年和宮東海道御通行の際、尾州家より鳴海陣屋の茶道方を命ぜられ其御聲掛りを以て眞の臺子手前を許されたる次第なれば庵主は六十餘年間茶道に悠遊せるのみならず資産あり又中々娑婆氣ありて名器を所藏するが故に世間に有ふれたる佗びと違ひ所謂綺麗なる佗び茶人なり此六十餘年間鍛ひに鍛ひし老人が小さき柳蔭の茶入を取りて泰然と構へたる時の姿勢は實に頭の下る程の威嚴なれども夫れより手前はサラ〳〵と碎けて序破急の變化無我無心に出で故梅若實翁の仕舞を見るが如く一種言ふべからざる妙味ありたり八十の老翁にして矍鑠たること彼れが如く名器名腕兼ね備ふること彼れが如き茶人は啻に海道一と云ふのみならず日本國中殆んど比類なき者なるべし異樣なる對照なれども岐阜の加藤翁を信長とすれば庵主は其れ家康ならんか。

關西無茶修行（十五）

田中久彌氏松風軒茶會

十四日正午は名古屋市南鍛治町田中久彌氏の茶會にして是れが今度無茶修行の最後なり當日は馬越翁大阪より參會の筈なりしが俄かに不參の趣電報し來りたれば余は八田圓齋を伴ひ兩人にて先づ三疊の寄附に入りしに床に大鳥の羽箒を下げ毛織寫の瓶掛に銀の湯沸しを掛け杉時代盆に染付の湯呑瀨戸茄子形の香煎入を載せたり頓て腰掛に出づれば一閑丸煙草盆に志野角の火入あり扨て松風軒の床には夢窓國師の秋月照湖上の五字一行物を懸け遠州好みの敷板に了然作大面取風爐を置きて蘆屋福祿壽地紋の釜を取り合せたり主人の挨拶に次ぎて炭手前あり香合は宗旦在判一閑烏帽子形炭取は唐物草組、火箸は宗和好みなり斯くて懷石は左の如し

向　乾山色繪、おく鮎、打栗木海月加減酢、黑樂猪口

汁　京味噌、冬瓜、紫蘇穂

燒物　吳洲赤繪鉢壽字見込、鰺糀漬

椀　鴨鉢むし、青芋莖生皮茸　菓子　加州森下製池の面、結干瓢　香物　茄子鹽押

中立後床には竺叟宗乾在判唐物籠に足柄山笛塚の山菊外二種を生け濃茶器物は左の如し

茶入　瀬戸小肩衝銘小鷹袋亡羊純子　茶碗　釘彫伊羅保銘秋の山　茶杓　江岑共筒、古岸何人把釣竿の句あり　水指　利休形木地釣瓶

建水　南蠻砂張　蓋置　青竹引切

濃茶了るや廣間にて薄茶をとの案内に連れ松風軒同様新築の月遲洞に到れば此處にも數々の飾付けにて其重立ちたる者は左の如し

掛物　女雪信筆王昭君の圖　花入　古銅方壺式耳付宗和箱書花白山木玉幕草　釜　古天猫霰肩衝　風爐　與次郎作鬼面　水指　信樂細

茶器　如心齋觀菊棗　茶碗　ノンコウ黑木米作霜掃紋　香箱　時代錫緣梅蒔繪　菓子　色繪獨樂盆千代の壽木賊有平

右の如くにして薄茶了れば後酒出で吸物八寸强肴數々あり皿鉢等に樣々の名器も出でたれども連日の立合ひ疲れにて目先もちらつき足元もよろめき記憶も確ならざるまでに參り果てたれば厚く主人の好意を謝し木劍投げ捨て這々の體にて引下りたるが當茶會に於て拜見の諸道具中釘彫伊羅保茶碗秋の山は先年大阪平瀨家の入札に出でたる者にして稍締りたる方なれど作柄凡に越え石ハゼ面白く殊に其見込に一點紅葉の如き色あるは此茶碗の特色にして伊羅保茶碗中有數の者ならん左れば此秋の山が富士の山の如く獨り聳ゑて他の諸道具の遙か麓に蹴落さるゝは又是非もなき次第なり茶事の趣向に就ては余は徒に減らず口を叩いて忌諱に觸るゝを敢てせざるべしと雖も風爐名殘を斯く賑々しく仕組みたらば口切の御茶は如何なる趣向に出でらるゝや懸念に堪へざるは唯此一事のみ扨て東京出發以來九日間の日子を重ね到る處諸茶家の厚遇を恭うしたれば爰に無限の光榮を荷ひて名古屋發十二時の夜汽車に乘り込み無事東京に歸着したるは翌十五日朝なりき

木の芽の香猶ほわが袖に殘りけり
數寄屋めぐりに日數かさねて

關西無茶修行（十六）

無茶修行より歸りたる翌日高谷桂堂氏より一書の中に『此度は遠路田舍芝居見物に御出掛け下され御迷惑奉恐察候尙ほ明年の春季秋季兩會は少くも二組位御申合せ御來遊奉待入候拙詩二首爲紀念供貴覽候御叱止被下度候』とありて

樂只庵茶會後賦之以呈箒庵先生

雅客東西集一樓　時維大正改元秋

風流從此應鳴盛　茶道本來非戯遊

殘缺鐵爐堪煑茶　秋光將老野人家

傷心何以酬東客　聊挿南瓜霜後花

高谷氏は茶に宗範詩に桂堂と號し古法帖を愛して書は最も得意なる人なり乃ち次韻して謝意を表す

壬子晩秋大阪茶友諸君設讌邀余淹留數日回家後桂堂兄有寄次韻以酬兼呈諸君

酒香茶熟幾家樓　橘綠橙黄又一秋

爲是諸君能愛客　浪華且作半旬遊

次韻却寄桂堂兄

關左風流闘建茶　一爐秋味屬誰家

喜君能愛幽閒趣　壁上奇瓢挿野花

扨て又戸田彌七氏よりの來書には『御茶會記日々相待ちて拜見致居り候其後當地には井上氏の茶會あり又兵庫にも同樣の催しあり殊に北濱の武田半兵衛氏の茶會は古き御茶人ゆゑ面白き趣向に有之候御蔭にて追々盛大に相成可申候』云々とありたり大阪滯在中聞く所に依れば今度同地を中心として十人組とも稱すべき順會の申合せ整ひたる由而して其人々は

高谷恒太郎、嘉納治兵衛、戸田彌七、芝川又右衛門、上野理一、豐田善右衛門、嘉納治郎右衛門、村山龍平、鈴木馬左也、中村雅眞。

なりと云ふ高谷氏の所謂風流從此應鳴盛とは疑もなき事實にして關西茶道の勃興は後年或は東都を凌駕するの日なしと云ふ可からず誠に芽出度き次第なれども其芽出度きに就き玆に懸念に堪へざるは其茶風の傾向是れなり本來余等は茶事を以て業とする者に非ず中流以上の紳士にして文雅風流の嗜みある者、折に觸れ場合に應じ交懽會食する方式として偶々之を適用するに過ぎず故に手前の上手なる固より好し其練習に浮身を窶すも亦咎む可きに非ざれども左ればとて手前一方に傾きて彼の婦女子の踊と一般なる差す手引く手が其格に入りたればとて夫れにて能事終れりと云ふ可からず器物の結構なる亦固より好し否寧ろ必要なりと雖も左ればとて使用其處を得ず或る村芝居の忠臣藏に義經を出して『斯る處に義經公悠然として出で給ふ左したる用事もあらざれば又もや奥に入りにけり』と床淨瑠璃を語りたりとの奇談に等しく茶事の舞臺に不調和なる器物卽ち役者が登場すれば天晴れ御大將たるべき者までも爲めに其器量を下ぐるのみか全局の趣向悉く支離滅裂に歸するに

至らん左れば所謂紳士茶は先づ其風情を根本とし花鳥風月四季慶弔其他雑多の場合に於て歴史あり詩歌あり愛情あり禪味あり以て客に無限の感興を與ふるの工夫なかる可からず例へは風爐名殘には先づ秋晩の景色を見せ蕭に物の憐れを思ひ知らせて餘情殘心を催し置き口切に至りて陰陽ガラリと趣を換へ新茶の新しきと共に茶人の心機を一變せしむるこそ肝要なれ此等の茶趣は關西茶友諸君の夙に熟知せらるゝ所ならんと雖も余の觀察する所にては或は形式と器物とに囚はれ一會の茶事に一貫の風情を缺く者なきにしも非ず余常に曰く形式を尊んで形式を卑め器物を重んじて器物を輕んぜよ紳士茶は先つ須らく其風情を尊重すべきのみと爰に關西無茶修行を終るに臨み謹んで茶友諸君の厚意を謝すると同時に敢て此一語を爐右に寄呈せんと欲するものなり。

松浦伯心月庵茶會（上）

秋は蟲の音、雁の聲いづれ哀れを催すが常なれども今年ばかり身に沁みて濕り勝ちなりしはなし諒闇中は只管謹慎を旨として親き中さへ自から疎遠に打過ぎければ御大喪第三期に入りては清肅なる茶會など催して交友互に久濶を叙するに至る時に取りて誠に適宜の社交法とや云はん余が關西無茶修行の途に上らんとする前後より東都に於て口切は瓜生百里、吉田楓軒、松原瑜州、竹内寒翠に依つて開かれ名殘は益田鈍翁、岩原謙庵に依つて催され猶ほ其外にも安田松翁の一休忌茶會、栗山善四郎の追善茶會、三井守之助、福井菊三郎兩氏の盲茶會等ありて少しく寂寞の感を破りたるが如し此等の茶會中には余も招がれて參會したる者あれども關西無茶修行の記事に追はれて東都の茶會を記し洩すに至りたるは大家の店借り同然なり左れど今更追記も如何なれば余は去月二十二日正午松浦伯心月庵の茶會を以て東都の代表的口切と見做し茲に之れを記載するの光榮を荷はんとす。抑くも松浦伯爵家は茶道と因緣深き名門にして元祿十六年八十二歳の高齡を以て薨じたる肥前守鎮信德々祐居士は片桐石州に私淑して出藍の譽あり終に鎮信流の一派を開きたる茶博士にして斯道に關する名譽の逸談少からざるは人の能く知る所なり而して先考心月庵明樂居士は元祿の鎮信に相對して明治の茶史に光彩を放ちたるのみならず文武兩道の達人にして故實に明に歌道に長じ朝野の尊重する所となりたる其趣は文祿時代の細川幽齋に似たるものあり茶事は中年より練習せられたる由なれども老練圓熟、無念無想の境に入りて世上に所謂宗匠なる者と固より同日の談に非ず人に接する邊幅を飾らず眞率恬澹にして物に拘らず其自から茶事を行ふに當りては輕妙にして滯る所なく晩年

疾を得て左手の自由を失ふや右手のみにて茶鐺を取り卸ろし又茶入茶杓を扱ひ平常の如く茶を點ずるの手際の老練なりしは茶人間の一奇觀として一同駭服せし所なりき明治三十五年は鎮信居士二百年忌に相當せしを以つて追善茶會の催しあり其二月二十三日より十二月二十八日までの間に百回の茶會を開らかれたるが古來百回茶會は利休及び宗旦の二百年忌若くは長壽祝賀等に際して專門宗匠が催したる事なきに非らざれども明治時代には曾つて其例なきのみならず名門の主公にして之れを營みたるは蓋し古今獨歩なるべし扨て故伯の茶事に於ける茶杓花入香合炭取等に各種の好みあり口切には例年新に瓢炭取を製して之れを用ふるの例あり又著述も少からざる中に棚飾の書は床棚書院一切の飾方を圖示したるものにして斯道の參考に稗益する所尠からず歌には心月集あり四季戀雜千百首を收めたれども猶ほ其詠歌の一半に過ぎずと云ふ又木の芽の香と題する紀行文あり是れは明治三十四年六月故伯自ら東都の茶友を率ゐて京阪の茶家を歴訪し滯在十日茶會十二回の實況を記述したるものにして恰も過般余等の關西無茶修行と一般、當時京阪の富豪若くは專門宗匠の茶風を窺ふに足れり而して木の芽の香の端書の末に故伯の物されたるは

見ぬ人のつとにせんとて宇治山の

木の芽の香袖にしめつゝ

の一首なり惟ふに故伯が和敬會を發起し後進茶家を薫陶し又好事家の爲めに茶室茶庭の設計を爲したる其成績は今尚ほ耳目に新にして明治茶壇に貢献する所實に尠少ならずと云ふべし故心月伯の茶道に盡せしこと此の如し左れば孝子鸞洲伯は遺志を繼ぎて現に和敬會員に列し毎年秋冬の候、口切の一會を催して茶友を招ぎ併せて先考の遺愛品を示すを例とし去月二十二日に開かれたるは卽ち其今年分にして誠に奥床しき茶會にぞありける。

松浦伯心月庵茶會（中）

十一月二十二日松浦家の寄附に參會したるは萬里小路伯爵、石黒男爵、馬越恭平、青地幾次郎及び余の五人なるが和敬會の順番に從ひ青地幾次郎氏が正客となり萬里小路伯爵石黒男爵を中軸とし馬越氏末客として案内のまに〳〵腰掛に出づれば伯爵令夫人の出迎へあり扨て中門を入りて苔蒸したる伽藍の蹲踞石に向へば垣根の紅葉は疎らながらも暮れ行く秋の名殘を留め敷松葉と交錯する綠苔は甞て故伯爵の詠み給ひし

みとりなる苔のむしろを敷く庭は　さすか浮世のちりとてもなし

の一首を思ひ起さしむ蹲踞石にて漱ぎ心月庵の額を仰ぎて躙り上りに入らんとすれば御流儀とて延べ段の上に置かれたる手桶に清水を湛へたるもすが〳〵し庵は三疊大目にて床には南堂清欲筆靈山密付之語の一軸、爐には古蘆屋銘世の中の釜を掛けられたるが頓て主人伯爵二十五貫目の巨軀を悠然と現して挨拶あり例に依て代點を許されよと述べらるゝや石黒況翁すかさず「夫れは却て有難し」と云ふ「却て」の一語は況翁ならでは發するを得ずとて一座相顧みて哄笑せり斯くて伯夫人入り代りて炭手前あり

香合　青磁羅漢一文字　炭取　唐物籠　羽箒　鶴三つ羽　灰器　出雲燒　水次　木地片口

古蘆屋銘世の中の釜は先年一度拜見せし名器にして形稍大きく地肌細かに大人なしく上品なる姿なり又青磁一文字羅漢は此手の青磁に例なき程色合優れて羅漢の模樣も鮮明なり此御道具組にては後座の佳興も想ひやられて馬頭米嚢も啻ならざりき扨て懷石は

向　鱚笹作山葵　汁　百合根水かちし　椀　蕪海老鴨口柚　燒物　大串子　吸物　袋牡蠣蕗の薹

八寸　納豆外一品　香物　淺漬澤庵

食事了り椎茸干瓢を添へられたる蒸饅頭を頂戴して中立となり再び入席して見上ぐる床には石州作にて出來非凡なるヒシギ竹尺八に白玉椿を挿み同じく上出來なる備前種壺の水指に翁手銘霜と稱する茶入を置き合せて伯夫人の濃茶手前あり茶碗は古三島、茶杓は鎮信作「汲みて見よ鹽ならすとも唐竹の此一節は須磨の浦人」の歌銘ある煤竹、建水は木地曲、蓋置は青竹引切なりき扨て茶入は翁手に見受くる例の黄色なる藥替りあり挽家銘權十郎、箱書付宗中にして翁寂びたる趣いと面白し左れども別して結構なるは古三島の茶碗なり此茶碗は過日大阪にて一見したる高谷氏所藏の古三島外花茶碗よりも更に一手古く形稍抱ひて鐵鉢の上部を三部通り切りたるが如く鼠色の藥、柔く且つ光澤あり内外に散點する花模樣は左まで鮮明ならざれども其鮮明ならざる所に寂びも時代も現れて手に取れば下に置き兼ぬる程の妙味あり蓋し古三島茶碗の横綱と稱すべきものならん。

松浦伯心月庵茶會（下）

伯爵夫人の見事なる御手前にて濃茶一巡すれば頓て披の間へとの案内あり當家の披の間は皎潔軒と

稱し年古りて落ち付きたる六疊の間なり床には狩野尙信筆上出來の蘆雁蓮鷺の雙幅を掛け黑塗面朱の小卓に黃祥瑞細香爐を載せて其前に置かれたり棚には古田織部の茶の湯の書を飾られ釜は大西定林作俵形、水指は三河内燒白地藍模樣にて之れを心月好み陰陽棚に載せ薄茶器は鎭信好み糸目、茶杓は心月作、茶碗は古萩及び膳所燒にして二ッながら非凡なり建水は南蠻〆切、蓋置は瀨戸にして伯夫人の薄茶手前あり惣菓子は心月好み紅白打物なりき。

抑も今回の口切は小間廣間とも道具の組合せ申分なく名家の事とて雜兵に至るまで悉く精選にして正々堂々の陣、批評の乘ずべき隙なきは只管感服の外なきなり殊に其披の間が簡潔にして小間の茶趣味に差合はず世間に有りふれたる廣間の爲めに小間の感興を全滅する通弊に陷らざりしは余の最も感服する所なり扨て彼の小間に掛けられたる淸欲南堂の墨蹟は元の天曆己巳臘月二十五日附にして我が京都大梅山長福寺月林道皎國師に對する送別の長詩なり筆者と云ひ日附と云ひ固より申分なけれども蓋し此掛物は鸞州伯が詩眼を以て選み出されたる者にして茶眼を以て視るときは字體少しく細小に過ぎ世の中の釜、三島の茶碗等に對して幾分飽き足らぬ心地せられざるに非ず他家は知ず當家の寶庫中には猶更に雄大なる墨蹟の多々有つらんにとは所謂錦上に花を添へ備はるを君子に責

むるの類にして唯余が有らん限りの慾張りを述ぶるに過ぎずと知るべし

扨て鸞州伯爵は吾れ五十に達せざれば自から茶事を爲さずと常々言はれたる由なるが今や其時機已に熟したる者の如し又伯夫人は藝州淺野侯の息女にして入嫁以來久しく故伯の薫陶を受け鎭信流の奥儀を究められたるは石黑男の所謂「却て有難し」の一語之れを證して餘りあり又令嗣陞君が茶道の嗜好如何は知らざれども若夫人敬子の方は余が舊藩主德川圀順侯の令妹にして入嫁後數年御家風に依りて定めて修練を積まれしならんと之れを伯爵夫人に問へば近頃大分上達しましたとの事、松浦家の茶統は鎭信心月の遺德に依りて永く連綿たるべき事固より多言を俟たざるなり

薄茶了り雜談に移りたる頃伯爵より子年に因める御國燒の香合を贈られ當初露地に入りたる時より故伯の面影の偲ばれて思ひ出草の最と繁くなりまさるに付け石黑男の主唱にて一同故伯爵の靈前に額き夫れより主人の好意を謝し又來年を契りつゝ頓て伯爵邸を退出せしは東叡山の鐘四時を報ずる頃なりき。

詫び茶の奇談

余は去る十月和敬會順會の茶事を催す筈なりしを障る事ありて延引する間に大正元年もはや數へ日にならんとす斯くて茶債を翌年に持越すも妙ならずと俄に思ひ立ちて去る十五日より口切と歳暮の中間に小茶會を催すこと前後六回に及びたるが或る日一來客の雜談中左の如き面白き一節ありたり。

諸君未だ聞き給はずや此の程大阪にて一大椿事の出來せし事を或日の事同地に茶器入札會あり近來大阪を本據として頻りに活動する馬越恭平翁が數寄の道とてフト同會に顔出しするや大阪道具界の大王山中吉郎兵衞はノッ〳〵と其面前に來り珍しや馬越さん扨て先日は當地の茶會に御臨席の由御苦勞千萬に存ずるが聞けば高谷氏抔は明人の書幅を掛けて茶を出したりとか又戸田も廣間に三齋の懐紙を掛けたりとか今少しく工夫もあるべきにイヤハヤ言語道斷の次第なりなど高聲に話し居る折しも壁に耳ありの喩に漏れず高谷氏が偶然此處に來合せて山中の後に彳み居らんとは神ならぬ吉郎兵衞、如何で知るべき振り返り見て大に恐縮したれども駟も舌に及ばず今は二の

句も出ざりしが高谷氏は胸に一物態と喝一喝して貴公は嘗て自ら茶を出さずして漫りに他人の茶評を試む誠に奇怪千萬なり余が用ひたる詹仲和の書幅は果して如何なる文句なりしぞ貴公は之れを讀みたる事ありや意味も承知せずして適否を論ずるとは其意を得ず余は今日以後茶道に於て斷然貴公と絶交すべし否余一人のみならず余の茶友をして總て貴公と絶交せしむべければ左樣心得よと宣告せし權幕に流石の山中も只管恐れ入りたるを戸田彌七氏が先づ暫くと仲裁に入り山中に代りて其失言を詫びければ高谷氏も機嫌を取り直して然らば男らしく絶交を取消さんが大正二年一月十五日を期して山中自ら茶會を催しお詫び代りに當地の茶人を招待すべし此儀承知とあらば今日の事はサラリと茶否水に流すべしと大岡以上の銘判決を下されければ理の當然に閉口して山中も澁々承引し此場は目出度し〳〵の大團圓となりたるが斯くては山中も安閑たるを得ず左ればとて遽に銘茶器を得るも容易ならずと思案の折柄去る十三日東京美術倶樂部に於て松平子爵の茶器入札會あり銘物二十點に上る由を聞きて天の與へと打喜び當年取つて十九歳の一子を初陣として上京させ敵に後を見せるなよ潔く功名せよと申含めたる甲斐ありて群る東京勢の中に割つて入り友雪及び印月江兩筆の墨蹟及び長次郎赤樂茶碗銘初音を首尾能く打取て大阪に引揚げたるはな

んぼう名譽の次第ならずや斯くて山中は約束通り來月十五日彼の浪華津の梅咲く頃赤樂の初音を其茶會に漏らす事ならん洵に芽出度き次第なれども偖て芽出度からざるは拙者なり赤樂茶碗と兩筆の墨蹟は慥に拙者に落札すべきを彼の小悴奴が出しや張つて横取されたるこそ殘念なれ世の中は何が幸と爲り何が不幸となるや知れ申さぬ云々。

以上の奇談は大に座客を感動せしめたるがサンフランシスコの地震が太平洋を横切りて遠く横濱に波響するを見れば大阪に於ける今遠州の一喝が廻り〳〵て東都の入札會に反響するも亦其謂れなきに非ず左るにても寂びたる茶事を佗び茶と稱する事何時の頃よりの言ひ習はしにや知る者絶えて無しとか聞きしが山中吉郎兵衞の茶事を詫び茶と稱する事は大正二年一月十五日より始まるならん來年大阪茶界の盛運は此一事を以て卜す可きなり。

東西茶人の取組（上）

政論の火花は將に白熱に化せんとする傍に潁川ならぬ水道の流れに耳を洗ふて一夕の清興を催すものあり其冷熱樣々なる所が正に浮世の面白味ならん岩原謙庵此程米國ゼネラル、ヱレクトリック會社輸出部長ウーダン氏を自邸の茶會に招ぎたるに氏の正客としての坐作應對優に茶人の眞隨を發揮して一座の茶博士を驚倒せしめたるのみならず西ウーダン東謙庵の取組は國技館東西合併相撲以上の觀物にして軍配は何うやらウーダン氏の方に揚りたる模樣なりと同人間の號外頻々余の耳朶に觸るゝに就ては是非とも後見の一會をと申込みたるに謙庵も拒むに辭なく去る十八日午後五時より余と野崎汲古に磯村豐太郎、藤野龜之助と云ふ物産會社中の荒大名を取り交ぜてイザ御來庵と云ふ段取りと爲りたり。

謙庵の茶室の入口は井上侯爵家の正門と相對せり余は午後四時半と覺しき頃先づ井上侯の病床を見舞ひたるに老侯の元氣は平常の如く臥褥の上に安座して四方山の談話の中に「岩原とウーダンの取組は面白かつたさうだがウーダンの方がどうやら勝ちだと云ふ噂だがどうだい」と云はるゝは侯の病床へも早や彼の號外の傳はりたるものと見えたり余は直に之に答へて「是れが卽ちウーダン大敵でありませう」と駄洒つて匆々に引き下がるや否眞向ひの謙庵の寄附に駈附けたるに幸ひ相客も未だ着到せざるなり床には奉書の上に時代菊蒔繪の小硯箱を置き鐵の瓶掛及び鐵瓶の側には木地盆に染付の香煎入と菊模樣新物茶碗を載せ大蒔繪火鉢と並びたる煙草盆には緋ダスキの火入ありて一應

殊勝の體なれども寄附一面に熊の皮を敷き詰めたるは荒大名の荒膽を取挫がんづ趣向なるか非か頓て來客の揃ひたる頃異樣なる咳拂ひは崖の下より段々と近づき來り一段高きオホンの一聲をキッ掛に寄附の障子がサッと開けば荒大名の一人が「イヤ今晩は失敬」と大聲を發したるも時に取りての愛嬌なりし扨て客は魚貫して崖下へ繰り込み四疊半の茶室に入りて其床を見れば小堀蓬雪（遠州の弟にして權十郎と稱す）の墨梅に江月和尚の讃ある一軸が掛りて讃の五絶は左の如し

蔑千叢萬木、一朶好商量、吟取梅花去、讃詞字々香。　欠　伸　子

主人挨拶ありて炭手前に取掛る釜は道仁作鬼面鐶付松竹梅地紋にて共蓋なり唐物藤組丸炭斗に羽箒は野雁、香合は仁清作細筒形にして蓋の上に一羽の鷽あり胴に鱗形の一筋ありて宗和の箱書附仁和寺燒香合の六字麗しく梅に鷽は何の因緣にや古來畫家の畫題に上るものにて主人苦心の存する所慥に「どうでゲス」と云ふ合圖の咳拂ひを謹聽するの價ありと思はれたり扨て懷石は左の如し

汁　參州味噌　鮭かしら　向附　繪唐津ノゾキ　鯉、山葵醬油　椀　白魚シンジョ　若菜、新海苔　燒物　道八燒櫻紅葉模樣手鉢　鶉寄せ、青竹串

吸物　梅肉　酒器　櫻象眼鐵瓶子、保全作藍繪　德利ペルシヤ及び阿蘭陀盃　八寸　ムシリ海老　燒椎茸　香物　唐津小鉢　菜漬

菓子　蒸粟饅頭

懷石了りて元の崖路を攀上れば處々に散點する雪洞の火影の音立て〳〵流る〳〵遣り水に映じて初春の夜色朧氣なる中に崖を隔つる對岸の高殿には峰の嵐か松風かと琴の音さへ聞ゆる床しさ磯村、藤野の荒大名も感に堪へて暫時無言の折柄、大小大小中々大の銅鑼の響は力餘りて少々ビリ〳〵の音も交りたれど得も言はれぬ風情を添へて其好奇心を動かす事一方ならず少くも近々盲茶會員たらん位の趣味を生ぜしめたりと見たは僻目か。

東西茶人の取組（中）

銅鑼の合圖に應じて入席すれば床には花なくて唐物曲輪盆に獅子蓋織部の香爐を載せ名香曙を薫じ置きたり頓て濃茶手前に取掛り大寂びの備前に吳洲赤繪の蓋を取り合せたる水指の前に着座したる主人公は無遠慮なる今夕の客組に安心してか石州流免許皆傳の宗匠然と落ち着き拂ひて例の咳拂ひを連發したるも可笑し而して茶器は左の如し

茶入　飛青磁水滴　茶碗　椀形染附　花橘模樣　茶杓　嘯齋作銘さかふし筒に　遠州内トン齋とあり

染附花橘の茶碗は白地に鼠色を帶びて藍模樣等一見吳洲燒と思はれ雲州家にも之れに類似の品あ

りとは主人の説明する所なり又飛青磁の茶入は袋ありや無きや兎に角當夜は紫服紗に包みて愈寂氣を發揮したり茶杓の作者頓齋は遠州の下削りの由にて一見遠州作の如く殊に逆節の竹を用ひて出來面白き銘茶杓なり當家の茶器は概して寂び畑より根引し來れる者の如く何れも曰附きの面魂を具ふるは主人の好みか御師匠番の差金か兎に角特徴として見る可きなり薄茶は

茶入　胡民作　平目棗　茶杓　象牙　茶碗　御本松竹　梅機様　菓子　薄氷霜柱

にて雑談に時移りイザ御暇と立ち出づれば歸路は母家を經て其御床拜見の順序にして大廣間には狩野興以筆猿猴の二幅對を掛け書院には蒔繪の硯箱を飾り手附籠には美事なる寒牡丹三輪を生けたり茶室は墨梅の掛物なれば態と花を用ゐずして銘香を梅の匂に擬へ此に至りて突然寒牡丹の伏兵を出さんとする策戦計畫なるが如く今まで心中に花なき茶會の淋しさを喞ちたる客をしてアッと感嘆せしむる辛辣手段とこそ見えにけれ

以上は岩原宗匠が米國の茶客ウーダン氏を招ぎたる茶會の趣向を余等が後より一覧したる大要なり但しウーダン氏を招待したるは正午にて崖下の卍字形腰掛を寄附とし其路次に清流を聽き茂林を穿ち都會の中に遠近のたつきも知らぬ山中の景色を示したる主人の心入れ尋常ならざりしと云ふ當日の相客はウーダン氏同行のモリソン氏益田鈍翁兄弟、團琢磨、福井菊三郎諸氏の由なるが正客は無論ウーダン氏にて席に入るや彼の織部の香爐に銘香を薫じたるに對して先づ形の如き挨拶あり頓て主人が炭手前に取掛るや寒暖の口上より引き續きて路次の風情扨ては洗手の湯桶の心入れに對する挨拶まで流暢なる叙情詩的の英語を以て述べ立つるにぞ流石米國通の主人公も電氣機械註文の相談とは事變りて日本語にても時々當惑する茶道の應答を一句〳〵に飜譯する其忙しさに胸は二上り三下りツヒ亂調子と爲りけるか爐中に煉香を入るゝ一事をハタと失念して早や釜を五徳に掛け了りたればウーダン氏は隙さず御見事なる御香合も拜見致したければと夫れとなく主人に注意する主人は南無三仕損じたりと其狼狽一方ならず頓て再び釜を上げて香を爐中に投ずるやウーダン氏は鈍翁を顧みて床に銘香あるに爐に煉香を焚けば異様の香氣コンフューズ（混亂）するの嫌ひあり此義如何と質問せしにぞ鈍翁は質問の餘りに急所を衝きたるに驚き其一語眞に大茶人たるに足れりと激賞したる由、扨て濃茶に移りてはウーダン愈〻正客振りを發揮して茶入、茶碗、茶杓を始め一々器物を點檢して斯かる御名器には必ず長きヒストリー（歴史）あらん語らせ給へと所望して果は昨日堀津より買入れたりと覺しき新調の茶筅にまで必ず長きヒストリーあらんと言ひ出でたる其様子の時に附

燒刃らしき處あるはヨモ只事にはあるまじと主人には極内にて窃に探偵を試みしに果せる哉ウーダン先生は豫め今日の正客を覺悟して前日多門店に古筆了任を訪ひ石州流の禮式を殘らず傳習して茲に道場に上りたる次第にて主人の受太刀シドロモドロと爲りたるも決して偶然に非ざりしなり左は云へウーダン氏は大電氣會社の劇職に在りながら性來文學趣味に富みて巧に英詩を作り又日本畫を學びて其筆に成りたる布袋などには自ら一種の奇相あり他日日本の茶道を米國に傳ふる者あらば氏は必ず其一人ならんと思はる。

東西茶人の取組（下）

謙庵の說に西洋人を正客とし英語にて巧に茶事の挨拶を爲さんとするは決して容易の事に非ず例へば炭手前了りて「何も御座いませんが是れより湯漬を差上げます」と云ふが如き毎度有り觸れたる挨拶なれども卽座に之を飜譯せんとすれば適當の譯語を見出すこと甚だ困難なるものなりとは誠に尤も千萬なり斯かる正客を引き受けて鈍翁紅艶等の如き鬼千匹の惡友環視の中にマンマと首尾能く御茶を濁したる謙庵の造詣只管感服の外なきなり然れども明治卅九年の秋謙庵が米國歸りのホヤホヤにて築地新喜樂に初陣の茶會を開きたる以來の經路を回顧すれば折々椿事出來に依りて斯界を騷がしたる場合少からず先づ其初陣の茶會といつぱ當夜の正客たる團々孃に諷する所ありて床に公任風の「もえつるも枯るゝもおなし野邊の草いつれか秋に逢はてはつへき」の色紙を掲げ靑磁柑子口花入、唐津の茶碗、蒔繪の棗等を取り合せ扨て香合は今度の茶會に用ゐたる仁淸の鷺卽ち大阪平瀨家の舊藏品なりき斯くて急稽古の御手前とありて停電毎に客の顏を見て夫れとなく指し圖を乞ふ素振り面白く炭は三井の番頭なれば井桁に三の商標形に積み重ね了りて炭斗を持ちて立たんとすれば新調の袴の仕付を取らざりしが爲め裾が足に絡まりて尻餅を突くと云ふ騷ぎにてヤツと懷石膳を運び了らんとする頃、片隅の障子を開けて今晩は有り難うとヌツと坐り込みたるは井上老侯と朝吹英二翁の二客なり斯くと見たる主人の驚きは譬へんに物なく無言の儘、目を瞬きて夢かと疑ふものの如く差當り此押し掛客に對して膳部を如何にせんとは主人のハタと當惑せし所なるが如し然るに此惡戲者は前以て手筈を定め置きたる事とて主人の胸が早鐘の如く亂打する間に二人前の懷石は指圖なくして早くも席中に運ばれたり是れは不思議と二度吃驚の有樣は今尙ほ斯界の一笑柄と爲りて折々語り出づる者ある程なり又最一つの椿事出來は一昨々年初風爐の茶會なりと記憶す正客は三井

松籟男にして懐石膳は已に運ばれ主人は次ぎに飯櫃を持ち出さんとするに櫃の内に杓子なし如何にせしやと處々探し見れば今しも急ぎて會社より歸宅せしまゝ水屋に飛び込みて杓子の上に帽子を脱ぎ置きたることを發見し狼狽の餘り其帽子を頭に載せて急ぎ杓子と飯櫃を持ち出せば通ひ口にてシタ、か頭を打ちたる拍子に帽子は深く目の下まで押し被されて猫に風袋の狀と爲り飯櫃を抱へて後逡りせんとすれば正客の松籟男が中々の意地惡者にて御遠慮に及ばぬ其儘〳〵と聲掛くるにぞ進退維れ谷まりたる奇觀、此主人ならでは他に描き手なき圖なりしと云ふ愛嬌ある當主人の逸談は此他尚ほ數々あれども東都茶會記で拙者の棚卸は平に御免を蒙りやせうと何時ぞや先手を差されたる廉もあれば是れは暫く他日に讓り玆に一言附け加へ置かんとするは主人の令聞武夫夫人が當家の茶會に就きて内助の功最も多き一事にして或る時の茶會に野崎汲古は夫人の勢力を七割以上に計算したる事さへありたり殊に茶事の眼目とも云ふべき彼の挿花選擇に於て明かに夫人の働きの現はるゝことあるは最も健羨すべき當主人の幸福と云ふ可きなり

終りに臨んで尚ほ一言せんとするは去る十八日の茶會に荒大名接待の名義の下に婆族系統の二女史が參席したる事卽ち是れなり而して梅花の掛物の前に銘香を薫じ清香馥郁昔の人の袖の香ぞするの

趣きを點出したるは如何、余は戯れに

香も清き梅の下蔭しめて寢し

むかしの春や戀しかるらむ

と口吟みたるが斯く觀じ來れば今回の茶會はウーダン氏より更により大切なる正客ありし樣なれども是れは帷幕に參したる惡戯者が獨り好がりの樂屋落ちにして主人の與り知らざる所ならん余は當夜の御禮代りに敢て之を辯護せんと欲するものなり。

音曲入りの茶會（一）

大阪の素封家岡橋治助氏は此程初陣の茶會に音曲入りの放れ業を演じて關西の茶壇にヤンヤの大喝采を博したる由なるが今遠州高谷恒太郎氏は以ての外の不興にて茶事に樂隊を用ゐて活動寫眞同樣の取扱を爲すは邪道に墮して茶儀の神聖を汚す者なりと酷評したりとか風聞せり是れは耳よりの話なりと現に其茶會に參席したる大阪の一茶人に聞き合せたるに回答の手翰は左の如し

前略御尋ねの岡橋氏茶事は土藏を直せし洋館へ寄附として其壁に月岡雪鼎の春駒萬歲の雙幅を掲げられ拙者相伴の節は高崎親章嘉納治郎右衞門、同治兵衞、中橋德五郎、本山彦一、尼崎伊三郎歴々の顔揃に之れあり主人の案内に連れて廣間に通れば床には

美事なる吳春筆雪中老松の一軸の前に熨斗を載せたる木地三寶を置き書院には有栖川熾仁親王の御歌ある硯箱を飾り置かれ候釜は千家傳來操口丸釜寫吸江齋數の内木地炭臺に是れも極めて美事なる張甲牛香合を載せて炭手前あり保全交趾寫蕗の臺蓋物に菓子さゞれ石を盛り吸江齋一重切銘延命に紅白椿まんさくを挿み中立を略し其儘との挨拶ありて桑臺子に向ひ頓て點前に取掛るや勝手の方にてコロリンシヤンと琴の音聞え雪の調緩やかに點て終られ候が臺子の茶器は左の如くに候

茶入　澁紙肩衝　袋安樂庵　　茶碗　啐啄齋手捏赤銘猩々頭　　茶杓　如心齋共筒　銘梅花　　替茶碗　朝日燒　ヘラ目美事　　水指　惺齋好溜茶桶　蓋裏海松貝

杓立　青磁鯉耳　　蓋置　啄元穗屋　　建水　淨益砂張寫

右濤茶一巡の後懷石出で申候云々

岡橋氏は先代歿後何か感ずる所ありて大に美術品買收に腐心し最近二三年間は其額毎年十數萬圓に上れる由なるが口善惡なき者共は是れ例の岡橋流にて美術品を土地公債證書と看做し新に投資の一課目を加へたるならんなど噂したる折柄、今や主人自ら茶杓を執りて新に召抱へたる一騎當千の茶器を斯道の陣頭に實用するに至りては何れも其豹變に驚き曩の失言を慚悔する者定めて多きことならん左るにても今回の初陣は日露戰役にて云へば南山役位の小手調にして追つて遼陽戰奉天戰を實現するに至るは何れの時なる可きや兎に角戰端は已に開けたり今後の動靜は斯界の人の須らく刮目すべき所ならん扨て茶事の點前中に調合する琴曲は從來茶音頭を用ふる者多けれども岡橋氏は今度雪の曲を採用したりと云ふ其文句は左の如し

花も雪もはらへば清き秋かなほんにむかしの事よ我まつ人も我を待ちけん鶯のをとりに物おもひ羽の氷るふすまに鳴く音はさぞな左なきだに心も遠き夜半の鐘、聞くも淋しき獨寢の枕に響く霰の音も若しやといつそせきかねて落る涙のつらゝより强き命のをしからねども戀しき人ばつみながく思はぬ事の悲しさに捨てたうきよの山かづら

此歌を謠ふは勿論冬季に限る事なるべく生田流の緩やかなる調なれば點前中に謠ひ關るに丁度好き寸法なるや必せり茶道初心の内は何か奇抜の趣向もがなと却て甘き音曲入りなどを工風するは珍しき事に非ず眞面目なる高谷宗匠が邪道呼ばゝりは左る事ながら本堂にて經を讀むばかりが佛道にてもあるまじ大道を踊り廻る空也念佛者も佛門に入れば無緣の衆生に優ること萬々にして岡橋氏が已に茶道に入りたる其殊勝さに對しては音曲入りなどは大目に看過するこそ當然なれ東都に於ても音曲入りの茶會は由來其例なきに非ず事の序に舊記憶をたどりて左に其一二を記すべし。

音曲入りの茶會（二）

東都に於て音曲入り茶會の元祖は誰れあらう馬越化生翁である翁は夙に淸元を好み故阿葉の妙調を熱愛したる一人なれば明治十三四年頃茶杓取つて初めて斯道に現れたる水の出鼻の何條猶豫あるべき爐頭に脂下がつて柄杓をバタリと落すや否や名にしあふ阿葉の淸調にて「よし足曳の山めぐり」と謠出でたる其時の翁の得意や想ふ可きなり之に次ぎたる音曲入りは故淺田正文氏にして是れは藥

が一倍強く例の通り柄杓を置く途端にピーと吹き出したるは笙篳篥にして近所にては出棺の合圖かと間違ひたるも謂れなきに非ず而して淺田氏が此茶會を催したるは芝櫻川町なる馬越翁の現住宅にして其音曲入り茶會に因緣深きも不思議なるが上に馬越淺田兩老は東都感服係の兩横綱として共に感服七種の免許皆傳を得たる人なりとは愈以て奇妙なりと云はざる可からず然れども是れは前世紀の出來事にして唯其奇蹟を明治の茶史に留むるに過ぎざれば今其詳細を語らざるべし近年に至りて音曲入りの茶會といつぱ木挽町田中家の新席三疊向切の開爐茶會を指名せざる可からず此新席は主婦の名が竹と云ふに因みて世外老侯より一枝庵の名を賜はり扨て其新席開きの趣向は主婦の物數寄にて寄附八疊の床に業平の像を掲げ冠臺に載せたる古鍋島燒櫻花模樣の香爐に銘香花の下伏を薫じ又違棚には爲家卿筆伊勢物語一帖を飾り附け自惚客をして我こそはと一種の慢勇を生ぜしむる處自ら其手腕を見るべし頓て一枝庵に入れば床には業平の「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心やのとけからまし」の歌を西三條實隆卿が懷紙に物せし一軸を掛け竹地紋の蘆屋釜に香合は是れも業平都鳥の詠に因みて染附隅田川を用ひ茶碗は同じく伊勢物語に「いとゞしく都の方の戀しきに浦山しくもかへる波かな」とある緣故にてノンコウ作銘浦波と云ふもの茶杓は隨流共筒銘昔男と稱

するものを組み合せて主婦の代點が例の如く柄杓を引くや庭を隔つる一間にてコロリンシャンと彈じそめたるは

茶音頭

世の中にすぐれて花は吉野山紅葉は龍田、茶は宇治の都のたつみそれよりも里はみやこのひつじさる數寄とは誰か名にたてし濃茶の色の深みどり松の位にくらべては圍ひといふもひくけれどなさけはおなじ床かざりかざらぬむねの裏おもて帛紗さばけぬ心から聞けばおもはく違ひ棚あふてどうして香箱の柄杓の竹はすぐなれどそもは茶杓のゆがみもじ、うさをはらしの初昔むかし話のぢゝばゝとなるまで釜の中さめす緣はくさりの末ながく千代よろづよへ

の一曲にて點前終り茶碗を客方に差出すと同時に何かの合圖やありけん琴はパタリと止みて今まで鳴きし鶯は何地行きけん影もなく唯其茶碗の中に同じ羽色の濃茶のみぞ殘りける兎角音曲入りなど云ふは變則の又變則にて本來なまめきたる趣向なれば裃附けたる主人には似合はしからず品好く留まる雀の宿坊彼の一枝庵などにてこそ場所と趣向と相應して客も得心せらるべけれ扨て其次ぎは河東節の茶會を紹介すべし。

音曲入りの茶會（三）

歌舞伎座にて最後に助六の狂言を出したるは明治三十九年初夏にして早七年の昔と爲りたれば今年

の團十郎追善興行には又候此狂言を持ち出さんと寄々相談中なりとの事なるが果して事實として現る可きや夫れは兎も角七年前助六の芝居開演中戦後膨脹の熱に浮かされたる益田紅艶、田中常徳と余と三人相會して順次に小茶會を催す可きを約し抽籤を以て其順番を卜したるに余が一番田中氏が二番紅艶が三番と定まりたれば余は南茅場町なる某大會社の控家に三疊敷の茶室あるを借り受けて床には芭蕉筆「鎌倉を生きて出つるや初鰹」の發句短冊を掲げ先づ以て季節に兼て俠客助六の意氣を示し置き披の間には中抱一筆後向の助六左右文晁筆富士筑波の三幅對を掛けたるが抑も此掛物は文化年中市川團十郎が助六を演じたる時、抱一上人自ら出馬して簾中の河東節を語り都下の評判一方ならざりし其頃上野の駐春亭に抱一文晁の兩畫伯相會して席上揮毫せし者の由にて文晁が左右に富士筑波を畫きたるは彼の助六所縁江戸櫻に左の一節あるが故なりとぞ

此鉢卷は過ぎしころゆかりの筋の紫も君がゆるしの色みえてうつりかはらで常磐木の松のはけさきすき額、つゝみ八町風さそふ目あての柳はなの雪、傘に積りし山あゐは富士と筑波をかざしぐさ草に音せぬ塗り鼻緒ひとつ印籠ひとつまへ、せくな、せきやるな浮世は車、めぐる日並のやくそくにまがきへ立ておとづれも果は口説かありふれた手管におちて睦言となりふりゆかし君ゆかし

右江戸櫻に「富士と筑波をかざし草」とあるを畫題としたる此幅は「ゆかりの筋のむらさきも君がゆるしの色みえて」と云ふ助六の鉢卷に因みて上下を江戸紫の切れにて表裝したる凝り方の尋常ならざるのみならず抱一上人が自筆にて江戸櫻の全文を認め表紙も同筆にて美事なる彩色牡丹を畫きたる當時出版の淨瑠璃本さへ附屬し居れば之を見臺の上に載せて床脇の棚に飾り濃茶手前始まるや別室にて「春霞立てるやいづこ三吉野の」と謠出したる次第なりき扨て其次ぎは田中氏の順番にして茶室は前同様なりしが玆に奇想天外より落ちて來客一同をアッと感心せしめたるは助六のセリフの中に「歌舞の菩薩の來迎を」とあるより思ひ付きて五色の造花を露地一面に振り蒔き虚空に花降り音樂聞ゆる天界の景色を見せたる大趣向なり又平賀源内の六部集に有名なる彼の志道軒が講壇に振り廻したりと云ふ畸形の石に紫の鉢卷を結び附けて廣間の棚に飾り置きたるも珍趣向なりき

扨て又最後の紅艶は山谷の八百善を本陣と定め床に掛けたるは抱一上人の筆にて中後向助六右三味線山彦左十寸見太夫の三幅對にして助六の讃は「來て人も見はやせ花の家櫻」山彦のは「山びこが曲や三筋の糸ざくら」十寸見のは「猶色をますみさくらや昨夜の雨」とあり此掛物は河東節の家にな

くて叶はぬ寶物にして目下平岡凞氏所藏の初代江戸半太夫の桑木地見臺と共に當流の劒璽とも見る可き者なりと云ふ併し流石の紅艶も其順番の最後なりしだけにより以上の銘案も出でず唯此掛物一品を眞向に揮り翳して「しんぞ命を揚卷の是れ助六が前わたり風情なりける次第なり」と此茶番的助六茶會に割合振はざる鳧を附けたるも苦しげなりき思ひ廻せば七年前の夢物語の記憶もおぼろおぼろなれど音曲入りの茶會とありては是れも打ち棄て置く可きに非ずと最早永久の秘密に歸すべかりしを聊か玆にすつぱ抜くになん。

音曲入りの茶會（四）

點茶の背後に採用する音曲は先づ琴曲を第一とし清元河東節之れに次ぎ最も突飛なる笙篳篥は除外例として先年田中常德氏は柳島の橋本にて長唄入りの茶會を催したる事ありと云へば殘るは荻江節一中節なり一中節執心の茶人は果して誰ぞ余は不幸にして之を知る事を得ずと雖も山本條太郎氏が近々茶會を催す事ありとすれば必ず樂屋に荻江節を謠ふ者あるべしとは今や同人間の確定議なり但し斯かる場合に適用す可きものは音節清幽にして且つ其文句の茶事に因緣ある者ならざる可からず然るに從來俗曲に於て此種類の選みに當る者甚だ少く殊に清元の如きは豐後節の常盤津富本二流に次で最後に出でたる新派だけありて其節廻しは他に傑出したる妙味あれども吉原謳歌時代の產物なるが爲めか文言卑俗にして貴人の耳に快からざる處少なからず余は常に之を惜みて頻りに新作を奬勵し古き節を以て新しき文句を謠ふ可しと主張せしが近來井上老侯其病後の無聊を慰むるが爲めに兼て愛好する清元を聽聞する事ありと聞き余は河東節の東山掛物揃（近松紋左衞門作と言ひ傳ふ）に擬して內田山掛物揃の新曲を物し其の節附も已に成り不日侯の清聽を煩さんとする場合に立ち至りたれば左に揭げて大方の一粲に供すべし

內田山掛物揃

節　清元延壽太夫
絃　清元梅吉

エドカ、リ「久方の月まつ山の合下庵に合數寄をこらせしふる事を今も都の內田山オトス　けふまれ人をむかひつゝ掛けつらねたる名畫の數々あたりまばゆきばかりなり

「先づ周文の間に掛けたるはむかし蒙古の大軍が皇國に仇せし其時に合土佐の長隆、一心に敵國降伏の祈誓をこめ畫ける不動の尊像にて合降魔の劍を打ふつて合雲を蹴立てゝ飛びゆく有様合如何なる天魔おにがみも畏れつべうぞ見えにける

クドキ合「また光琳の間に掛けたるは合徽宗皇帝の御筆にて　カン桃の梢に鳩ひとつ春の日かげのやはらかく羽色にうつる合筆のあや風情をこゝにとゞめたり

イロ「さて御居間は一休が悟りごゝろの面白く杖をかたげて合丸木橋を渡る旅人下は谷底、合オツトあぶねい、合すでのこと、浮いた浮世の綱渡り、さつてもこんなものかいな粋な和尚の筆ずさみ

ウキギン「八窓庵は西行が江口の里に行きくれて一夜の宿をかりけるにあるじの心なかりしかば詞「世の中をいとふまでこそかたからめ假のやどりを惜む君かな」とよみけるにあるじは普賢の化身にて山田「世をいとふ人とし聞けば假の宿に合心とむなと思ふばかりぞ二上り「秋の水みなぎり落ちてさる舟の月も影さす棹の歌舟ウタ「うたへやうたへうたかたのあはれ昔の戀しさよッゞミウタ「舟は忽ち白象の姿となり合普賢はこれに打のりて西の空へと行きたまふ有りがたくこそ覺ゆれカ、リ「花月の間には南蘋が朝日に鳳凰をぞ掛けにけるウタヒ「まことや聖人世に出づれば此鳥奇瑞を

あらはして「豐榮のぼる朝彦の影に羽をのす豐けさは實に治まれる大御代の姿もかくやと一同に感ぜぬものこそなかりけれ

右新曲の中八窓庵に掛りたる江口の君の一幅は普賢菩薩の讃美歌にて音節共に幽玄の調を帶び點前中の閑寂と一致して相悖らざるもの〻如し他日物數寄の人出で〻清元の一節を茶會に適用する場合あらばあはれ此拙作も必ず其候補者の一に數へ給はれかし呵々。

團氏初陣の茶會（上）

三井合名會社の團琢磨氏は先頃微恙にて引籠り中、臥褥の裡に何か工夫を凝らしつゝありし形跡あり蛇の途は蛇の同僚中には略ぼ見當も附きたる折柄或る日の重役會に團氏は不圖半巾をポッケットより取り出し鼻でも拭くかと思ひの外其の半巾を斜かけに二つに折りまた之れを二段に疊みて服紗捌きの稽古を始めたるにぞ目聰き同僚中にはハ、ーと感附きたるものありたりと云ふ既にして又一報あり團氏は近頃光琳の名畫一軸を得たり結構なる表具の中に青々齋光琳の落欵ありて方祝の印

鮮に梅に鶯を畫きたる珍幅なれば今年梅の未だ散らず鶯の未だ鳴き止まざる間に必ず其色をも音をも示すならんと扨は近日茶會などの催しあるべきかと早耳連は先刻より其案内を待ち受けたる程なりしに果せる哉去る三月二十一日正午原宿の自邸にて粗末なる午餐を差出したしとの招狀に接せり當日門に入れば左手に青竹の垣根を繞らし小砂利を敷きたる新道五六間進みたる處に待合の一室あり三疊代目に丸爐を切り一方に深き洞床ありて杉皮の天井に十分の寂び味を示し竹の自在に手取釜を掛け棚には青貝の待合硯箱あり中央に大火鉢を置きて煙草盆には繪唐津の火入あり木地の丸盆に染付の茶碗と唐津の香煎入を置き合せ飾り附は萬端申分なけれども殊更に室の一隅を歪ませて疊の斜かけになりたる具合など何人の設計なりやと獨り思案を運らす中、髣髴として小田原風祭の中野欽九郎氏の別莊又麹町區平河町の杉子爵の書齋等を聯想せしむる處あり扨ては彼の煎茶的建築に有名なる仰木氏の作意ならんかと思ひ浮びたる次第なるが待つ間程なく益田鈍翁朝吹柴庵岩原謙庵益田紅艶の四氏來會して此異樣の構造に就き樣々の論評あり頓て主人の案内に連れて露地に出づれば此待合は池に差し出でたる建築にして清水の舞臺然たる處に作者の働きを示したる者らしく是れより栂杉楓等の間を通ずる小砂利道を辿りて十四五間進めば長き一條の土橋あり此邊より茶室に連續して山莊めきたる一大棟を望み新築匆々にて露地に寂び味は少けれども池水を前にし大樹を後にしたる風景は都會の中とも思はれず枝折戸を開きて忽ち蹲踞石の奇古なるに驚き又捨石などの思ひ切りて大なるに感じ更に茶室に向へば其壁は赤煉瓦の粉末を以て塗り立てたる由にて京都邊にて見受くる丹色壁なり屋根は竹を編み合せて其鏇隙に虧けたる古瓦を載せ蹴り口の寸法は度外れて大きく沓脱石も亦非常に大なる等總て抹茶人の意匠に據らざる仰木式の非凡なる趣を示せり茶室は長四疊にして茶道口給仕口共廣くして其高さの寸法相同じく爐の切り方も普通の茶室に見受けざる場所を選みて三百年來茶人の研究に研究を重ねたる方式を外れたる此新工夫は果して如何ある可きか追つて濃茶手前に至りて其適否を實見すべしと思ふ心は坐客一同の面上に浮かびたる者の如し又此茶室は屋根裏を見せて棟の一端に空氣抜きを附け有り觸れたる茶室の突き上げに代用したる其工夫は如何樣佗び茶室に恰好の思ひ附きなれども是れにて寒中室内の溫度を保つことを得べきや篤と實驗の上ならでは可否の斷言も六かしからん左れども概して新意匠の豐富なるは容易に企て及ばざる所にして大正の新茶室は斯かる工夫家に依つて大成せらる可きか非か兎に角斯道篤志家の研究を要す可き所ならん。

團氏初陣の茶會（中）

茶室の床には宗旦筆梅の自畫讃を掛けたるが大木に花二三輪ありて上に大字にて「梅一葉ヲ省」とあり時候向きの輕き一軸にて此佗び茶室に似合はしき者なり爐は石か鐵か確めざりしが爐緣は久以作かとも覺しき澤栗にして釜は天猫大口共蓋に時代も見ゆる寂び物なり頓て主人出でゝ挨拶あり炭手前に取掛りしが炭取は竹組貝籠、羽箒は野雁らしく灰器は樂燒、香合は志野の寶珠に類似したる者なり今日は坐客一同茶事の案内ならんとは推測したれども寄附にて先づ其趣向の凡ならざるに驚き露地に入りて一面の藪が何時か山寺の坊の如く變化したるに驚きたるが扨て茶室にて主人が自身に點茶するや否やは疑問なりき若し代點者などを出したらんには一同抗議を申込まんと待ち構へたるに主人が炭取を捧げてシヅ〳〵と出で來りたるには今更ながら一驚して最早二の句も出でずなりぬ殊に炭手前の沈着にしてサラ〳〵と進行する其手際は中々初陣とも思はれず一同唯呆氣に取られて手持不沙汰の體なりしは笑止なりき炭手前終り一閑張の半月膳に桐の塗り椀にて懷石出づ

汁　田芹　三州味噌　向附　繪唐津、平貝賽の目、防風、ウド、山椒子の新芽　椀　骨去り鶉、蕨、苞豆腐　燒物　赤繪吳洲魁鉢　筍、白魚、花鰹

吸物　海月　新菊　八寸　鱚鹽燒　松露　香物　樂燒片口　淺漬細根

にて酒器には染付山水模樣小盃及び捻猪口も出でたるが要するにアツサリとして肩の張らぬ趣向茶席と相應して申分なし頓てイガ餅を頂戴して中立となりたる頃は春雨霏々と降り出したれども腰掛は枝折戸の外數歩にあれば一同苦もなく動座せしに此處も亦大佗びにて粗朶を組合せたる腰掛など加納鐵齋翁の門人故鐵牛の意匠其儘なりと評する者もありたり斯くて煙草一服する間に庭樹の雫の潸々と滴る中をボーンと一聲鳴り渡りたるは小形の銅鑼なれども雨中なれば別して耳觸り好く初陣の茶會には兎角銅鑼が問題に爲れども當家にては先づ無難なるこそ目出度けれ扨て再び席に入れば床には南蠻粽の花生に鶯神樂と貝母を挿みたる風情惡しからず出來面白き尹部の水指の前に金地安樂庵の袋掛りたる棗を置き主人出でゝ點茶手前あり其手前も時に多少の停電はありたれども別に初陣の可笑味なく程なく點て出したる濃茶を啜れば是れも初心にあるべき筈なる例の團子の見當らぬこそ不思議なれと正客鈍翁の挨拶に對して主人の說明する所を聞くに嘗て屢々化學の試驗に臨みて粉類を解くの秘傳を得たり即ち先づ小量の湯を入れて之れを練り置き然る後更に湯を入れて搔き廻せば決して團子を生ずることなし今度濃茶の點前には此化學的實驗を應用するが故に百發百中團子

を生ぜざること請合なりとは工學博士の御腕前遙に大宗匠に優るものあり一同實にもと感服したるも可笑かりき茶碗は古萩高麗左衞門の作にて景色多く永井信齋の箱書附銘唐錦とあり茶杓は庸軒作にて筒にケラツ、キ元祿十五庸子造八十五とあり何れも當日帷幕の張良たる山澄力藏翁が根岸の寮より原宿に繰込ませたる一大隊と覺しく其大將と云はず雜兵と云はず皆是れ佗びたる面構にして取立て〻褒むる程の器量人もなき代りに眉を顰むる嫌味もなく無事是れ貴人と澄まし込みたる取合せの老巧なるには一同流石と感心しぬ

團氏初陣の茶會（下）

今日の茶會は初陣なるが上に初日の事なれば主人も夫れ相應に愛嬌の種を蒔きたり例へば最初志野の寶珠形の香合を出したる時、正客が是れは寶珠ですかと問へば主人はイヤ志野ですと答へ又懷石の材料等に就き質問の起る毎に何れ取調べましてと言ひ捨て引込みながら再び出で來りて答辯なきは山本内閣同樣書面にて質問を差出すの外なきかと座客一同當惑したるも可笑しかりき又濃茶手前となりては最後の茶筅す〻ぎを失敬し又水指を置き忘れたるが如き是れが名高き宗匠とあれば此水指を忘れ水指など〻稱して却て珍重がらる〻やも知れず扨て又此茶席に就きて點前の勝手如何ならんとは座客一同の注意する所なりしが果せる哉道具畳の割合に廣く茶道口と點前の場所と割合に離れて三足目ならでは着坐點に達せざる等の不便あり隨つて主人と茶器との落付き惡く一座散漫して引き締らざる樣思はる〻は茶人が代目畳を工夫したる必要を證據立て〻圖らず研究の材料を得たる心地せり左は云へ初陣の茶會の主人として今日の如く圓滿なる成功を博し得たる者は他に其比類稀なるべく畢竟主人が同僚其他に少からぬ茶友を持ち從來嫌々ながら茶席に引込まれて苦き經驗を嘗め居りたる其効果の今日に現れたる者と謂ざる可からず扨て薄茶は廣間にてとの挨拶に連れて水屋を經て打通りたる八畳の間は更に大に仰木式を發揮して何故か入口の鳴居を低くし浮かと這入りて頭をコツンと頂戴する者あるも不思議なり座敷は面皮作りにて床には啓書記の山水一軸を掛け時代の卓に美事なる天龍寺青磁の香爐を載せ棚には浪に龍の蒔繪ありて龍淵の二字を銘したる硯箱を置き高臺寺蒔繪の爐緣に美事なる釜を掛け又茶棚には目覺むるばかりの雲堂の水指を置き萬緣叢中紅一點と云ひたけれど紅の色は已に褪せて茶色染みたる〆子女郎が今日は淑かに薄茶を點じて差出す殊勝さ春慶の柿茶入に御本の茶碗、象牙の茶杓等は小間同樣無難にして總菓子は砂張の掛籠盆

に載せられたり薄茶一服頂戴して扨て此高殿より本館の方を見渡せば雜木の間に幽かに池水を瞰下ろして近くは箱根石垣山の邊より移したりと云ふ牛の如き奇石怪岩處々に横はりて懸崖よりは一條の飛泉の迸るあり谷を隔てたる崖下には古色蒼然たる十三重の石塔が峙ち新綠又は秋晩などの眺め左こそと思ひ遣らる尙ほ番茶一杯とありて更に棟續きの別室に到れば是れは純粹の煎茶式趣向となり庭先は竹林にて其の間に捨石を布置し軒近き大蹲踞石には青竹の筧に耳を澄ます水聲あり奥深き床には松花堂筆の竹に鷄の一幅を掛け庭前の竹樹と相對するの意匠流石なり此處には今回の茶會に就き參畫者として奬勵者として勳一等寶冠章を受けらるべき團夫人も出で來りて雜談に時を移しけるが扨て豫て評判ありし光琳の鶯は何地行きけん影もなく此春は其珍らかなる美音を洩らさゞるにやと坐客一同聊か失望の體なりしが斯てあるべき事ならねば主人夫婦の厚意を謝して程隔りたる本館に達し將に玄關に立ち出でんとすればコハ如何に一間の床に待ち焦れたる光琳の一軸こそ掛りたれ梅の枝も鶯も共に薄墨にして竹の葉のみを上墨にて畫きたるが奇拔なる光琳其人の意匠なるべく主人が茶席の本舞臺を避けて客の歸途に此鶯の初音を聞かせんとの意匠も亦或は光琳に學ぶ所あるか斯くて團家の初陣の茶會が首尾能く成功したる今日第二の策戰計畫に又々奇功を奏せんこ

とを祈り一同望蜀の念を抱いて辭し去りぬ。

太郎庵壺飾りの茶會（上）

昨年の霜月師走は茶會の鈴なりで眼の廻る程多忙なりしが大正二年度に入りては鼬の道の夫れかとばかりフツツリ茶會沙汰を聞かずなりぬ然るに去る二十一日團氏初陣の茶會あり越えて二十三日益田鈍翁太郎庵の茶會ありしは誠に是れ空谷の跫音、斯界の寂寞を破りたる感ありき當日正午寄附に到れば三井松籟男、團琢磨、岩原謙庵、益田紅艶諸氏の外に大阪の珍客戸田露朝子の先着あり一禮して先づ傍の床を見れば沈石田かと見ゆる文人風の山水畫あり三石と落欵ありて遠州藏帳の一軸なりと云ふ山人が高きに登りて無際の江山を見渡すが如き粗畫にして明人の筆とは言ひながら茶味の掬す可き者あれば遠州も取つて己が領分に引き入れたるものならん此掛物の前に古雅なる待合硯箱あり又煙草盆に仁清らしき火入あるを熟視すれば梅の畫に光琳の落欵あり四足にして底に乾山とあるは合作の絶品世に是れ以上の火入ありとも思れず此寄附の模樣にてはヨモ尋常の茶會にはあるまじと推測しつゝ頓て案內に出でたる主人の恭しく障子を開くを見れば手頸に革もて銀時計を括り附

けたり之れを瞥見したる紅艶は卽座に缺席裁判を下して乘馬の人に必要なる此種の時計は茶人にあるまじき裝飾品なりと難詰の聲餘り近からざる主人の耳にも達したるにや庵室にては再び時計の見えずなりぬ扨て松籟男を正客とし露朝子を末客とすれば當今天下之れに上越す客振りありとも思はれず一同心丈夫に太郎庵に繰り込めば果して然り床には一休和尙筆なる看盡江山千萬里の大字一行物を掛け床に向つて疊三分の一右手にスカリを掛けたる一茶壺を飾れり一休は非凡の出來にして土屋藏帳の由なるが寄附の掛物と書畵相對して興味の長きことも亦千萬里なり扨て又茶壺は遠州の愛藏品にして其箱書附に銘長崎とあり枇杷色と飴色の間に樣々の景色ありて頗合好き大きさ何樣非凡の名品とは思はれたり釜は蘆屋霰に馬の地紋にして昨春余が庵主に寄贈したる一品なり代目棚に飾りたるは染付張甲牛の香合にして其完全無缺なる道具屋句調にて所謂美人と稱す可き者ならん頓て正客より御壺拜見の所望あれば主人はスカリを取り又金襴の口蓋ひを外して恭しく壺を正客の前に差置き茶道口の外に畏りて夫れ〴〵拜見の終るを待ち居たり斯くて客の一巡拜見するや主人進み出で〻正客の前に壺中の茶名を記したる書付けを披き此中より何れなりとも一種御選びあれと言ふ正客は左れば珠光の友を頂戴致さんと述ぶれば主人は壺を持つて引下り懷石中に其茶を碾きて

食後客に供する趣向なり此茶壺は平野の詰めにして主人の差出したる書付けは此壺に附屬する小堀遠州宛の茶入日記に依りて調製せしめたる者なりと云ふ其日記は左の如し

小堀遠江守樣
御茶入日記

一極上半拾三
内七　三月二十六日摘初昔
二同廿七日摘後昔
二初鷹爪
二宇文字早摘
極
一御詰六斤
辰五月吉日　尼崎書判

右日記の樣式は遠州時代に宇治の茶所が新茶を壺に入れて諸大名に發送するインボイスとも見るべきものにして其茶が九州の端などに達するには長き日數を要して到着の上、口を切るまでには年を越すこと珍しからぬ由なるが太郎庵主が此度の口切は實は舊冬催す筈なりしを松籟男病氣差支の爲め終に延引して今日に至りたるなりと云ふ扨て炭手前ありて釜を揚げたる時主人は慇懃に客に向ひ此釜は昨年是れなる箒庵より到來物なれば何卒御熟覽を乞ひたしとて暫時留め置きたる心入れ茶

人が到來品を披露する手本を示して餘りあり寄贈者たる余も爲めに望外の面目を施したるは特に茲に鳴謝せざる可からず余が此釜を主人に贈りたる時、地紋の馬は光信の下畫なりと言ひ傳ふるに依り左の如き狂歌を添へたりと記憶す

あしやとは云へとかまはす參らする
光信の畫のうまいはかりに

太郎庵壺飾りの茶會（中）

特別のコルテシーにて主人が留め置きたる釜を一同近寄りて熟覽せしが尙ほ炭取は葛桶、羽箒は鶴灰器は長次郎の締りたる出來なりき斯くて懷石出づ

汁　蕗　嫁菜　向附　金襴手寄せ　鱒、防風、鰍、紫蘇　椀　鯛、山椒の芽　早蕨　燒物　重箱　蒲鉾形鶉シンジョ

吸物　蛤　土筆　八寸　松露　土州スケトウ　香物　伊賀小鉢　淺漬細根其他

右懷石には遠州好み糸目の膳を用ひ後座の趣向のあればにや酒器なども染付一閑人の蓋ある銚子のみにてアッサリと切り上げたるが食事中に茶臼の聲幽に洩れ聞ゆる風情得も言はれず抑も茶は年若き婦人が柔き手にて氣長に碾けば細やかにして風味宜しとの事なるが昔し抱一上人が侍坐の佳人の指にて繪の具を解かせたりと云ふも同理なるべし主人の挨拶に今日の茶は大半妙齡の婦人に碾かせたりとありしは注意周到感服の至りなり夫れより蓬饅頭を頂戴して中立となり後坐の床は如何ならんかなど各自に腹案を廻らしつゝ再び席に入れば竹は極めて寂びたれども一見紛ふ方なき遠州作の花入を掛け今朝小田原より到來せりと云ふシドメの花紅なる一枝とバイモとを挿みたる風趣最も正午の茶會に適せり此花入は遠州箱書付にて雪をれの銘あり花の將に綻ばんとする今日此頃、此銘聊か相應せぬやうなれども舊冬主人が口切の茶を出さんとして道具組を選みたる其記念とも見れば却て餘情あるが如し水指は南蠻芋頭にしてハンヂラの蓋あり正面に萬曆己丑年源泉寶碓と彫銘あり元來南蠻と稱する陶器は名の如く南洋諸島の產なるが如く言ひ傳ふれども萬曆の彫銘あるに依つて見れば支那の一部にて燒きたる土器に酒などを入れて諸方に輸出し其輸出先にて日本人の手に入りたるより此名ある者に非ずや現今にても支那內地より臺灣邊に酒類を入れて持ち出す土器には頗る此南蠻に類似する者ありと云ふ南蠻の水指に彫銘あるは稀有にして慥に陶器研究の材料と爲る者ならん茶杓は古田織部の作にて其形より銘を兩樋と稱す茶入は利休割棗にして蓋裏に朱のケラ判あ

り五緞子中の隨一白極が丸袋として掛るを見れば其結構さは言はずもがな蓋置は青竹引切、建水は木地曲物なるが扨て茶碗は名にし逢ふ光悦七種の障子なり光悦七種とは富士、淺間、雪峰、雪片七里など云へる光悦作の名物茶碗にして七里は久しく當家の所藏たり而して障子は近年加州の村彦より庵主の手に入りたる者の由、此茶碗は嘗て三井家の親戚にして京都に居住したる家原氏の寶物たりし事あり三井松籟男の鑑定にては箱書の障子と云へる文字は天明前後に灌雪と號せし家原氏の手蹟なるべしと云へり赤樂藥にて濃茶々碗としては稍々締り外面に格子の如き二三箇所のヤマ瑕ある内側より透せば小楊枝大の筋三本より光線の幽に透き通るを見る蓋し陶土の鑢隙を生じたる其上より藥の流れ掛りて湯水は漏らざれども光線は透過するもの〻如く偶然の出來事か過ちの功名か作者の光悦も此茶碗を得たる時は我れながら驚喜したる事なるべし七種中に於ても珍奇の點より云へば蓋し其隨一たる可きなり。

太郎庵壺飾りの茶會（下）

茶壺飾りは太閤時代に流行したるものにして當時堺の貿易商が呂宋より便船毎に壺を輸入し來りたる其中に就て出來面白き者を取り上げたる由なるが其産地は果して呂宋なりや確ならず或は前に述べたる南蠻の如く支那内地の酒壺が南洋諸島に輸出せられたる者なるやも知れず兎に角當時に在つては非常に珍重せられて大名物に加へられたる者さへありしが明治時代に至りては壺飾りを試むる者至つて少く四十幾年間を通じて殆んど指を屈す可き程なりき今回主人が壺飾りを試みたるは其第二回目にして此古風なる樣式を見れば太閤時代の事も偲ばれて歴史的感興少からず殊に太郎庵の道具組に於て障子の茶碗を用ふるが爲め南蠻水指の外に土器を出さず茶入を棗にし建水を木地曲物にして來客の目を名物茶碗一方に集中せしめたる老巧の程流石に感服の至りなり扨て濃茶終りたる後主人の挨拶に披の間を用ふるは本來の趣旨に非ざれども春暖の候なれば御運動旁廣間へ御動座願ひたしとあり因つて庭傳ひに打通りたる廣間の床には雪舟筆政黄牛の一軸掛れり表具の結構なるは勿論紙中も美事にして筆致殊に面白く江月和尚が大膽にも後より書入れたる讃は左の如し

白頭輕卸笠　一見眼中寛
四席花何覓　常騎黒牡丹

欠仲子

右一軸前の唐物盆には井戸鹽筒の香爐を載せ琵琶棚には更らに彼の長崎の茶壺を飾り脇棚には西行筆に定家卿の書入れある一條攝政卽ち謙德公の歌集を置かれたるが西行の出來面白きが上に定家が自筆にて集中の歌の勅選集などに出でたる者に勅の字を無造作に書き入れたる處あり古雅愛す可き者なり爐頭には足利時代の蒔繪茶棚を置き其中に砂張の水指の外茶碗茶入等一切を飾り附け古筆孃出で〻薄茶手前あり茶入は瀨戸皆曰茶杓は宗旦の銘タマシ香合は遠州藏帳の朱青具梅月模樣にて如何にも遠州の愛藏品らしき者なり蓋置は青磁の夜學茶碗は締りたる小貫入と旭燒とを用ひ斯くて薄茶了るや主人は一個の手箪笥を持ち出し一一取り外して並ぶるを見れば四方の板は膳となり其中より椀又は汁注ぎなどが現れて之れにて蕎麥かきの饗應あり大小六個の捻猪口に宗胡錄の德利を出して一献過せとの御馳走振り下戸も上戸も大受けなりき今回の茶會は小間と廣間と器物の取り合せ相悖らずして互に其趣味を助け近來稀なる出來榮えなりしが小間の香合に張甲牛を用ひたる南蠻水指に萬曆己丑の彫銘ある而して廣間の床に政黃牛の一軸を掛けたる皆是れ今年丑年に因みたる取合せならん道具の結搆なるに依り見た目にうしとは感せざれどもう大抵にしたらばなど駄洒落家の材料となりはせずや且つ其器物の遠州攻めなるに依り大阪の高谷今遠州を請じたらば嘸かし嬉しがる事ならんと樣々に思ひ廻しつ〻雜談に時移り主人の厚意を謝して碧雲臺の門前に立ち出でたるは早や黃昏の頃なりき。

乃木大將追憶茶會（一）

多聞山莊久しく松濤の聲を聞かず牛込歸雲亭にも亦絕えて茶煙の颺るを見ず和敬會の耆宿石黑況翁近來雌伏せしかと思ひの外此間雄飛の準備は着々進行せしもの〻如く月の初め翁より到來の一書を見れば來る十六日粗茶一服差上度候云々とあり警拔なる況翁の事とて定めて人を驚かすの新趣向あるべしと豫期するものから一も二もなく快諾の返書を差出したるに一兩日を隔て〻耳患發生遺憾ながら參會するを得ざるに立去りたるは返す〴〵も殘心の至りなりき左れども況翁今回の茶會は豫て乃木大將追憶の爲めなりと聞きては其儘に打捨て置くべきに非ず病魔退轉匆々去二十三日牛込揚場町の歸雲亭を訪ふて今回茶會の趣向を聞き得しま〻左に其大要を記して同好の一粲を博せんとす。

今回の茶會は歸雲亭にて催せり亭は四疊半にて床に大燈國師白雲集切の一軸を掛けたり白雲集は元人の詩集にして總數百二十首ある由なるが其中六十首は井上侯爵の所藏に歸し當家のは涉世、山中

春日書懷及び書朱性夫吟卷の三首にして中に就き山中春日書懷は今回茶會の境趣を道破して尤も切實なるを覺ゆ卽ち

溫飽非吾志　簞瓢獨固窮
看雲知世變　對竹悟心空
犬臥庭花日　鶯啼野樹風
市朝榮辱事　那得到山中

とあり大德寺の一溪和尙が紙を繼ぎ足して紙中極めをなし表具も自ら好みたるならん古色蒼然として茶人の垂涎に値するものなり是れは明治三年の春況翁が壹岐殿坂の古物店にて堀り出したる者にして一旦は値切りて買取らんとせしがイヤ〳〵斯かる名幅を値切るは決して茶人の道に非ずと更に言ひ値通りに買取りたるに店主も感ずる所ありけん實は牙軸だけソト匿し置きたるが左らば之れをも參らせんとて終に完全の一幅として況翁の手に歸したりと云ふ維新匆々の掘り出し物は今の世智辛き標準を以て律す可きに非ず想ふて此に至れば殆んど隔世の感なきを得ざるなり斯くて炭手前あり て懷石出づ

汁　嫁菜　向附　平貝甘酢わさび　椀　白魚、蝦つくね　蓬ぎゆうひ水ぐり椎茸にしめ　吸物　山蓼　菓子　焼物　筍むつの干、花鰹　取肴　松露　卷鯽

懷石終り中立後再び席に入れば床には宣德薄端の花入に杜若を生け水指しは瀨戸一重口、茶入は古瀨戸にて銘を玉匣と云ふ箱挽家とも銘の文字は總て故小松宮殿下の御書付にして是れは況翁より殿下に願上げ袋も二つの內一つの金襴は殿下より賜はりたる者なりと云ふ茶杓は遠州共筒銘八ッ橋、蓋置は竹時代蒔繪、建水は遠州好み瀨戸にてありき斯くて況翁は赤塚宗輯直傳の遠州流相伴點に依り仁淸の天目を唐物水仙の繪の臺に載せて正客に侑め次客より詰までは別に挨拶なければ名々點、次客より挨拶あれば詰まで一服點と云ふ作法にて點茶せられたる由なるが何れ次客より挨拶あるが相當なれば次客以下は一服點なりしなるべし而して此仁淸の天目は元大德寺の所藏にて玉緣に白藥の一線あり全體黑藥の中に濃淡ありて仁淸と云へる彫銘も鮮に出來面白き茶碗なり況翁嘗て之れを見て垂涎に堪へず小松宮殿下へ言上して殿下がその後大德寺へ成らせられたる時其二つを御所望ありて一つを況翁に賜はりたる者なりといふ益田鈍翁に此頃壺飾の茶會あり況翁之れに次ぐに天目點を以てす大正の茶事も斯く事六かしくなりては今後如何に成り行くべきや唯何となく物凄く油斷の

ならぬ心地せらるゝ様なり。

乃木大將追憶茶會（二）

扨て濃茶一巡せし頃、況翁は改めて一同に向ひ今日は親友乃木伯より贈られたる品々を用ひ序に手向けの香をも供したければ共々御供養下されたしと挨拶して上段に乃木大將の書簡、下段に況翁自筆の説明書を加へたる一軸を同席の床に掛換へたり先づ大將の書簡は左の如し

拜啓昨夜歸宅尊詠拜誦感入候

此太刀は目たちしものにあらねとも君の御用にたちて嬉しき

今朝御再書に預り

雪降れは枯木も花をなすものを埋れ木のみそあはれなりける

右一寸御請迄餘拜眉の節と申殘し候頓首

三月十五日

石黑仁兄尊下

典拜

右書簡の下段に況翁の自ら書き加へられたる一文は左の如し

明治三十六年三月某日陸軍大將乃木伯爵より三月八日有感とて

埋れ木の花さく身にはあらねとも高麗もろこしの春そまたるゝ

といふ一首を示されたれば直に

埋れ木に咲くは櫻の花ならで高麗もろこしの雪にそあるらむ

と折返しそれと共に先日約束し置きたる軍刀を此使に貸し給はれとの手紙の末に

杖にでもつくか翁の借り刀

と書きて送れるに返信されたるが此手紙なり前の歌を書かれたる紙はいづれに失ふたるか見あたらず悔しきかも

大正元年十月　況翁石黑忠悳

斯くて此一軸の前には夜光貝角盆に載せたる本手青磁銘松山と稱する香爐を置きて屈輪大形の香合に銘香初音を入れて之を薫じ茶入は明治三十七年の冬乃木大將が戰地より況翁に送られたる敵彈二個を寄せ合せて中次に擬したる者にして其後三十九年の春に至り大將自ら敵彈茶入と箱書したる

ものなり薄茶々碗は同じく大將が常用せられたる赤緑などの彩色ある捻模樣にして京燒などにても
やあらんずらん轆轤目ありて面白き者なり又替茶碗は先年況翁が旅順に於て需め來りたる者にして
と彫付けたる赤茶碗なり茶杓は東久世伯作共筒、蓋置は染付桔梗、建水は飛驒わげ而して惣菓子は
ノシ柿なりき尙ほ後炭とありて炭取は臺灣土人用瓢釣瓶、羽箒は玄鶴、火箸は旅順攻圍の時に用ひ
たる鐵條網なりとは愈出で〻愈奇なりと云ふべし。

以上の品々を熟覽すれば乃木大將が兵馬倥偬の間に在て胸中自ら閑日月を存し故國の親友の爲め
に樣々に工夫して茶器を思ひ附きたるが如き又畏友の心盡しを空くせずして斷簡零墨も愛惜して措
かず其手澤を存する微物も十襲保重して長に追懷を寓するが如き信あり義あり血あり涙あり名教具
はり茶味存す之に對して誰れか嗟嘆の聲を發せざる者あらんや。

山川草木轉荒涼、　十里風腥新戰場、
征馬不前人不語、　金州城外立斜陽、

以二〇三高地之士作之錄乃木將軍詩

烏城道人製

乃木大將追憶茶會（三）

石黑況翁が乃木大將追憶茶會に於て宣德薄端の花入に杜若を生け又手向の香に殊に初音を選びたる
は深き寓意のある事なり況翁は乃木大將の最後を以て萬治年間細川三齋の十三回忌に割腹したる興
津彌五右衞門に酷似する者と爲し時節も偶相應するものから右緣故の品々を用ひて夫れとなく歷史
的感興を添へたる者の如し抑も興津割腹の事實は翁草其他諸書に散見すれども森鷗外博士が右等諸
書を參考して更に潤飾を加へたる一文あり今其大要を摘錄して況翁寓意の在る所を示すべし

寬永五年五月安南船長崎に到着せし折、伽羅の大木を舶來せり當時細川三齋は剃髮後三年目なりしが茶事に用ゆる珍しき品を買
求め來れよと興津彌五右衞門と其相役一人を長崎に差遣しけるに例の伽羅は本木と末木とありて遙々仙臺より伊達權中納言の役
人出張し居り是非本木の方を買取らせんとせしを興津は此方に需めんとして双方競爭の姿と爲り其時彼の相役は香木の如き無用
の翫物に過分の大金を擲つ事然る可からず所詮本木を伊達家に讓り末木を買求むる方然るべしと述べけるに興津は一圓承知せず
主君の申付に珍しき品を買求め來れよとあるに如何で此伽羅程の珍物を見捨つべき殊に本木の方が尤物中の尤物たる以上は是非
共之れを手に入れて重き主命を果さゞる可らずと主張すれば相役は之れを嘲笑して一國一城を取るか遣るかと云ふ場合なれば飽
まで伊達家へ楯を衝くも然るべし高が四疊半の爐にくべらるべき木の切に大金を捨てんこと思ひも寄らず縱ひ主君が本木を手に
入れたく思さるゝとも之れを諫むるが當然なり是れが武具などならば格別、香木に不相應なる値を出さん事畢竟若輩の心得違ひ
なりと云ふ興津は尙ほも押返して細川家に於ては代々武道の心掛深く傍歌道茶事までも堪能なるが天下に比類なき所なり茶儀は
無用の虛禮なりと云へば國家の大禮祖先の祭祀も亦總て虛禮なるべし吾等此度仰を受けたれば茶事に珍しき品を求むる外他事あ

る可からず貴殿が香木に大金を出すを不相應なりと云ふは畢竟其道に心得なきが爲めならんと次第に言ひ募るを聞きたる相役、如何にも某は茶事の心得なし一徹なる武邊者なりィザ左らば諸藝に堪能なる貴殿の表藝を見たしと云ふや否や旅館の床の間なる刀掛より一刀を取り上げて拔打に切り付けけるが興津の刀は違棚の下なる刀掛にありて見れば手近に一物なし折しも五月の事なれば杜若を活けたる唐金の花瓶あるを手早く取上げてハッシと受け止め更に飛びしさりて刀を取り只一打に相役を討果しぬ斯くて興津は心安く伽羅の本木を買取り當時細川の居城たりし杵築に歸りて香木を三齋の前に差出し扨て主命大切とは申ながら御役に立つべき侍一人を討果し候事、恐れ入り候へば切腹仰付けられ度候と述べけるに三齋は委細聞き了り其方主命を重んじて稀代の名香を買求め來り候事天晴の手柄なり但し討果したる子孫に遺恨を含みては相成らざるに付き直に嫡子を召出して余が面前に於て盃を取らせ互に意趣を存ずまじく誓言せしむ可き者なりと殘る方なき主君の指圖に何れも返す言葉なく箇程の大事も頓て首尾能く落居するに至りぬ

扨て此名香は細川家にては「聞く度に珍しければ郭公いつも初音の心地とそすれ」と云ふ古歌に因みて之れを初音の香と名づけ其後寛永三年九月六日主上二條城へ行幸の節三齋の子忠利に初音の香の御所望あり直に献上に及びたるに主上叡感あつて「たくひありと誰かはいはむ末匂ふ秋より後の白菊の花」といふ心にて銘を白菊と賜ひたりと云ふ又彼の時伊達家にて買取りたる末木の方は「世の中の憂きを身につむ柴舟やたかぬ先よりこがれ行くらん」との歌意にて柴舟と命名し斯かる香木は前後舶來したる事なく實に天下の名香として知らるゝに至れり是れより後寛永十四年には島原の騒動あり興津は忠利の旗下に加はりて戰功拔群の恩賞を蒙り終に戰死もならずして心ならずも年一年と其餘生を保ちたりしが細川家は其後封を肥後に轉じ忠利先づ逝き三齋又薨じ今は肥後守光尚の世となりけるにぞ彌五右衞門も玆に初一念を貫き三齋公の十三回忌に相當する萬治元年十二月二日を以て遺書を認め腹十文字に掻切りて熊本城下の寓居に自盡したりと云ふ。

乃木大將追憶茶會（四）

興津彌五衞門が自盡を覺悟したるは長崎に於て相役を討果したる刹那に在り然るに主人三齋公の寵遇益々渥く打捨て難き國務亦引き續きて湧起せしにぞ心ならずも死所を得ずして終に三代に歷事し其死を決したる二十歲代より三十餘年を經過して身は耳順の老翁と爲り今は心殘りもなければ松向寺殿の十三回忌を選んで遲れ馳せにも宿志を達したる次第ならん惟ふに乃木大將の一死も覺悟は軍旗喪失の時に定まり愈死所を求め居たりしならんと雖も時機俄に來らず隱忍して歲月を經過する間に忽ち旅順の攻圍と爲り眼前多數の兵卒を殺しては愧我何顏看父老の感慨轉た切實なるものあり二子の戰死を以て却て自ら慰藉したるが如き人生悲慘の極度にして如何に大將の心事を動かしたるぞ而して其偏に忠勤を勵みたる明治天皇の崩御に至りては正に是れ其死を致す可き秋なりと決心して終に其宿志を果したる者なるべく人物の大小、事態の輕重、固より同年の談に非ざれども義の爲めに死を輕んじ飽まで然諾を重んずる高潔なる心事に至りては古武士の面目躍如として兩雄對比斷じて千歲の知己と稱す可きなり況翁が翁草などより何時か此酷似を見出し來りて先づ興津の買求めたりと云ふ彼の初音の銘香を薰じ又彼れが相役の一刀を受け止めたりと云ふ唐金の花瓶に擬して宣德薄端を採用し挿花も同じく杜若を選みたるが如き平常ならば別に他奇なき趣向なれども斯く歷史的趣味を加へ來れば感興頓に動きて覺えず襟を正さゞるを得ず茶事も此に至りては風流閑適の餘興に

非ずして名教に裨補する所少からず而して是れは此れ況翁が獨擅の手腕、他人の企て及ばざる所なり。

扨て乃木大將の名吟、愧我何顏看父老、凱歌今日幾人還と云へる一首に就き歴史家などの大に注意す可き逸話あり頃は明治三十七年十一月旅順攻圍中の乃木大將より石黒況翁へ一書の端に右凱歌今日幾人還の詩を書き添へられたり三十七年十一月と云へば旅順の未だ陷落せざる前なるに凱旋の詩を書く可き筈なし後世歴史家が此書簡を見たらば時日に前後あり眞赤な贋物なりと判斷せんこと疑ある可からず想ふに是れは大將が日々眼前に横はる死傷者を見て轉た悽愴の情に堪へず他日凱旋の時にはコンナ詩を作らんかと前以て腹稿したる所を親しき仲とてソト況翁に示したる者ならん其後況翁は此事を大將の副官に訊ねたるに彼の詩は奉天戰の際に作られたる者ならん拙者は當時初めて拜見したる次第なりと物語りたる由夫れに就き況翁の說に歴史家が年月日のみに據りて輕々しく史實を活殺するは大に愼む可き事なり先年余は楠正成より某寺の和尙に宛てたる消息文を得たる事あり達筆の工合、用紙の年代、表具の結構に至るまで一點の疑を容る可からざる者なれども念の爲め某歴史家に示したるに其消息の日付は正しく某和尙死去の後なれば贋物疑ある可からず

との鑑定にて餘儀なく拋棄するに至りたるが前述乃木大將の實例に思ひ較べて戰國の習ひ或は山河疎隔して正成は和尙の仙化を知らず扨ては其日付の和尙死後と爲りし次第にてはなきかなど疑はれ逃がしたる魚は大きく見えて甚だ殘念に存ずるなり云々とあり複雜なる人事を推斷するに簡單なる時日問題のみに依賴す可からざるは誠に右の如き實例あり歴史家などには目前の證據を示して頂門の一針たる可きなり尙ほ況翁は年々乃木忌茶會を催して遺品を同志の友に示し永く英雄の面目を偲ばしむる考案なりと云ふ誠に殊勝の企てにして大將も地下に笑を含んで石黒なればこそと首肯せらるるならん。

波多野古溪煎茶會（上）

多錢善く買ひ長袖善く舞ふ斯くてこそ多錢も長袖も意義あるなれ而して其買ひたる品を人に示し舞ひたる姿を客に見せ同好者の批判を求むるに至りては尙ほ更に面白き意義を生ずべきなり波多野承五郎氏が政論家として名を知られたるは三十年の昔なり實業家と爲りても亦常に論客たるを失はず口角泡を飛ばして老書生の習癖を露す事毎度見聞する所なるが六七年前よりフト盆栽熱を生じ其病漸く膏肓に入るに隨つて鉢よ卓よと好事を極め果は文房床飾りと鰻上りに進歩する熱度は今や

四十度以上に達したる由を耳にせし折柄、此程勸業展覽會に出品したる自筆の墨蹟が米田侍從の目に留りて宮內省御用品と爲りたりと云ふ大正劈頭の大奇蹟を演出するに至りたれば屢々關西の煎茶物入札會に出張して大手筋の名を轟したる其武者振りをも示さんとするは誠に當然の筋道なり夫れかあらぬか去月二十二日午後五時突然濱町常磐屋へ案內さる實は尋常一樣の晩餐會と心得、時刻に遲れて參會に及びけるに波多野氏は夫人と共に待ち詫びたる風情なるにぞ扨ては大に恐縮して先づ寄附の間に入れば三井守之助、益田孝、團琢磨、岩原謙三の四氏卽ち東都抹茶道の新古參打揃ふて鵜の目鷹の目、陳列品の檢閲中なり一禮して床の前に進めば蕪村が無造作に波を畫き有名なる「春の海終日のたり〳〵かな」の一句を題したる細長き掛物を掛け其下に古雅なる草編テンキと酒瓢とを置き床脇には均窯花瓶を飾り唐物都栽盆には左の文房具を置き合されたり

硯　黑端溪鷺硯　筆　明製古竹書浮彫　筆架　黃楊木果實　墨　明製　墨床　唐製

水滴　淺絳手　水柄　紅玉

右の內黑端溪鷺硯は漆黑にして溫潤、之れに觸るれば佳人の皮膚の如しとは主人の說明する所にして天下一品との自信は明かに其面上に顯れたり是れより煎茶一杯とありて案內されたる二階の一室には床に蕪村の春林茆屋圖を掛けたるが竹林の奧に茅屋あり茅屋の上に重嶺あり何やらん肩に荷ひたる一人が山路を指して歸り去る趣

依稀風景丹州路、竹樹深邊啼老鶯

とでも題したく思はれたり繪畫に俳諧あり俳諧に繪畫あるは蕪村の獨擅場にして此一幅の如き確に其特長を發揮したる者と云ふ可し煎茶は福井の人安井五三郎氏が代點として席間に周旋し器物は左の如くなりき

茶入　乾茂號造錫丸形　茶量　明製古竹　茶碗　青華地魚手五客　挖子　無印古錫

茶注　宜興窯紫泥粗作　湯沸　文政渡り南瓜　風神爐　木米作　水次　染付木米作提梁

帛紗　古渡り更紗　巾筒　交趾寫木米作　瓶敷　寄せ木八角　菓子鉢　卵窯

棚　利齋作　敷物　鍋島蟹牡丹二枚　烏府　唐物古竹手附籠　火箸　明珍作亂杭スカシ

建水　朝鮮唐津

玉露の一杯を啜りながら頓て器物拜見を了れば今度は愈階下晩食の席にて入口の廊下に陳列されたるは

赤松（雙樹）　楓　石付　黄木香薔薇　山芍藥　ツガ櫻

の五種にて山芍藥は樺太産、ツガ櫻は北海道蝦夷富士の上にて主人が自ら採收したる者なる由、其丹精の容易ならざると同時に其排列方の高低參差として位地を選み其色彩の配合にも苦心の跡の窺はるゝは何事にも凝つては樂の出來ぬ者なるを示して餘りありたり。

波多野古溪煎茶會（下）

扨て晩餐席の床には竹田の吾汝同醉圖を掛けたるが茅屋中には童子が酒壺を擁して立ち屋外には權兵衛、太郎兵衛二人相戯れて草莚の上に酒杯を喞む田園趣味にして竹田には珍しき圖柄なり其前なる唐物平卓には青磁三足香爐を置き床脇紫檀の臺には靈壁石を載せ之れに鄰する果物籠に胡瓜、トマトウ、キャベッなど五色の果實を取り合せたるは見た目に快く反映せり斯くて順次に運ばれたる献立は常磐屋の主人が文人料理に一機軸を出さんと肝膽を碎きたる甲斐ありて一同實にもと首肯したるは嘸かし滿足の事ならん

向附　干蝶湯ぶり、山葵、わり醤油　汁　鯨、牛蒡、そら豆　口取　鶉附燒、自然薯の雲丹やき　燒物　興津鯛

臺重物　鯛、卷ゆば、花鰹　取肴　青籠入鮑鹽むし同わた　椀盛　木の芽　田樂

食事了れば更に番茶一杯とありて再び以前の煎茶席に導かるゝ見れば蕪村の掛物は明人吳容所が唐の韋應物の七絶を書きたる書幅と掛替へられて床の背景はガラリと變れり而して其長丈幅に達筆に書き下したる一首は左の如し

野花如雪繞江城、　坐見年芳憶帝京

閭閻曉開凝碧樹、　曾陪鶴駕聽流鶯

昔し都門に時めきたる人が田園晩春の景物に對して坐ろに往事を回想する詩趣寫し出して一唱三嘆の妙あり其前なる古渡り籠には百合と柘榴とをタップリ盛合せて傍に岡田米山人と同半江の帖を置き其上に紅玉の文鎮を載せられたり斯くて番茶を飲みながら雜談に時を移しけるが主人の説明する所に據れば煎茶道の起源は百五十年以來の事にして然も大名高家に流行するに至らず煎茶の大家賣茶翁は名の如く市に茶を賣りたる老翁のみ山本梅逸は斯道に寄與する所多かりしと云へど是れ亦一畫工に過ぎず山陽竹田木米の如き窮措大に非ざれば則ち寒書生にして心の儘に珍品を蒐め陳列の式作法を定むるなどの贅澤を擅にする能はず纔に書畫文房の器翫を娯むに過ぎざりしが其後程なく

幕末の騒擾と爲り隨つて有力なる後繼者を見ず降つて維新前後には山内容堂木戸松菊の如き聊か文人趣味を悦びたりしが是れとても文房床飾り位の好事にして斯道の宗匠と見る可きものなく況して文人懐石を以て多くの賓客を招ぐが如きは誠に稀有の事にして器具なり料理なり固より準據す可き故實なく式も作法も今後大宗匠の出で來りて取捨決定するの外なき有樣なりと云ふ果して然らば其大宗匠を以て自任し大正の煎茶式を評定して斯道の面目を一新するは正に當主人の天職に非ずや惟ふに從來の煎茶道は其起源の新しき爲めか其苦心は器物の排置、色彩の配合等のみに存して趣味の薀蓄甚だ淺く雲烟過眼の後復た嫋々たる餘韻を留めざるが如し勿論主人次第にて意匠は皆無と云ふ可からず現に當夜の組合せに於ても「春の海終日のたり〳〵かな」の一軸に對して魚の手の茶碗を用ひたるが如き自ら對照を見る可しと雖も寄附に右蕪村の一軸を掛けて其次ぎの煎茶室にも亦重ねて蕪村の春林茆屋圖を掲げたるは果して如何、煎茶道には此等重複を忌避せざる慣例ありや兎に角斯道には研究すべき又開拓すべき餘地多くして其大家の出現を待つ甚だ急なる者あるが如し而して研究心の鋭敏なる批評眼の透明なる當主人の如き有力者を得たるは斯道の爲めに大に欣賀せざるを得ず殊に當主人が先輩饒多なる抹茶道を避けて頭角を煎茶方面に露したるは曾に其牛後に甘んぜざる

意氣に感服すべきのみならず余等同友主人に依つて以て從來未知界なる文人煎茶道に接觸し隨つて方外の新知識を得るの便あるべし是れ余等が主人の爲めに喜び又自ら喜ぶ所以なり。

入雲日記（一）

當月初は雨天勝ちなりしが九日頃よりヤツと晴れ掛りたれば兼て一度はと思ひ居りし雲州見物に出で立ちぬ途上の偶作に

天涯新樹雨餘稠、　晴日風薫欲麥秋、
笑我一禪參白足、　青山影裡入雲州、

の一首ありたれば旅中の見聞錄を入雲日記と題して東都茶會記中に連載する事とは爲せり。

五月九日夕刻新橋を發して京都に向ふ此行固より山陰の名勝を見物するに在れども其實は松江に於ける松平伯爵家の寶藏を拜見し尚ほ其序に川崎芳太郎氏が故正藏翁追福の爲め臨時開會したる神戸布引の川崎美術館を縱覽せんとするに在るなり車中に一睡して翌朝目を覺せば身は已に七條のステーションに在り直に祇園の杉の井に入りて朝餐を了り午後一時と覺しき頃川崎美術館の門内に入

れば主人芳太郎氏逸早く出迎ひて懇切なる案内の勞を執り恰も來館中なりし大阪道具界の元老山中吉郎兵衛氏も陳列品の來歴に就き余の爲めに例の廣長舌を振ひけるが列品は書畫佛像武器陶銅器能面裳束等に至る迄一切の美術品を網羅して餘す所なき其中に就き燦然光彩を放ちたるは故翁の愛翫したる彼の和漢畫幅なりとす今其最も優秀なる者を擧ぐれば

住吉慶恩筆住吉明神像○同筆圓光大師傳記卷物○信實筆聖德太子像○土佐長隆筆櫻下蹴鞠圖屏風○周文筆眞山水○同筆李白觀瀑
武陵桃源三幅對○宗丹筆楊柳放牛圖○狩野正信筆扇鵲像○雪村筆楊柳樓閣山水○元信筆虎溪三笑圖○常信筆雪中白鷺圖○應擧筆
中朝日右檜鶴左杉鹿三幅對○顏輝筆寒山拾得二幅對○張思恭筆地藏尊○夏珪筆夏景山水○馬麟筆柳陰牧童○牧溪筆敗荷鵠鴒枯蘆
翡翠二幅對○因陀羅筆寒山

等にして此外墨蹟には茂古林あり漆器には時代龜甲模樣蒔繪手箱、同妙法蓮華經箱あり陶器には太宗銘香爐、吳洲銀杏香合あり其他逸品枚擧に暇あらず此等名品揃ひの中に因陀羅筆寒山は例に因つて例の圖案なれど墨氣淋漓として人物の活躍する筆勢曾て他に見受けざる所なり夏珪の山水は東山御物相阿彌外題にて表具の結構は言ふ迄もなく竪三尺横三尺位の紙中綺麗なるに風雨中の山水と覺しく傘を差したる人物の一本橋を渡り行く有樣、後來周文などの每度模倣する所にして行體の筆致面白きこと限りなし常信の雪中白鷺は鷺の姿勢、雪の空合、得も言はれず故正藏翁愛翫措かず曾

て歐米漫遊の際巴里の旅館にて壁に此幅を掛けアルコール、ランプにて湯を沸し茶箱を取出して薄茶を點てながら餘念なく之を眺め居たる事ありと云ふ扨て又正信筆扁鵲像は元神農と二幅對なりしを正藏翁は神農の額に角あるを喜ばず唯扁鵲のみを買取りて神農は久しく山中の手に殘り居りしが故岩崎彌之助男來阪の節是非之を買はんと云ひ山中は故ありて賣らずと云ひ結局拳を打ちて勝負する事と爲りけるに吉郎兵衛マンマと失敗して神農は岩崎男の捕虜と爲り今尙ほ同家の什物たる由なり此外取り分けて結構なるは牧溪筆敗荷鵠鴒枯蘆翡翠の二幅對なり幅尺三竪三尺五寸もありぬべし東山御物相阿彌外題にて紙中の綺麗なる只今描きたらんが如く一氣呵成の筆致輕妙洒脫なるは言はずもがな古金襴の表裝五彩燦然目を奪ふばかりなるは所謂神品にして人間の物に非ずとこそ思はれたれ。

入雲日記（二）

扨て美術館と別棟の長春閣に至れば正面の床に有名なる顏輝筆寒山拾得二幅對を掛けられたり余は明治二十六年初めて之を一覽してより爾來二十年人物畫を觀る每に必ず此幅を聯想し唐畫の白眉

として夢寐忘るゝ能はず今回の參館も實は之を再見するが目的なりしなり此二幅對は言ふ迄もなく東山御物にて其後織田信長に傳はるや信長愛翫坐右を離さず畫中の人物は何か物を言ひ居るやうなりと語られければ或る時森蘭丸信長の癖癖甚しきを見て殿は彼の畫像が物言ふ樣なりと仰せられたるが昨夜小臣彼の幅の前を通過せしに殿の御短慮近頃益々募らせ給ふに因り若し御用心なきに於ては如何なる椿事出來も測られずと言ふかと思へば其儘沈默致候と諷諫せしに信長聞きて大に怒り余が愛翫の恩をも忘れ無禮の一言聞き捨てならず汝速に彼の畫像を引裂きて之を火中に投ずべしと聲色共に烈しかりしかば蘭丸仰畏りぬと彼の畫像の前に赴き頓て又元の座に復りて唯今畫像を引裂かんと存ぜし處彼等は殿の御威光に恐れ最早何事をも申さゞれば平に御容赦相成りたしと詫びけるに信長忽ち機嫌を直して畫像は危き一命を取り止めたりとの奇談あり勿論好事家の戯作ならんと雖も東山御物中に於て古來此幅の高名なりしは此一事を以て知る可きなり其後信長本願寺の顯如上人と講和するに當り此幅と一文字の茶碗及び古金襴の三點を贈りて修好の意を表したれば本願寺に於ても大切なる寺寶として代々保護し來りけるが安政以後西本願寺の困窮極度に達したる折柄當時大阪の西本願寺世話方に石田小十郎（或は小兵衛）なる乾物問屋あり大根屋と稱して資產ある舊家なりしが金千兩の見替り品として本願寺より此幅を預り居りしを其頃京都の所司代にして道具に掛けては大鰐の名ありし酒井若州（酒井忠道伯祖父）が聞き込みて大根屋に手を廻したれども預り物なれば如何ともする能はず本願寺に於ても亦手放し難き事情ありて維新前は其の儘に經過したりしが明治の初年大根屋に代換りありて此幅の始末を本願寺に逼りたるに當時の事とて本願寺に於て金千兩の賠償など思ひも寄らず終に世間に轉々して池田の某の手に在りしに明治十七年山中が取出し來り先づ藤田傳三郎氏に勸めたれども因緣なかりしものか平常に似ず一覽せんともせざれば若井兼三郎の手を以て東京方面に寫眞を送り松方侯其他好事家に買上げを乞ひ廻りたれども誰れとて相手と爲るものなく廻り〳〵て川崎正藏氏方に來りたるに氏は寫眞を一見して直に稀代の名品たるを知り狩野探美を態々大阪に遣して其實物を一見せしめしに果して逸物なりとの報告を得たれば一も二もなく買ひ求めたる代價が僅々千五百圓なりしと云ふ川崎氏は當時築地に造船所を所有し官邊の用向大切なる時代なりしかば此事貴顯の耳に入れば犬骨折て鷹に取らるゝ恐れありとて爾後三年間相戒めて極秘を守りたりしに何時か同好者の評判と爲り一覽を乞ふ者次第に增加し來りたるにぞ川崎氏も今は包まん術もなく此名幅の手に入りしは全く美術の神の加護なれば如何なる貴顯の懇望ある

とも斷じて徴發に應ずる能はずとの條件を以て築地の邸に賓客を招ぎ初めて之を披露するに至りたりと云ふ扨て余は二十年前に此幅を一覽して餘程大幅なりしやう記憶せしに今之を再見すれば思ひの外の小幅なりき因つて思ふに名畫は實物よりも大きく見ゆるを常とし其畫愈巧にして覽者の頭腦に映ずること愈大なる者の如し方今書畫の富を以て天下に誇る者其數幾何なるを知らざれども此顏輝一幅を其所藏に加へたる者は誰にても忽ち天下に覇たることを得べきなり兎に角余は久し振りにて此名幅に再會したるを喜び厚く主人の好意を謝して眞葛ヶ原の旅宿に歸りたるは東山將に暮鴉ならんとする時なりき。

入雲日記（三）

十一日朝京都を發して山陰道の旅程に上る汽車中思ひ浮びたる拙吟は

今宵より聞きくらへはや山陰の
國々になく初ほとゝきす

なり今夜一泊せんとする但馬の城崎溫泉を乘越して午後二時過ぎ香住驛に下車し停車場より十町ばかりなる龜居山大乘寺卽ち俗稱應擧寺に參詣す寺內各室の襖壁張は應擧及び其門人の繪畫のみにして山水の間、芭蕉の間、孔雀の間は應擧の筆、農業の間は吳春の筆、猿の間は蘆雪の筆、鴨の間は源琦の筆と云ふが如く山本守禮、龜岡規禮、源貞章、源應瑞等各自得意の妙技を擅にして宛然圓山四條の繪畫展覽會場を見るが如くなるは亦一奇觀と云ふ可きなり去るにても斯る名畫の此山寺に集りたるは如何なる因緣ぞと寺僧に問へば安永天明の際此伽藍建造者たりし密英上人は曾て京都に在りし頃應擧の貧窮を憫みて銀三貫目を惠みたる事あり應擧深く之を德とし其後上人の此寺を建立するを聞くや門人を伴ひ來つて當寺に留まること月餘、共に靈腕を揮つて上人の舊誼に酬ひたる次第にして繪畫中の數點は已に國寶に編入せられたり云々と語れり夫より海岸に向つて十五六町の處に岡見公園あり松樹欝蒼、懸崖海に臨み大小の島嶼遠近呼應して正に山陰の一勝區たるに愧ぢず應擧寺と併せて共に雅客曳杖に値す可き名所ならん是れも序に見物して午後五時頃城崎の湯筒屋と云ふに投宿せしが土地に風景なく旅館は道者宿的にして溫泉其物に入用なき人の遊ぶ可き場所に非ず十二日午前十時城崎發松江に向ふ伯耆國大山の麓を過ぎける時

旅衣汗さへあゆる麓より

あふく高根は雪白くして

と詠み出でたるは實況なり斯くて午後五時松江に着し碧雲湖畔の皆美館に投宿せしが樓上一眸の中に湖山の景勝を收め近くは大橋を控へ遠くは嫁ケ島を望み晴好雨奇四時皆美誠に其名に負かずとこそ思はれたれ楣間に掲げたる重野成齋翁の詩に

瀲灩波光平遠山、　遙看名嶽露屏顏、
勝區試論東西美、　霞浦雲湖伯仲間、

とあるは如何樣適當の評なるべし湖上に嫁ケ島あるに依りて大に其風景を添へ且つ其名の愛嬌ある

に依りて俗謠の好材料と爲るも面白し余が旅館にての卽興は左の如くなりき

嫁ケ島はや夕もやにつゝまれて
火影ほのめく岸の高殿
小夜ふけて枕に響く楫音の
たえま〳〵に蛙なくなり

十三日午前十時大社參詣の途に上る汽車一時間にして大社驛に達し夫れより十五六町にして第一華

表を潛り老松の並木を行き當りたる處が大社なり彌山の積翠を負ふて巍然たる崇祠の峙つを見れば人をして覺えず敬虔の念を發せしめ老杉自から神さびて何となく古代の偲ばるゝ奥床しさ誠に遠路參拜の勞を慰むるに足れり夕刻歸宿すれば土地の道具商など來りて食後共に安來節を聽聞せり

嫁が島外に木はない私が心いつも青々松ばかり
安來せんげん名の出たところ、しやにち櫻にとかみ山、とかみ山から沖みれば、いづくの船とも
知らねども、せみのもとまで帆を捲いてヨサホ〳〵と鐵つんでかみのぼる
鐵つんでかみのぼるの一句は不味公時代殖産工業奬勵の實況を謠ふものに非ずや又此土地に流行する鰌掬ひと稱する踊は古雅にして頗る愛す可き者なり

私が生れは濱さだ生れ、朝の六つから鰌や鰌
又替へ歌は數多き中に左の如き者あり
出雲八重垣鏡の池にうつす二人のはれすがた
松江大橋流りよが燒きよが和田見がよひは船でする

入雲日記（四）

十四日午前物産陳列所を縦覽の後魯城趾天主閣に上りて松江一帶の景勝に對すれば當日雨氣にて所謂出雲富士は見えざりしも湖光山色遠近映帶して鬱々蒼々然たる盛觀覺えず美なる哉の嘆聲を發せざるを得ず拙詩あり

雄藩十八萬提封、空剩城樓聳古松
借問湖山依舊否、白鷗浩蕩碧雲重

歸路外中原月照寺を訪ふ當寺は松平家歴代の墓所にして老樹陰森たる丘陵に倚り石階數級を上り唐門を潜りて墓碑の前に達する塋域の構造總て同一なるが不味公の墓所は最も景色好き處をとの希望ありて中に就き一段好地位を占め圓形の墓碑の正前には前出雲國主羽林次將不味宗納居士文政元戊寅四月二十四日大圓庵と彫り付けたり月照寺は先年祝融の災に罹りて今は其住持なく番小屋樣の一棟に年老いたる舊藩士黒川正健翁が墓守の役を勤め居り古びたる葵の紋の羽織を着て余等一行を案内し昔し戀しき述懷談に餘念なき其中に何時か不味公の逸事に及び「或時公は加州家に招

かれ食膳に向ひて汁椀の蓋を取れば如何にしたりけん中に汁なし此時公はツト便所に立たれけるか大名の饗應に於て斯る場合には膳部一切を取り替へるが習ひなれば汁なき椀も自ら引き替へられ加州家の面目を失はざりしのみならず關係役人も亦譴責を免れて無事に當日の饗應を終りしは偏に不味公の氣轉なり」云々と語られたるが松平家の舊臣とて翁も其昔は茶杓把つたる經驗ありしやう思はれたるぞ床しき扨て午餐後は豫定の行動として市外二十町ばかりなる舊藩家老有澤昇氏の菅田庵に赴きぬ有澤氏五代の祖能登一通は字は子貫龜峰一歩庵宗佚と號し石州流の達人にて最初茶事を不味公に教授せしが其後不味公が雲州流を創むるに及んで却て其門下と爲りし人なり而して其子織部一善は字は君膺明々庵宗意、又菅田庵向月亭と號し今日來訪の菅田庵は不味公が一善の爲に經營せられたる者にして同時同公の作られたる明々庵は其後東京に移されて千駄ヶ谷原宿なる松原瑜州翁の邸内に現存せり有澤家の三代は土佐一意止々亭宗山と號し四代は宗閑松濤庵と稱して茶人系譜に其名を列し現主人宗滴氏も家流を守りて時に茶杓を把る事ありと云ふ抑菅田庵は菅田村に在り往時藩主鷹狩の折往々駕を當庵に枉げられ入浴又は喫茶せし所にして庭前に矗立する老松數株あり三四萬坪もありぬべき廣き邸内の長露地を登り詰て玄關に達し扨て案内に連れて打通りたるは四

疊半に代目の附きたる一室にして不味公の實弟三助雅號を雪川又は爲樂と號して發句に堪能なりし人の向月亭と命名したる處にぞありける頓て清恬溫雅なる主人の出で來りて薄茶一服を侑むる儘菅田庵一見の希望を告ぐれば御安き御用とて快く案内せらる庵は向月亭と水屋を隔てゝ相隣し一疊代目中板にて洞床と云ふ極めて佗びたる茶席なり茅葺の破風には不昧公筆菅田庵の三字を陶器に燒附けたる匾額が掛り飛石蹲踞石などの奇古なる中に就き石燈籠は取り分けて何れも皆な結構なり菅田庵の圍を出でゝ向月亭の庭前より一望すれば牛の臥したらんが如き樂山、羽衣の掛りさうな津田の松原は更なり麥畑の間に隱見する大橋川に白帆の影の絶えず上下する風景など松葉隱れに見え渡りて身は高く塵寰の表に立つの想ありたり主人の許しを得て庭前又は庵室等を撮影する間に午後四時頃とも爲りぬれば急がはしく啼く流鶯の聲に促されて名殘惜しくも頓て此仙境を辭し去りぬ。

入雲日記（五）

菅田庵にて主人と雜談中普門院境内に觀月庵と稱する茶室あるを聞き歸途試みに立寄りたるに三齋流の宗匠木村宗七老人在庵にて丁度湯加減も宜ければ是非一服をと勸めらるゝ儘、遠慮なく押上れば二疊敷の佗びたる茶室の床に閑事庵一掌の二大字を掲げたり薄茶は其次の間の六疊に用意せられ古銅の花入に杜若を挿み茶碗水指など何れも出雲燒にて木村老人の手前あり聞けば老人は彼の閑事庵一掌の流れを汲む三齋流の宗匠なる由、一掌は荒井氏にて深く不味公の信賴する所と爲り公の著述「むだこと」にも「茶の湯を好む人は能く本意を知る師匠に稽古し給へ然し當時は本意を知る人少し只閑市庵の先生こそ予が意に適ふ者なれば此先生に修行あれかし」云々とあるを以て如何に一掌に傾倒したるやを知るべし不味公は茶事を石州流の大家にして半寸庵と號し幕府の御數寄頭たりし伊佐幸琢に學び後自ら工夫して雲州流を創めたれども是れは世間にて雲州流と稱したる迄にて自身にては「一流を立てず諸流我が流儀なり」と唱へて大に三齋流の一掌を引き立て爾後百年今尙ほ木村宗匠などの當地に殘存するは公が茶道に於て博愛主義を取りたる餘蔭と云はざる可からず當庵より樂山燒の竈元まで程遠からぬ由、聞き込みたれば序に一覽せばやと思ひ立ちて匆々庵主に暇を告げ暮れぬ先きにと車を急がせて行くこと凡そ十町ばかりにして竈元長岡住右衞門の門前に達せり幸ひ主人も在宅にて隈なく陶工場を案内し陶土の製法轆轤の用法其他樂山燒の特色に就きて仔細に說明する所あり且つ其起源に關して語りたる大要を聞くに松江二代の藩主綱隆公時代に長門の

陶工倉崎權兵衞なる者召に應じて此地に來り防長の陶土釉石を齎して萩燒に似たる點茶用の陶器を製造したる者を稱して權兵衞燒と云へり元祿七年權兵衞の歿するや門弟加田半六代りて其業を繼續せしが三代目に至りて一時中絶の姿と爲りたれば寛正年中不昧公致仕の後、長岡住右衞門に命じて樂山燒を再興せしめ自ら意匠を案出して茶用の器具を製作したるにぞ出雲燒の名聲再び世上に振ふに至れり斯くて文化十三年公は住右衞門を江戸に召し大崎の下屋敷に於て種々の陶器を製造せしめたるが是れ彼の出雲の御庭燒なり文政十年住右衞門老して二代住右衞門業を繼ぎ空齋と號して良工の名あり權兵衞の製品には稀に名を彫りたる者あれども印を用ひたる者なく往々高麗燒として世に傳へらるゝに依り空齋は藩主の許可を得て空齋又は空の一字を印したる由なり空齋の子空入より相傳へて五代目の現主人空味まで世々住右衞門と稱して家業を勵み山陰鐵道開通後は諸國の注文增加して斯業益繁昌に赴く由なるが今後益〻意匠を凝して陶器の形を吟味するに於ては本來茶味多き陶器の事とて再び權兵衞の名聲を回復するの望なきに非ず現當主の大に奮勵す可き所ならん工場一覽了り茶碗數個を買ひ求めて薄暮旅宿に歸着すれば松平伯爵家の松江寶藏主任米村信敬氏只今東京より歸任せりとて恰も來訪せらるゝに會ふ扨ては豫約通り明日寶藏拜見の都合を得べきかと雀躍しつゝ面會すれば氏は余が旅客たる身の上を察して長途の疲勞をも厭はず明日午前九時より寶藏開封に及ぶべしと云ふ此の如くして余等の遭遇したる眼福果して如何。

入雲日記（六）

十五日午後九時旅宿より程遠からぬ松平伯爵家用達所に赴き長屋門を入れば右に寶藏、左に用達所の玄關あり案内を乞ふて玄關を差覗けば金更紗を張り込みたる衝立の先づ燦爛として眼を奪ふに驚きて聞けば不昧公が大崎の隱居所に用ひたる者なりと云ふ金山は露頭より已に金色を現し居るに感服して扨て打通りたる上段の間には床に川田剛選の藩祖直政公紀念碑石摺を掲げ其前に緋毛氈を敷きて茲に什寶を披陳せんとする趣向なり頓て米村氏も出で來りて寒暄の挨拶了るや否や、先づ氈上に現れたるは

▲牧溪筆全身龍　上下茶地燒切、中一文字風帶共紫地印金麗しく岩に打寄する波の間に龍身の隱見する筆勢例の牧溪風を發揮して結構至極なり

▲梁楷筆李白　上下緞子、中紫地印金、一文字風帶朧黃地印金にて衣紋は淡墨二三筆にて之を描き履と頭髮に濃墨を用ひたる梁楷の慣手法面白く紙中に小さき落款あり

▲徐熙筆梅鷺　上下朧黃紬、中茶地銀襴、一文字風帶藍地印金にて鷺が梅の木に止まりて睡りたる風情、宋畫に比すれば時代の

古き丈け氣韻高邁なる處あるが如し

▲馮海粟墨蹟　上下焦茶紙、中大阪蜀金一文字風帶花色紗金、幅三尺竪尺二にして七絶三首あり日本晦上人無隱、一見知其爲法器書之奉贈、海粟として印三つあり鄉誠之助男の同人墨蹟と所謂兄たり難く弟たり難きものならん

▲雲峰妙高墨蹟　上下空色北絹、中紺地紗金一文字風帶紫地印金、經山寺の住僧にして至て珍しき筆蹟なり

▲伊賀瓢簞花入　高さ六寸上下二箇箆目一周し焦げビードロ藥とも十分なり

▲周丹士筆一葉觀音　葉上の觀音面相頗る結構なり

▲無準筆觀音　上下茶地金襴、中淺黃地兎模樣、一文字風帶黃緞、觀音波上の蓮華に横はる圖にして平常見受くる所の粗畫に非ず面相端嚴、全幅淡墨の隈を取り衣紋の軟かなる妙、言ふ可からず上方の自讃には徑山無準師範として印二つあり

▲梁楷筆六祖　上下紺地二重蔓古金襴、中朧黃地古金襴、一文字風帶丹地角龍、東山御物、相阿彌外題にて紙中白く松の樹下に六祖が經文を引裂く筆勢入神の妙あり酒井忠道伯所藏祖師竹を斬るの圖は元之れと二幅對なりしが何時の頃よりか分離するに至りたる由なり

▲任康民筆雜貨擔兒圖　圓窓中の密畫にして細線なり

▲楚俊明極墨蹟　紙中極めて白く二音の偈あり建武乙亥閏十月初九日記于小林禪院とあり

感嘆聲裏に以上數點を見了りたる處に米村氏が恭しく差し展べたるは上下茶地北絹中紺地上代紗にて利休の表裝に係り蒲生氏鄉が愛藏したりと云ふ南楚禪師の墨蹟なり南楚は元初の大德にして本邦の鐵舟濟首座が歸國に際し爲に送別の辭を書き與へたる者卽ち是れなり氏鄉の孫忠知死去せし後、其室松壽院故あつて土方河内守に讓り渡したる證文は左の如し

受取申金子事

一越南楚掛物代金二百八十枚なり小判にして二千三十兩慥に受取相濟申候

明暦未七月三日　　土方河内守様　　松壽院

今より凡そ二百六十年前の明暦時代に二千三十兩とは驚き入たる貴重品に非ずや當時の小判を今日の相場に引直して其實價を計算したらば果して幾萬圓に相當すべきや近來美術品の代價日增しに騰貴するは本氣の沙汰とも思はれずなどゝて頻に驚嘆する者ある由なれども物に依りては未だ〳〵德川時代の夫れに及ばざる者多し古來名品に價なしと云へば今日の美術品を氣狂ひ相場など稱する者が他年顧みて却て自ら憫笑するの時なしとも云ふ可からず好事家の大に勘考す可き所ならん。

入雲日記（七）

南楚禪師の墨蹟を熟覽し了りて後午餐の饗應に預り暫時休憩して又々拜見に取掛りぬ

▲門無關筆布袋　上下二重蔓古金襴中大燈、一文字風帶滑錢金襴にて無準師範禪師の讃に天宮不肯住、闤市討便宜、擧目無知己、回頭望阿誰とあり布袋が袋を地に投げ棄てゝ啞然として笑ひ居る圖にて全體淡墨を以て描きしも眼睛に一點の濃墨あるに依り眉目生動、殆んど其笑聲を聞くが如く妙筆神に入るものと云ふべし

▲桂漿香合　桂漿は堆朱堆黑等の類なる由にて手取り輕く直徑二寸二分飴色にして蟷螂の模樣あり

▲ハシカ彫丸香合　麒麟の模樣あり

▲堆紅香合　蟹に波模様あり

▲時代蓬萊香合　鎌倉時代蒔繪、表面蓬萊島、内松葉模様あり青貝入り錫縁完全なり

▲保元時代花丸香合　錫縁にて松平家に有名なる蝶の手函の蒔繪を見るが如し

▲時代花橘香合　錫縁寮れ時代は花丸香合に同じく遠州箱書附なり

▲染付寢牛香合　吳洲藥結構にて白地に藍牛なり形物なるべし

▲吳洲赤繪兎香合　甲は赤中に白兎現はれ周圍は菊形十六葉にて赤模様中に朋黃藥團々散點し銘を裾野と稱せり不味公の秘愛にて最も珍しき者なる由

▲古三島茶碗　時代十分緣に寮れあり外側白藥の間に青き二本の筋ありて大に其景色を添へたり

▲古刷毛目茶碗　刷毛目内濃く外淡く高臺の瓣青くして竹の節美事なり光悦箱書附にて銘を清水と云ふ

▲粉引茶碗　大形にて廣澤と銘せり

▲千種伊羅保茶碗　大阪の千種屋に有名なる千種伊羅保の茶碗あり千種の名も因て生じたるならんと思ひしが此茶碗に就て考ふれば尙々古き名なるが如し是れ持手に因ての名か或は釉色の變化多種なるに因ての稱か宜く研究すべき所ならん稍小服にして色彩の面白きのみならず其形も利巧にして寸分の隙なき名作なり

扨て此處まで拜見せしに何れも名物揃の事とて思ひの外に時間を費し早や午後五時にも爲らんとせ

し折柄、今日の打止めとして米村信敬氏が六尺豐なる大兵の肩に大形なる笈を負ひノソリ〳〵と寶藏より出で來りて恭しく之を毛氈の上に卸したるは天下古今の名物と知られたる油屋肩衝の茶入にぞありける是れより先き余の米村氏に東京に逢ふや談先づ油屋肩衝に及びたるに米村氏は氣の毒さうなる面持にて昨秋益田孝氏大阪の戸田露朝等と松江に來遊の時、油屋肩衝を一覽して斯かる大名物は取出す毎に知らず識らず多少の手摺れを生ずるの恐れあれば此度拙者等の拜見を最終として最早重ねて御開帳なき方然る可しと忠告せられたるが如何にも尤の次第なりと存じて爾後人に示さざるやう覺悟致したれば此義豫め御承知ありたしとの挨拶なり是に於て余も大に當惑し遙々雲州の果まで下りて油屋肩衝を一覽せざるに於ては寺に參りて本尊を拜まざると一般、信者の忍ぶ可き所に非ず左れども當面に於て之を爭ふは不可なり追つて雲州の本陣に乘り込んで何とか口說く可き手段もあるべしと思ひ其儘別れて松江に赴き扨て米村氏の東京より歸り來りて余が旅宿を訪はるゝや雜談中余は米村氏に向ひ今朝不味公の墓參りせしに圖らず不思議なる御詫宣を得たり姿は見えざれども墓邊に聲ありて箒庵遙々の下向、大儀に存ず豫て茶事執心の由承れば余が年來集め置きたる茶器を十分に披見し苦心の程をも能く〳〵推察せられよかし取分けて油屋肩衝は余が秘愛の名物不

味が油屋か油屋が不味か殆んど一心同體とも申す可き者なれば之を一覽して余に面會したる心地せられよと言はれたる其聲今尚ほ耳に殘れり武士の情と云ふ事もあれば茶人にも亦情なかる可からず不味公の御詫宣は必ず斯くある可き筈なり斯かる御詫宣を受けたる以上は餘人は知らず拙者丈けは是非とも彼の御茶入を拜見せざる可からずと逼りたるに米村氏も此御詫宣には我を折りて今日終に余の懇願を承諾するに至りたる次第なり。

入雲日記（八）

油屋肩衝は古今名物類聚大名物部開卷第一に松平出羽守所持として詳細の圖說あれば讀者の就て參考せられんことを乞ふ但し袋は當時二つなりしものが今は六つとなりて

一本能寺緞子、裏紫海氣、緒つかり紫　一宗薫緞子、裏紫紋海氣、緒つかり遠州茶

一下妻緞子、裏紫紋海氣、緒つかり紫　一太子廣東、裏紫紋海氣、緒つかり遠州茶

の四個を增加せしが是れは大方不味公の物數奇に成りし者なるべく其太子廣東の今織りたらんが如く綺麗なるには先づ以て一驚を喫せざるを得ず而して松平家道具帳の油屋肩衝の部には不味公自筆にて「右油屋肩衝者古今天下の名物にて候條永々粗略有之まじく大切に可致家寶者也」と記して治鄕

の印あり此茶入と圓悟禪師の墨蹟は不味公の二大重寶にして彼の米村氏が負ひたる桐製の笈に納め往時參勤交代の節は勤番の士之を負ふて常に御駕籠側に附添ひ行住坐臥殆んど公の身邊を離さゞりしと云ふ抑〻油屋肩衝が大名物中の首位を占め古來好事家の珍重する所以のものは果して那邊に存するや今ツラ〳〵此名物を拜見するに普通唐物茶入の飴色鼠色又は黑色なるに似ず茶褐色の斑藥、一見瀨戸燒の如く藤四郎が入宋して唯一の模本と仰ぎたるは正に此燒物ならん左れば其形の上品に其作の精巧なるが比類稀なる名物と爲りしならんと雖も其尤も尊重せらるゝは主として瀨戸竈の本尊たるが爲めに非ずや敢て識者の敎示を乞はんと欲するなり扨て又圓悟の墨蹟は目下東京の松平家本邸に在り當日拜見の榮を得ざりしが是れは元堺の祥雲寺に在りしを不味公が卽金千兩永代扶持三十俵の約束にて終に徵發し得たる者にして給米は維新當時まで引き續き凡そ七十年間に亘りたる由なれば右墨蹟代として金千兩の外に二千百俵の米が寺納せられたる筈なり不味公の買振りの如何に鷹揚なりしかは此一例を以て知る可きなり兎に角一は茶入の橫綱、一は墨蹟の大王を己が一笈の中に收めて天下を濶步したる不味公の武者振り想ひ遣るだに中々壯快なる事共なり。

十六日午前八時半再び松平家用達所に至り昨日に引續きて又々拜見したる品々は大名物の玳玻盞天

目、中興名物の茶入の中、富士山、初祖、宮城野、辨舌、手枕、佗助の六點なり此大小名物は孰れも古今名物類聚中に明細なれば讀者の自ら參考するに任せて余は最後に一覽したる加賀光悅を紹介せん加賀光悅は赤茶碗にて色合は紀州家の緋縅に似て形は彼れよりも遙に小さく且つ頗る澁味あり宗乾の書附に「於加賀仙叟所持」とあり如何にも仙叟の如き佗び茶人の好みさうな茶碗にして赤藥の中に雲の如き白藥あり外側に靑き飛雲ありて高臺裏に黑藥掛り例の篦目ありて手强き作行き面白く米村氏が此茶碗は手で造りたるに非ずして腹で造りたるなりと說明したるは適評なりと云ふべし扨て昨日以來名器の數々を拜見したれども寶藏の奥深きこと測り知る可からずソト御道具帳を瞥見するに中興名物御茶入のみにても實に左の如き多數を所藏せらるゝは只管駭服の外なきなり。

富士山唐物　木守海鼠手　辨舌新兵衞燒　宮城野野田手　比丘貞大覺寺手
忘水川なの手　藻鹽小瀨戸　增鏡翁手　思川唐津　吸江面取
佗助新兵燒衞　吹上文琳唐物　色面取　漂澪纖部燒　振皷門萬右衞燒
磐余野大島大瀨戸　選屑凡手　村雨玉柏手　春雨廣澤手
蓬生凡手生野丹波燒　瀧浪天筒山口廣　垣根澁紙手

手枕高取燒　藤重眞如堂手　凡川　增鏡玉柏手　木枯飛鳥川手
貯月藤四郎　春慶口甄簞　谷甫十薩摩燒　鈴鹿山大瓶手
初祖正意燒　節季小瀨戸　大江膳所燒　潮露庵澁紙手　藤波
大津神樂岡眞如堂手　吳竹廣澤手　志賀瀧涙手

入雲日記（九）

先年赤星彌之助氏が存生の頃、名物茶入二十六を所持せりとて大に同好者を驚かしたる事あり又曾て酒井忠道伯の藏器を拜見せし時、名物茶器三十餘點を陳列せられたれば扨て有る處には有るものよと人皆舌を卷きたる事あり然るに松平伯爵家には中興名物のみにても已に四十餘點の多きに上り大名物中興名物の書畫器具一切を總括すれば名物の數、百有餘點に達する由、此くの如きは往昔の慈照院豐太閤と雖も遠く及ばざる所にして之を蒐集したるは大抵不味公なりと云へば此點に於て公は天下古今第一人と稱せざるを得ず是に於て余は不味公の事蹟を研究し公が如何なる人物なりしか如何に茶事に堪能なりしか又如何にして彼れが如き名器を買收し得たるかを記述せんとするの志

望を生じ松平家の依囑を受けて目下不味公の行實を編纂中なりと云ふ京都大學教授三浦周行氏に面會し又松平家をも訪ふて材料一覽の事を申込みたれども迚も今回の間に合はざる都合を承知したれば遺憾ながら之を他日に讓り從來余が聞知し居たる事實を綜合して覺束なくも聊か讀者の參考に供する事とは爲せり。

不味公は德川家康の子越前秀康の三男直政公より六代目なる天隆公の第二子なり母は大森氏、寶曆元年二月十四日に生れ幼時鶴太郎と稱し諱は治吉、後治鄕と改む一々齋不味、未央庵宗納は其號なり明和四年十七歳にして封を襲ぎ安永三年松平陸奥守の女彰姬を娶れり是れより先き天隆公在職中は當時各藩の流行病たる財政窮迫の深淵に陷り積弊の致す所之を如何ともする能はず然るに天隆公は自ら見るの明あり自身隱居して大改革の事を全然新主の手に委するを得策とし國老朝日丹波茂保を拔擢して後見兼執政と爲し藩政を擧げて總て其爲す所に任せたるは公も亦凡器に非ざりしが如し斯くて朝日丹波の後見職と爲るや先づ情弊の依る所を察し大阪商人に謀りて藩債償却の方法を立て奢侈を戒め殖產を勸め敎育を振興し水害を豫防し一藩風を望んで治蹟大に擧りしかば公は偏諱を丹波に賜ふて鄕保と稱せしめ丹波の聲望隆々として殆んど冲天の勢あり時謠に

朝日丹波さんは及びもないがせめてなりたや殿さんに

と云ふもの其一斑を說明するに足らん不味公は襲封匆々藩政困難の中に日を送り朝日丹波の實物敎育に親炙して施政上に自得する所少からず三谷長逵と謀りて佐陀川開鑿に着手し七萬餘人を使役して幅二十間長さ二里餘の運河を作り湖水を北海に注ぎて新に耕田を得ること數萬石に及びたりと云ふ公は常に武道の廢頽を慨し大に之を振起するの志あり從來藩の軍制は專ら山鹿流に準據せしが公は禪理を天眞寺の大巓和尙に學びて兵事に發明する所あり、越後流の敵狀に應じて變化自由なるを認め終に之を採用するに至れり公又甞て人參栽培の有利を知り人をして變裝して日光なる幕府の人參栽培所に入らしめ其秘方を傳習して雲州人參の產出に成功せしかば當時公と昵懇なりし薩摩の藩主島津重英等の說を聞き其人參を長崎に送りて支那貿易に巨額の利益を占めたりと云ふ斯くの如くして公は在職三十餘年間に最も內福なる諸侯と爲り五十歳にして家督を子息月潭公に讓り六十八歳にして薨去するまで隱居十八年間は茶事三昧に消光するのみならず兼て蓄積したる富力に依りて名品佳什の買收に餘念なく晩庭の蝦蟆がバクリ〳〵と蚊を呑むが如く公の魔力に引き附けられて天下の名器爭ふて其口腹を充すに至りたるは今度拜見したる一部の道具に依て見るも思ひ半ばに過

ぐ可きなり

入雲日記（十）

不昧公は幼少より茶事を習ひ公の茶道觀「むだこと」は明和七年の著述にして實に公が二十歳の時卽ち襲封後四年目にして朝日丹波と共に藩政改革の最中なりしかば先づ茶政一途論より始めて今の世茶の湯は唯慰み一通りのやうに心得れども此道を得れば天下國家を治むる助けと爲るべし一心を修め愼み清淨潔白を本として禮樂兼備はり親疎貴賤の隔てなく一和の業を爲し人君の人を使ふにも之を以て助けとせば誠に善人を得る事疑ひある可からず中以下にても一家の治め一身の修めと爲す事其意味變ることなし夫れ人は常に手隙なく居る者なり慰みなくして獨居する時は色々の惡き事を考へ出すものなり茶を知らぬ人は只慰みばかりのやうにおもひ金錢を費して奢を爲すなど云ふことは此妙道を知らざる故なり

と喝破し夫れより利休の敎訓歌を引用して茶事儉約論に移り

利の歌に「釜一つ持てば茶の湯はなるものをよろづの道具好むはかなさ」「茶の湯とは唯湯をわかし茶をたてゝ飲むばかりなる本を知るべし」とある末の一首本を知るべしと詠じたる本の字に心あり扨て又道具の事釜一つ持てば茶はなると申しても茶入茶碗なくては茶は點てられず然れば茶の氣の消えぬやうにありたく古き茶入茶碗水指を好む事なり新しき茶入は土氣ありて茶の氣を消すものなり如何にも土氣失せて古きを好むべき事なり水指茶碗も之れに同じ塗物の茶入も漆の氣ぬけて茶の氣に障りなきを宜しとするゆゑに後人取違ひ古びを好む事になりしは茶の道の違ひと同前なり當世は茶の湯とて人を招ぎ茶の湯は第二とし客も道具を專に褒め主も亦道具を自慢して懷石は懷石の法を知らぬゆゑ色々の事を思ひ付き金銀を入れて客を呼びながら佗ごとを思ふ事片腹痛き次第なり

と世間の道具茶家に痛棒を喰はしたる當年の不昧公は例の「釜一つ」主義なりしが如し古來茶に入るの門は儉約論より始まれど段々奧深く進むに隨つて道具は好きが好く趣向は面白きが面白く所謂「釜一つ主義」の宣敎師が天下第一の道具持と爲り替る事誠に奇觀なるが如くなれども是れが茶道當然にて何人も依て件の如くなる徑路を通過するに至るは實驗者の每度體認する所なり不昧公が盛に道具を買入れたる頃茶友にして妹婿なりし朽木不見公に送りたる書簡は其趣を表明して頗る興味

あるものなり

御手紙拜見仕候日々暑氣御座候得共御壯健御事珍重奉存候然ば田沼口の義宗振ふら〳〵と申上候事と奉存候甚右衛門能く存候間御尋可被成候私儀は大弱りにて候得共世話を致し遣し據所なく需め候品少々申上候嘘もなく候間左樣思召可被下候山雀（中興名物茶入）は未だ實れ申さず是れは中々急に出で申間敷候是れも私より申置候義右之候間外に出で申す事には無之御望みも御座候へば掛合ひ可申候何れにも御出での上可申上候私需め候去年以來の品々明白言上候事實正也

殘月○瀧○坂本井戸○舞學梅之繪○燒楷二幅對○凡○木枯○天筒山○手枕○垣根○藤重○加賀井戸○天狗（長次郎赤）○芋の子○河菜草

（信樂）○圓城寺花入○遠浦歸帆（牧溪八幅の内）○江戸とゝや

先づ去年以來今日まで斯くの如く御座候此上に望みの品も御座候得共右の通り弱り果て見合せ申候最早世上に涙人の者畠山、廣澤、望月、逢坂其外唐物の類、羽室の類、郷邊江戸かけて五つ六つ三輪山は福地山（朽木不見公實父）に納り鬼の餌と爲り申候何も其外得はえれなく荷口の殘り無之由に被申候荷口の内にて空中水指、備前水指、刷毛目茶碗、志野茶碗、蔑古林墨蹟など私需め中々一文の飴も買はれぬ身の上と成り果て唯小豆のみの宿禰にて候以上

水無月　　不見庵主公　　不味

此手紙に現れたる不味公の購買力は實に驚き入りたる者にして一文の飴も買はれず小豆のみの宿禰と成り果つる返手當り次第に買入るゝ物凄さ今日大阪の岡橋治助氏東京の根津嘉一郎氏など猶ほ幾倍の奮發を爲さゞれば容易に其足元へも寄り附く能はざるべし

入雲日記（十一）

不味公は茶を石州流の伊佐幸琢に習ひ禪を麻布天眞寺の住持たりし大巓和尙に學ばれたり嘗て自ら告白する所に據れば碧巖第一則達磨が梁の武帝に對へたる不識の一語に悟る所ありたりとの事にて晩年の詩歌文章には妙諦を會得したるが如き口吻あり茶礎と題する一文には公が茶道觀を道破し又其遺偈には喫茶喫飯、六十八年、末期一句有傳無傳とあり嘗て如何なるか是れ茶味と云ふに答へ「茶の湯は稻葉に置ける朝露の如く枯野に咲ける撫子の如し斯く心得て數寄する人は數寄の數寄たる所に至らんか」と云へり人と爲り多才多能にして詩を作り文を屬し書は定家樣にして殆んど遠州の壘を靡し畵讃又は茶器の箱書附など尤も得意とする所なり茶事に於ては頗る意匠に富み茶杓を削り花入を切り其好みに依りて製作したる器物少なからず萬代屋釜、面取釜、靑銅棒の先建水、欅地筋入棗、桐の實の香合、柿の實の香合、塗物張甲牛寫香合等皆其好みの形にして釜師には高橋因幡、蒔繪には小島漆壺齋、彫刻には小林如泥、陶器には長岡住右衛門の如き名匠ありて公の爲めに各其技能を盡せしかば茶器の好みに於て公は實に遠州以後の第一人と稱せらる嘗て禪理に省る所ありて大圓庵と號し白紙に圓形を描きて自ら讃辭を書きたるものあり茶道に於ては所謂大同團結にて諸流皆我が流儀なりと唱へ石州流を學びながら三齋流の閑市庵一掌を敬重し尤も小堀遠州に傾倒して大德

寺孤篷庵（遠州の建立せし塔頭にして其墓所あり）中に大圓庵位牌所を設け千古の知己として死後合祀の意を寓したるが如き其一端を窺ふ可きなり或る時公が遠州に就て戯作したる御沙汰文は其遠州景慕熱の如何に盛んなるやを推測すべきものなれば左に掲ぐ

或る御役所にて被仰渡候思召左の通り

一應仁文明の頃より茶事行はれ茶器類賞翫有之候へども未だ微細に吟味も無之其後天正文祿の頃專ら直段等も定り候へども在々所々に至りては不辨者も有之候處寛永年中小堀遠江守政一公茶事に被達 殊に器の新古和漢等の直段夫れ〴〵に被分、夫れより已來數寄道具屋共家業繁昌仕り今日安穩に家内を育て候も政一公の御茶德故に候所、端々には右御茶恩忘却仕候者も有之哉に被存候右體の儀有之間敷事に候條當年より二月六日は數寄屋清淨に致し早朝より釜かけ掃除等念入慎み可被申鳴物は無用可被致候、

鉦は不苦候尤もガンと云はぬやうに可被致候此段申合候條御達申候

不昧公の茶事に就ては奇談逸話少からず中には好事家の戯作談さへ交りて之を記述すれば一部好奇の茶話たるべしと雖も余は餘りに冗長なるを恐れて爰に擱筆する事とは爲せり

扨て十六日午前十時松江發の汽車に乘り込みて同夜十時過ぎ京都に着し翌十七日は新門前なる林新助氏の新宅に招かれ壯大なる骨董品陳列所縱覽の後有樂曆の席寫しの茶席にて薄茶の接待にあづかりたるが曆の席は全部東京今井町の三井男爵邸に移されたるに如何にしけん有樂が豐公より賜はりたりと云ふ釜山海と彫銘ある同席附屬の蹲踞石のみ林氏の手に入りたれば終に此席新築を思ひ立ちたる所以なりとぞ朝鮮石にて形小さけれども海深くして古色蒼然誠に得難き名物なり斯くて同夜汽車に乘り翌十八日朝東京に歸着して玆に雲州旅行を終了せしが松江に於ては寶の山の奥深くして實に其麓より引き返したるにも拘らず大名物第一の油屋肩衝、中興名物首席の富士山を拜見することを得たるは人生容易に逢ひ難き眼福にして東坡の所謂玆遊奇絶冠平生とは誠に此行の事なるべく爰に謹んで松平伯爵家の好意を鳴謝するものなり

東都茶會記第一輯中卷終

202
279